
盗賊ブレイブ@勇者パーティー御一行様～出会い～

ブレイブ&秋留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盗賊ブレイブ@勇者パーティー御一行様へ出会いへ

【Nコード】

N0240D

【作者名】

ブレイブ＆秋留

【あらすじ】

【ブレイブシリーズ0】俺が冒険者になって、七年が過ぎた。すでに数々の冒険をこなしてきたが、決まったパーティーは組んでいない。今度の依頼は国を相手にするという、胡散臭い仕事だ。乗り気はしないが、金にはなる。ま、俺の腕と、この銃でとつと終わらせてやる。と、簡単に引き受けたが、やはり厄介な仕事だった。まさか、カリキュや秋留とこんな形で出逢うとは！！この時の俺は知る由もなかった…。

プロローグ

平凡な暮らしに飽きた田舎の若者や賞金稼ぎを生業としている怪しげな集団が、一攫千金目当てでやってくる夢と希望の大陸「ゴールドウィツシュ」。

この大陸にある山々からは稀にだが金が採れる事がある。その黄金を目当てに他の大陸から渡ってきた沢山の人々でアラム城下町の酒場「ブルーバード」は賑わっていた。

黄金を手に入れた事を上機嫌に語る若者や、一攫千金に失敗して意気消沈している三十代の男。

俺はカウンター席に座り、一人寂しく冷えたビールを飲みながら店内を観察していた。

この大陸には希望や夢が溢れているが、それらの感情と同じ位、嫉妬や恨みのようなマイナスの感情も多く渦巻いているようだ。

俺が故郷のイクシム大陸を十四歳の時に旅立ってから七年が過ぎた。

七年間で数々の冒険を体験し、魔族討伐組合から多額の報奨金も何度が受け取っている。他人とパーティーを組んで魔族討伐に向かい、死ぬ思いをした事もあった。

そうして自分の命を削るような毎日を送りながら、他の大陸で魔族やモンスターを倒して金を稼いでいた俺は、この「ゴールドウィツシュ」大陸に一昨日到着したばかりだ。

「お客さん」

目の前のカウンターの向こう側でグラスを布巾で拭いていた、この店のマスターと思われる男から突然話掛けられた。マスターは真っ黒の髪の毛をオールバックにしてベストを着ている。年は四十歳位だろうか。

俺は人見知りが激しく、知らない奴に話掛けられる事には慣れていなかったが、愛想よく返事をした。

「なんだ？」

俺の返事に一瞬マスターは怯んだような顔を見せたが、めげずに話し掛けてきた。

「お客さんもこの大陸へは一攫千金を夢見てやって来たんですかい？」

俺は黄金を掘り当てるためにこの大陸に来た訳ではない。モンスタ―の巣窟にもなっている山に入って、あるかも分らない金を掘り当てる作業は無駄以外の何物でもないと思っているからだ。

俺の目的は金を掘り当てようとする一般人のボディーガードか、山に住み着いているモンスタ―の退治が目当てだ。

黄金のお陰で物価の高いこの大陸では、今までの倍の早さで金を稼ぐ事が出来そうだ。

マスターからの質問に対して、知らない人間と余り関わりたくない俺は「そうだ」と一言だけ言っていると、勘定をカウンターに置いて店を出た。

一年中が平均して暑いこのゴールドウィッシュ大陸でも、九月の夜の風は心地良く、酒で火照った身体には丁度良かった。

それにしても、最近前より痩せたせいか酒に滅法弱くなった気がする。前はビールの五、六杯は平気で飲めたのだが、今は中ジョッキ一杯でほろ酔い気分となってしまう。

俺は酒場を出たその足で城下町にある魔族討伐組合へ向かった。

この城下町にある魔族討伐組合は、冒険者のために二十四時間その扉を開いている。

小さな町や村にある出張所では日が落ちると同時に終了する事が多いのだが、さすが大国アラームと言ったところか。

既に夜の十時を過ぎているが、灰色のレンガで出来た三階建ての

建物の周りにはまだ数人の冒険者らしき人々がいた。

魔族討伐組合とは、冒険者に対して魔族やモンスターに関する情報を提供してくれる民間の企業だ。どこかでモンスターに襲われている村があれば、その村の情報と報奨金の額を教えてくれる。荷物の運搬や人探し等、便利屋に近い依頼も数多く取り扱ったりしている。

俺は目の前の木製のドアを開け、魔族討伐組合の受付のある部屋に入った。部屋の中は、俺と同じ考えを持った報奨金目当ての冒険者達で長蛇の列が出来ている。

仕方なく列の最後尾に並び、部屋の中を観察する事にした。入り口左には大きめの掲示板が備えつけてあり、そこには『パーティメンバー募集』や『攻撃魔法が得意な魔法使いを探しています』などの紙が貼られている。

魔族討伐組合に千カリム支払えば、誰でも掲示板に告知を載せる事が出来るような仕組みになっている。

俺は五メートル程離れた掲示板に貼られている紙を一つ一つ眺める事にした。

ある程度冒険を重ねた盗賊であれば、五メートル以内の文章程度なら簡単に読む事が出来る。

そう。

俺は魔族討伐組合に籍を置いている盗賊だ。イクシム大陸の魔族討伐組合で盗賊として登録してから七年が経過した今では、瞬時に眼に意識を集中させて細かい文字を読む事も出来るようになった。駆け出しの盗賊では五感に意識を集中させるまでに二、三分かかりたりする。

さて……。

早速不届きな文章が俺の眼に止まった。

『パーティメンバー募集 僕は職業が戦士でレベルが三の駆け出

しの冒険者です。もし一緒にパーティー組んでも良いという方はご連絡下さい。女性大歓迎です。連絡先は……」

魔族討伐組合は彼氏・彼女を探す出会いの場ではないという事を理解していないようだ。このような不純な動機で冒険者になったような輩は、毎日命を削るような生活については来れないだろう。

俺は今まで異性にうつつを抜かすような事はしていない。いつ危険に見舞われるか分らない冒険者にとって恋人という弱点を作る訳にはいかないのだ。……決してモテないからではない。

それからたつぷり一時間程待たされて、ようやく俺の順番が回ってきた。目の前にはカウンターがあり、三人の組合員が横一列に並んで冒険者の相手をしている。

俺は一番左の壁際の席が空いているのを見つけて、前の冒険者で温められた木の椅子に腰を下ろした。人の体温で暖められた椅子に座るのは生理的に嫌なのだが、ここは我慢する事にする。

「本日はどのようなご用件でしょうか？」

カウンターの向こうの組合員は、多くの冒険者の相手をしたためか態度が事務的になり、クマの出来た顔は無表情で冷たく見える。

上着の胸ポケットには名札がついていて亜細李亜大陸^{アジアリア}の出身と思われる名前で藤堂と書いてあった。

藤堂は俺の姿を一瞥すると、再び手元の資料に眼を落とした。

ここで働く人間は魔族討伐組合の扉と同様に、二十四時間働きっぱなしなのだろうか。

「この大陸での手頃な依頼はあるかな？」

「貴方のお名前、それから現在の職業とレベルを教えて下さい」

目の前にいる二十歳位の女の組合員、藤堂は、尚も事務的な態度を取り続けている。

常に机に置いた資料を見ていて、俺と眼すら合わせようとはしない。

「名前はブレイブ。職業は盗賊でレベルは三十だ」

俺も負けずに事務的な態度で臨む事にした。シャツの内側に首から鎖で下げている身分証を藤堂のしている資料の上に掲げる。

この身分証は特別な金属と製法で作られており、名前や職業、レベル等がプレートに刻印されている。偽造されないようにという魔族討伐組合側の配慮だ。

藤堂は俺の差し出した身分証を凝視すると今まで下に向けていた顔を上げ、俺の眼を直接見て話し掛けて来た。

「ブレイブ様程のレベルの方なら、どのような依頼でもこなせると思いますよ。何かご要望はありますか？」

どうやら俺の格好を見て駆け出しの冒険者だと思っていたらしい。俺は黒のスーツを身につけていた。一見すると普通のビジネススーツのようにも見えるのだが、俺の装備しているダークスーツは、生地に鋼の糸が編み込まれている特注品だ。

態度が百八十度変わった藤堂に向かって俺は皮肉を込めて聞いた。

「俺のレベルに見合う、報奨金の高い依頼を紹介してくれ」

「少々お待ち下さい……」

藤堂は手元の資料をペラペラとめくり、あるページで手を止めた。その左手の薬指には銀色に光る指輪を付けている。結婚しているようだ。

「ホープキング山への金塊掘りの護衛で、レベル二十五以上の冒険者を対象とした依頼が来てます。期間は金塊が見つかるまでですが、報奨金は千万カリムです」

報奨金は大きいが『金塊が見つかるまで』という事は、報奨金は発掘した金塊で支払うつもりらしい。つまり、この依頼者は現在金も持っていない貧乏人という事だ。金塊が見つからなかったらどうするつもりなのだろう。

「他の依頼はないか？」

藤堂は再び手元の資料を調べ始めた。

「えっと、同じホープキング山への護衛の依頼ですが、こちらは目的は明かせないと言う事です。期間は目的達成までで報奨金は五百

万カリムですが、前金として百万カリムも支払われます。全部で六百万カリムですね」

先程の依頼に比べると、前金もある今度の依頼は良い条件だった。目的は明かせない、というのは少し気になるが、金が貰えるならどんな事にも付き合うつもりだ。

「詳細を聞かせてくれ」

藤堂の話をまとめると、依頼主はマクルスという名前で三十一歳。この城下町で武器屋アームズを営んでいるらしい。武器屋の評判は良く売上も好調のようだ。

俺はマクルスの依頼を受けるため、明日早速、武器屋アームズに行く事にした。

夜遅くなり冒険者の少なくなった魔族討伐組合を出たのは、日が変わる寸前だった。

黄金によつて栄えている城下町の通りを歩いているが、さすがに夜遅い事もあり、人通りもまばらになっていた。

俺は一昨日この城下町に到着してからは、一泊七千カリムで朝食・夕食つきの安めの宿屋『ゴージャス』に泊まっている。

宿泊料と宿屋の名前が一致しないゴージャスを目指して歩いていると、どこかで助けを求める声が聞こえてきた。

ハンカチか何かで口を抑えられているらしく声がこもっていたが、盗賊である俺の耳には、女性が「助けて」と言っている声がはっきり聞えた。場所は今歩いている通りからそれ程離れていないようだ。しかし金にならない事はしない、をモットーにしている俺は聞かなかった事にし、そのまま進む事にした。

「た、助けて下さい！」

暗がりの続く通路の角から女性が飛び出してきた。

さっき声を聞いた時から分かっていた事だが、女性は俺の進行方向で襲われていたらしい。

目の前に倒れ込んだ女性に手を差し伸べながら、さりげなく観察

すると金色の髪をした二十歳位の女性だった。

建物の隙間から入る微かな月明かりに照らされ、長い髪がきらきらと輝いている。

結局、金にならなくても助けてやるしかないわけだ。

「どうしました？ お嬢さん？」

俺はとりあえず、お決まりの台詞を言っ て相手を安心させてやる事にした。

その時、女性が飛び出してきた暗闇から無骨な野郎三人組が現れた。男達が立っている場所は丁度建物の影になっていたため、俺の眼でも顔を確認する事は出来ない。

「兄ちゃん悪いんだが、黙ってこの場を立ち去ってもらおう」

中央に立っていたリーダー格らしき巨漢が言った。

願ったり叶ったりの俺は何も言わずにその場を立ち去ろうとした。

「てめえ！ 待ちやがれ！」

俺の目の前に、巨漢の隣にいた細身の男が立ちはだかった。その右手には短剣が握られている。

「どうした？ パッシ？」

巨漢の男は、目の前で真っ赤な眼をして俺を睨んでいる細身の男に言った。どうやらパッシという名前らしい。パッシ……。どこかで聞いた名前だ。

「こいつ、ブレイブだ！」

パッシは言った。俺はレベルは高いが、まだ知名度が低いため雑誌に取り上げられた事はなかったはずだが、なぜか目の前にいるパッシと呼ばれた男は俺の事を知っているようだ。

「なんだとお？」

暗闇から巨漢の男が月明かりの下に出てきた。頭はスキンヘッドで眉毛もなく一見すると海に棲むタコのようなうだ。俺はこの巨漢を知っている。

「よお、久しぶりだな、タコール。元気だったか？」

「俺の名前はタカールだ！ 貴様、よくも俺達の金を奪ってトンズ

ラしやがったな！」

間髪入れずにタコールが言った。

俺は今まで数々のパーティーに加わったが、気に食わない場合はパーティー全員の所持金や高価な装備品などを世のため人のために預かる（奪った訳ではない）事になっている。

タコールのパーティーも例外ではなく、俺は奴らのやり方には嫌気が差しミッション終了と同時に、所持金とタコールの持っていたゴールドアックスを預かった。

「ブレイブ！ よくも俺の大事な短剣を盗みやがったな！」

目の前の盗賊パッシがその細身の身体に似合わず甲高い声で怒鳴っている。

こいつは同じパーティーに盗賊二人もいたから目立たなかったが、いつも俺の事を眼の仇にしていた。

存在が薄かったせいかな、俺はこいつの名前と顔をすっかり忘れていたようだ。

パッシの言う通り、こいつが持っていた精霊の短剣も預かったのだが、武器屋に売っても一万カリムにしかならなかった。まだまだ俺も未熟だな、と思った一瞬だった。

暗闇から三人組の最後の一人、ザムが出てきた。黒い短髪で背は俺と同じ位だが、年齢は少し上だろう。

こいつはいつも何を考えているのか理解出来なかった。

職業は武道家を名乗っていたが、背中には刀を背負っていた。こいつの刀は高価そうだったが、ザムの存在感の不気味さから預かる事はしなかった。

「借りは返させてもらうぞ」

タコールはそう言うのと巨大な斧を構えた。俺が預かったものよりも高価なように見える。

俺は腰のベルトの左右に下げているホルスターから二丁の愛銃ネカー&ネマーを取り出して構えた。俺はこの銃を冒険者として出発した時から大事に使っている。

銃自体は軽い素材で出来ていてネカーが金色でネマーは銀色だ。

「おりゃあああ」

タコールは両手で斧を構えながら、俺に攻撃を仕掛けてきた。あいつの巨体が地面を踏みしめる度に島全体が揺れているような感触を受ける。

俺はタコールの鈍い動きとその斧の攻撃を身体を半分ひるがえしてかわした。すれ違い際に奴のピチピチのズボンに下がっていた錢袋を奪った。俺はタコールの後ろに回り込むと得意気に奪った錢袋を右手に掲げて揺すった。

「貴様あ！ 性懲りもなく、またやりやがったなあ！」

俺が得意になっていると、突然後ろから右手に下げた錢袋を盗賊のパッシが奪い返した。

「へっへっへ、タカールの錢袋は返してもらっぞ」

「そんなボロ布で良ければいくらでも返してやるよ」

俺から気づかれないように錢袋を奪ったと思って上機嫌になっているパッシに向かって言った。

俺は既にタコールから奪った錢袋から硬貨を全て取り出し、俺の愛銃であるネカー&ネマーのマガジンにセットしていた。

俺の持っている金銀の銃、ネカー&ネマーは弾丸の代わりに硬貨を打ち出せるという珍しい銃で、俺と共に危険な冒険を生き抜いてきた相棒だ。

俺はタコールに向かって銃を構えた。勿論、後ろにいるパッシにも注意を払っていたが、少し離れて観察しているザムは、敢えて相手にしない。

「ぬっつ……」

タコールはまたしても顔を真っ赤にして俺を睨んでいる。今のこいつの脳天に硬貨をぶっ放したら、さぞかし大量の血が噴出するだろう。いや、墨を吐くかもしれない。

「帰るぞ！ パッシ！ ザム！」

タコールは尚も俺を睨みつつ仲間二人に言うと、足早に立ち去る

うとした。

俺は右手のネマーを構えると、タコールの持つ斧に向かってトリガを引いた。

「ズダッ」という重たい音を立てて、ネマーから発射された硬貨が斧目掛けて飛んで行く。

俺は今回もタコールから斧を預かるつもりだった。

しかし、その硬貨が何かに弾かれ渴いた音と共に俺の足元に落ちた。

「今、金欠なんですよ。これ以上何かを奪うのは勘弁してくれませんか？」

今まで観察していただけただけのザムが優しい口調で言った。あいつの喋り方はいつもこうだ。これが奴の不気味さを更に強調していて俺は好きになれなかった。

その右手には背中に背負っていた刀をいつの間にか握っている。

「ん？ どうした？ ザム？」

隣を歩いていったタコールは何が起こったのか気づいていないようだったが、俺の眼には見えた。ザムは常人には見えないような速さで背中を刀を抜き、迫り来る硬貨の弾丸をその刀で切り払ったのだ。

ザムは一体何者なんだ。ザム程の腕の持ち主が、なぜタコールをリーダーとするパーティに加わっているのか理解出来ない。

俺は暫くその場に立ち尽くしていたが、気を取り直して改めて宿屋へ向かう事にした。タコール達に襲われていた女性は、いつの間にか居なくなっていた。御礼の一つでもして欲しかったが、臨時収入があつたので許してやる事にしよう。

宿屋に到着したのは深夜一時だった。チェックインを済ませ部屋に入ると、俺は手早く装備を外してベッドに横になった。

第一章 出会い

翌日、眼を覚ました時には既に九時を回っていた。俺は宿屋で朝食の目玉焼きの乗ったトーストを手早く食べ終わると武器屋アームズに向けて出発した。

外は曇り空のためか少し薄暗い。俺は雨が降らない事を祈りつつアームズを目指して歩き始めた。

城下町の通りは昨夜とは違い、沢山の人で賑わっていた。路肩には果物やアクセサリーを売る露天商が所狭しと並んでいる。

昨日魔族討伐組合で教えられた通りに城下町の西に向かって進む俺が泊まっているゴージャスは城下町の東に位置するため、正反対へと歩かなくてはいけない。

これだけ大きな城下町だと通りを走る馬車もあるのだが、辺りの風景を観察するのが好きな俺はノンビリと歩いて進んでいるところだ。

中央に巨大なアーム城のあるこの城下町は端から端まで歩くと二時間位かかるだろう。ゴージャスから武器屋アームズまでなら一時間ちよつとで到着するはずだ。

四季にほとんど違いが無く一年中暑いゴールドウィッシュ大陸だが、今日のような天気なら散歩には丁度良い。辺りの店や道路脇の花壇を見ながら歩いているとアーム城下町西地区の案内図が見えてきた。

「あつちかな……」

暫く進むと武器屋アームズが見えてきた。四角い二階建ての建物で、灰色の頑丈そうな石で出来ている。

木製の扉の上には事務的な文字で武器屋アームズと記されていた。その扉を左手で押し開け店に入ると、冒険者らしき人が数人いるのが眼についた。

「いらつしゃい」

突然俺の右側から声が聞こえてきた。右にあるカウンターの向こう側に座った身長一メートル位の老人の姿が目に入る。

「ホビット族か……。ここの主人のマクルスっていうのはあんたかい？」

「すると、お主が魔族討伐組合に紹介されてきたブレイブかい」

目の前のずんぐりとしたホビット族のマクルスは俺の姿を上から下へ舐めるように眺めた後で言った。

「一見若くて格好もスーツ姿で頼りないが、常に気を張り詰めている辺りはそれなりにレベルの高い冒険者らしいな」

「職業は盗賊でレベルは三十だ」

俺はマクルスの偉そうな態度に不快感を抱いたが、金のために我慢する事にする。マクルスは顔半分を埋める程の豪快なヒゲを撫でながら俺の姿を眺め続けた。

「ほほう、それにそのスーツは普通のスーツではないな。鉄の糸が編み込まれているようだ」

どうやらマクルスは武器屋としての腕は高いようだ。しかし、残念ながら俺のスーツに編み込まれているのは、鉄の糸ではなく更に丈夫な鋼の糸だ。

「むおっ！　そ、その二つの銃はなんだ？」

「おい！　オヤジ！　ファッションチェックなんてしないでいいんだ。依頼の内容を教えてください」

俺は話題を変えた。この銃について詳しく教えてやる事は出来ない。なぜなら俺も詳しい事は知らないからだ。

この銃が俺の実家の納屋に眠っているのを発見した時は胸が躍った。売ればかなりの額になると判断したからだ。既に冒険者になるうと心に決めていた俺は旅の資金が必要だった。

そこで知り合いの武器屋にこの銃を持って行ったところ、こんな銃は見た事がなくて値段もつけられないと言われた。

途方に暮れた俺は、試しに銃のトリガを引いてみた。発射音と共

に木に命中した弾丸を見てみるとそれは硬貨だった。

それ以来、ネカー&ネマーは俺の愛銃となった。盗賊を目指していた俺の武器としてはピッタリだった。

目の前ではマクルスのオヤジが俺の愛銃を見つめていた。俺が冷やかな視線を送っている事に気づいたマクルスは咳払いをすると、依頼について話し始めた。

「とりあえず依頼内容をこの場で話す訳にはいかない。今日の夜十時に城下町中央の噴水前に来てくれ。装備は念のため整えてくるようにな」

マクルスはそういうと、俺の後ろで待っていた客の相手をし始めた。俺は仕方なく武器屋アームズを出た。

今夜、マクルスから依頼内容を聞いて受けるかどうかを判断する事になりそうだ。

俺は夜遅くなるまで、城下町を散策して装備等の準備をする事にした。ホビット族のオヤジの言い方だと、今夜、何らかのアクションを起こそうとしているからだ。

俺は城下町の大通りから少し外れた所にあるシーフグッズ専門店バルグ・カンパニーに入った。

「……」

カウンターに立つ陰気な店員は店に入ってきた客に対して何の反応も示さない。

なぜか盗賊グッズを扱っている店はこのように陰険な店が多い。店内は薄暗くてアイテムや武器・防具が分かりにくく乱雑に置かれている。それも特徴の一つだ。

俺は適当にロープや投げナイフ等の消耗品を購入すると装備を整えるため宿屋に戻る事にした……が、宿屋のある通りの角を曲がろうとしたところで、後をつけられている事に気づいた。盗賊をつけるとは良い度胸だ。

俺は角を曲がり宿屋のある通りに出ると、すぐ脇にあったゴミ箱の陰に隠れた。少し臭うが我慢することにする。

ちなみに俺はマヌケな追跡者とは違い、気配を完璧に消している。熟練した盗賊にもなれば、人を追跡したりモンスターに気付かれずに目の前を通り過ぎる等、気配を消す術が上手くなっていく。俺をつけている奴は少なくとも盗賊でも無ければ冒険者でも無いかもしれない。

……俺をおっかけている冒険者マニアだろうか？

「あれ？ あいつ、どこに行きやがった……」

俺は思わず気が抜けて集中力が途切れてしまうところだった。

俺をつけて通りから出てきたのは、茶色の髪の毛を栗のようにトゲトゲに固めた盗賊のパッシだった。あいつは盗賊に向いてないんだろ？ いや、冒険者に向いていないに違いない。

それにしても昨夜は厄介な連中に見つかってしまったと今更ながらに思う。

俺はパッシに気づかれないように静かにゴミ箱に上り、そのまま建物の屋根へと駆け上がった。人通りのあまりないこの通りでは俺の行動に気付いている者はいないようだ。

あいつがどういふつもりで後をつけていたのかを確かめられないといけない。場合によっては、奴ら三人共、再起不能になってもらう必要がある。

俺を見失った事により追跡を諦めて仲間の元へ戻ろうとするパッシの後を逆につけた。

奴は酒場ブルーバードに入っていく。

俺は気づかれないように少し経ってから酒場へと進入した。酒場は夜とは違い客の入りはまばらだったが、どうにか気づかれないようにタコールのパーティから離れた席に座った。

盗賊として鍛えた俺の耳は、中規模の飲み屋位ならギリギリ会話を盗み聞くことが出来る。あくまで集中すればの話だが……。特にタコールのような馬鹿でかい声で喋っている声やパッシのように特

徴のある声は聞き取りやすい。

「追跡しているのをブレイブに気づかれたか……」

「す、すみません」

どうやらパッシはタコールに文句を言われているようだ。俺が奴を好きになれない理由の一つは、恩着せがましくてやたらとしつこいところだ。

「クチャクチャ……俺達の目的まではバレてないだろうな？」

タコールが口の中の食べかけのサラダを辺りに飛ばしながら喋っている。俺がタコールを好きになれない理由その二は食事の汚さだ。「大丈夫だ、後をつけられないように慎重に帰ってきた」

パッシは自信タップリに答えていたが、俺は既に同じ店内にいる。確かにパッシはこのブルーバードに到着するまで、辺りをキョロキョロと見渡していた。だが、そんなにあからさまに警戒している、追っ手も慎重になっってしまうだろう。

「なんとしてでもあいつの銃を奪うんだ」

眼には眼を、という考え方だろうか。タコールは意気込んでパッシに向かって言っている。相変わらずザムは隣にいるが、まるで関心がないようだ。

俺はその後も三人組の会話を盗み聞きした。ボソボソと喋るザムの会話は聞き取りづらかったが、他愛も無い世間話をしているようだ。

俺は時間が経って氷で薄くなったコーラを一気に飲み干すと、手早く勘定を済ませ店を出た。

「ふっ、あいつらのような未熟者に盗れるような代物じゃないぞ」

俺はベルトの両方に下がっているネカー&ネマーの感触を確かめながら言った。

酒場を出るとそのまま宿屋に向かった。ブルーバードからこの宿屋まではそれ程離れていないが、問題ないだろう。

昨日は夜遅かったせい、眠気が襲ってきている。俺は宿屋の自分の部屋に着くと装備は外さずに、そのままの格好でベッドに倒れ

込んだ。

気がつくとも部屋の時計は五時前を指していた。少し焦ってカーテンを開けて外を確かめたが朝の五時ではないようだ。足りなかった睡眠時間を昼寝で補って体調も万全となった。

俺は宿屋で出された夕食の焼き魚定食を食べ終わると、眠気を覚ますため共用の風呂場へ向かった。

念のためネカー＆ネマーはホルスターごと風呂場に持ち込んだ。酒場で余計な話を聞いてしまったばかりに、若干落ち着きを無くし始めている。

風呂場には同じ宿屋に宿泊していると思われる体格の良い男が頭を洗っていた。全身泡だらけになっていたため顔を確認する事は出来なかったが、体格から判断すると俺と同じ冒険者らしい。

「風呂場に銃を持つてくるなんて物騒だな」

泡だらけの男は言った。

人見知りをする俺はシドロモドロになって答えた。

「ま、まあ……」

俺は曖昧な返事をする、頭を洗い始めた。

隣の男はシャワーで頭から泡を洗い流している。髪の毛は短髪で透き通るような青色だ。生まれてから一度も髪の毛を染めた事のない俺は、天使の輪が出来る程の漆黒の髪をしている。

男は自分の性格を表しているような吊り上った眉毛をしていた。

「この大陸は長いのか？」

こいつの辞書に人見知りという言葉は無さそうだ。俺は勢い良く髪の毛を洗い、その音で奴の声が聞こえなかったフリをした。

俺は髪の毛を洗い終わると、次はタオルで身体を洗うことにした。この瞬間を待っていたかように隣の男が話し掛けてくる。

「この大陸は長いのか？」

さっきと全く同じ質問だ。こいつは人見知りなど全くしない、恐ろしくクソ真面目な奴だという事が分かった。

「まだ一週間も経ってない」

「そうか。俺は今日で丁度一週間だ」

俺の少ない記憶容量をそんな特に意味もない情報で埋めたくなかったが、男は尚も喋り続けた。

「実は明日から大きな冒険に出るんだ」

「報奨金は？」

俺は真っ先に聞いた。すると相手の男は初対面の俺に対して、明らかに敵意の顔を見せて言った。

「世の中金じゃないぞ。依頼者はこの大陸で一攫千金を夢見ている老人だ。俺はその老人の護衛を引き受けたんだ」

隣でほぼ一方的に話し掛けてきている男は俺が最も好きになれないタイプだと分かった。俺にとって金は命を掛けるに値する価値あるものだ。

ただし金のために死ぬのは御免だ。俺が本当に好きな事は稼いだ金を使う事だからだ。

「世の中金じゃないと言ったが、依頼者は望みが叶ったら、俺に千万カリムを支払うと言っている」

と、男は続けて言った。

魔族討伐組合で一度聞いた事のある依頼だ。俺は胡散臭くて引き受けなかったが、あの依頼はレベル二十五以上という指定があったはずだ。

つまり俺の隣にいる男は少なくともレベルが二十五以上はあるという事になる。こんな真面目な性格の男じゃレベル二十八位が限度だろう。

俺は身体を洗い終わり湯船に浸かった。その間も隣の男は色々と話し掛けてきたが、俺は適当に返事をして、そそくさと風呂を出た。

マクルスの指定通りに今日買ったアイテムも含めて装備を整えてから、夜の九時になったのを確認すると、城下町中央の噴水目指して出発した。噴水はアラム城から伸びる十字型の大通りの南側に

ある。

外は生憎の雨だ。俺は部屋を出る時にカバンから黒いフードつきのマントを取り出して身体を覆っている。

待ち合わせ時刻は夜十時だったな。ここから中央噴水広場まであとという間だろう。

俺は少し遠回りをしてから噴水広場へと到着した。こうやって少しずつ知らない道を歩いていけば方向音痴な俺でもそのうち城下町を自由に歩き回れるようになる……に違いない。

城下町中央の噴水に着くと既にホビット族のマクルスが噴水の端に腰を掛けて座っていた。

その傍には意外にも見知らぬ冒険者が一人いる。

髪の毛は俺と同じ黒色で腰位までの長さだ。冒険者にとって雨をしのぐ物はフードつきのマントと相場が決まっているのだが、俺の目の前にいる男は透明のビニール傘を差していた。右手には髑髏の杖を持っている。魔法系の職業だろうか。

「雨の中をご苦労だったな」

紺色の傘を差しているマクルスが言った。

「随分、変わった格好をしていますねえ」

魔法使いらしき男が力の抜けるような弱々しい声で言った。いつ襲われるか分からない冒険者にとって、片手が封じられてしまう傘を差すのは自殺行為だ。こいつは未熟な冒険者に違いない。

「早速依頼内容について教えてくれ」

「もう一人来る予定なんだ。後少し待つてくれ」

マクルスは辺りを見渡してから言った。冒険者を三人も雇うつもりなのだろうか。

更に待たされる事を知って場の雰囲気や和ませたいのか、魔法使いらしき男が近づいてきた。

「初めまして、アフィンと申します」

最近人見知りという言葉を知らない人間が増えてきたようだ。俺はアフィンと名乗った男に向かって自分の名を名乗った。

「俺はブレイブだ」

「ブレイブ……。勇敢とか勇気っていう意味でしたよねえ？」

「ああ、そうだ」

俺はアフィンの間延びした話し方に少しウンザリしながら、もう一人の冒険者が来るまでお互いの自己紹介をさせられた。

男の名前はアフィン。年齢は俺と同じ二十一歳で職業はネクロマンサーだ。ネクロマンサーという職業は死者を操る術が使える。オカルトな話が嫌いな俺はこの職業自体を好きになれない。レベルは十四という事だ。俺のレベルの約半分か。こういう条件でマクルスはアフィンを雇ったんだろう？

アフィンとの自己紹介が終わるのを見計らったように、噴水の周りの街灯の下に男が現れた。

「待たせたな」

街灯の明かりに照らされた身長が二メートル以上はあると思われる男が低い声で言った。

男はその高い身長の割に身体が痩せていた。まるで街灯が一本増えてしまったような感じた。茶色の髪の毛を後で縛り、腰には細身の剣であるレイピアを装備している。それ以外には装備らしいものは身につけてなく、ほとんど私服と言って良い程だ。まあ、見た目は人のこと言えないが。

しかも雨を凌ぐような物は何も身につけていない。全身ずぶ濡れだ。

「それでは全員揃った事だし依頼の内容を教えよう」

今まで俺とアフィンのやりとりを黙って聞いていたマクルスは話し始めた。あのノッポの自己紹介が済んでないが、どうせアフィンが後で聞きに行くだろう。

「単刀直入に言おう。まず君達には泥棒をしてもらっ」

「ど、泥棒ですか？」

アフィンが言った。無表情なノッポも困惑しているようだ。

当然俺も悩んでいた。報奨金が貰えるならどんな依頼でも行くと

言ったが、後々命を狙われるような面倒な依頼は受けたくない。

「アラーム騎士団の中央砦にある、鍵を盗って来て欲しい」

「……相手は国という事だな」

暫く考え込んでからノツポが言った。

その後、マクルスからこの国についての裏の姿を聞いた。

山に囲まれたゴールドウィッシュ大陸にはいくつもの金山がある。その中でも一番大きな山がゴールドウィッシュ大陸の中心より少し南、このアラーム城下町からは北にそびえるホープキング山だ。

ホープキング山はアラーム国が直接取り仕切っている山で、他の山に比べるとモンスターの数などは少なくて安全なのだが、山の至る所に国専用の金鉱が作られている。

マクルスの話によると、アラーム国はホープキング山に住まうドラゴンに、毎月一人の若い女性を生贄に捧げる事で安全に金を採掘する権利を得ているらしかった。

「その情報は確かなのか？」

半ば信じられない気持ちで聞いた。

「城に仕える司祭の一人に聞いた話だが……つい最近、死体で発見されおったわい」

俺たちは黙り込む。

こんなにも栄えた国にも人には知られたくない影の面があるという事だ。いや……モンスターや魔族が横行するこの世の中でこれだけ栄えたからこそ、邪悪な影があるのかもしれない。

「まあ、死体で発見されたってことは、その話には信憑性がありそうだね」

アフィンが言うと言憑性が薄くなるのはなぜだろう。

「で、盗もうとしている鍵は何に使うんだ？」

俺は聞いた。

「……今回の生贄に選ばれたのが、ゴールドウィッシュ大陸の辺境の田舎で暮らしていたワシの娘なんだ……」

マクルスは苦痛に顔を歪めるようにして言った。

またしても言葉を失う俺たち。

「所詮は少数民族であるホビットの血を引く者の定めなのか……」
マクルスが俯き震えだした。

「砦から鍵を盗んだら、その鍵で生贄が囚われている牢屋を開けて、あんたの娘を助け出すまでが依頼の内容か？」

「ああ……そうだ」

「俺達は国を敵に回す事になる。その見返りがたった六百万カリムか？」

ノツポは言った。どうやらノツポは俺と同じ『お金大事』な考えを持った性格らしい。

さすがに俺は落ち込んだマクルスに金に関する話は持ち出せなかったから、ありがたかった。

「モンスターに人質を差し出していた、なんていう事実が明るみに出れば犯罪者扱いなどされんはずだ。逆に英雄として銅像なんかが造られるかもしれないな」

マクルスの話の行方が怪しくなってきた。娘が生贄にされるといふ事実から、少し頭がイッてしまっているのではないだろうか。そんな事実など国という権力があればいくらでも揉み消せそうだが。

「それなら安心だね〜！　ねえ？　ブレイブ？　僕達の銅像が出来るかもしれないし〜！」

アフィンは事の重大さを理解していないらしい。こいつの能天気さには呆れてしまう。

「そつちのノツポの人もこの依頼に乗ろうよ！」

「俺の名前はロフティだ」

「あはは！　高いつていう意味だね！　ぴったりだよね〜、ブレイブ？」

アフィンは初対面の相手でも気にすることなく気軽に話し掛ける事が出来る能力を持っているようだ。

笑いにされたロフティだったが、怒る訳でもなく、ただ顔に苦笑を浮かべている。このアフィンという男は憎めない性格をして

いた。

「ポーズはこうかな！」

アフィンが杖を頭上にかかげて微笑んだ。

「質問して良いかな」

俺はハシャグアフィンを押しのけてマクルスと対面した。

「モンスターに生贄を差し出している事実があつたとして……国によって揉み消されてしまう、なんてことにはならないのか？」

俺の質問にロフティも頷く。どうやら同じ疑問を抱いていたようだ。杖を掲げたままのアフィンは俺の質問に啞然としている。

「凄いね！ ブレイブ！ よくそんな細かい所まで気が付くねえ！」

アフィンが眼をウルウルさせて感動している。俺は命とその次に大事な金の事ならどこまでも神経質になれる。

「ふむ。揉み消されない程の証拠が必要だ」

「ああ、そうだな」

「そこでワシはインスペクターを極秘に入手した」

そう言うマクルスは横に置いてあつた箱を取り出すとフタを開いた。

中から透明な羽を持つ、一匹の妖精が飛び出した。

インスペクターとは手のひらに乗れる程の大きさで、頭の部分がカメラのようになっている妖精だ。元はどこかの森で暮らしていたのだが、人間が捕獲し都合のいいように改良したものだ。元々頭がカメラなのかどうかは定かではない。

そのカメラの映像を他の遠隔地にあるカメラへと転送できるといふ優れたもので、魔族討伐組合などで広く使われている。

一般人は扱うことを許されていないはずだが……。

「お、おい……」

「企業秘密だ」

俺の疑問を察したのかマクルスが即答してきた。

「まあ、後はあんたを信じるかどうかだが……」

今まで沈黙を保っていたロフティが口を開いた。

「嘘つきの眼ではないな。娘を必死に助けようとしている気持ちが感じられる」

ロフティがマクルスに近づいて続けた。

「いいだろう。俺は依頼を受けよう。国規模の犯罪を間近で暴いてみたいもんだ」

ロフティは言った。

それを聞いたマクルスは、持っていた小さな鞆から錢袋を取り出してロフティに渡した。

あれには前金の百万カリムが入っているのだろう。大金を目の前にした俺は冷静な判断が出来なくなったのかもしれない。口から勝手に声が出た。

「俺もその計画に参加させてもらうぞ」

俺は言ったと同時に百万カリムを奪うように受け取った。その後すぐに、アフィンも悩む事なくマクルスから金を受け取った。

「決行は早ければ早い方がいい。まずはこの城下町にある騎士団の砦から鍵を盗って来てくれ。娘がモンスターの生贄になってからでは遅いからな」

マクルスは更に続けた。

「騎士団の砦から鍵を盗って来たら、即行でワシの所に来て欲しい。その日のうちに、ホーピング山の牢屋に行って、娘を助け出す。盗まれた事がバレて、鍵を取り替えられたら、やっかいだしな」

マクルスは肩に乗っていたインスペクターを箱に戻した。

「鍵を盗む場面は映像に収める必要はないだろう。色々不都合もあるかもしれない」

今まで噴水の淵に腰を掛けていたマクルスが立ち上がって言った。
「騎士団の砦に鍵があるんだろ？ 何か他に情報は無いのか？」

俺は立ち去ろうとしているマクルスに聞いた。

「？ おお！ 忘れておった」

そう言うとマクルスは懷から小さなメモ帳を取り出して読み始め

た。

「鍵は中央砦二階のどこにあると言っておったな」

二階か……。まずは見に行く必要があるそうだな。

「細かい計画は君達に任せる。頼んだぞ」

最後に念を押すように言うと、マクルスは武器屋アームズのある方へ消えていった。噴水の周りには初対面の冒険者三人が残された。「じゃあ、早速これからの作戦を練ろうよ？」

明るくアフィンが言った。初めて会った三人組の中にアフィンのようなキャラが居て助かった。もし三人共俺のような性格だったら、いつまで経っても話し合う事なんて出来ずに月日が経過していたかもしれない。

「まずはロフティさんの自己紹介から」

ロフティは渋々、簡単にだったが自己紹介を始めた。

年齢は二十八歳で職業は剣士。レベルは二十五という事だ。

「本来なら一番レベルが高いブレイブがリーダーになると思っただけど……」

「ちょっと待て！俺はリーダーなんてやりたくないぞ。柄じゃないしな」

何より、リーダーなんかになって責任を負わされたくない。

「そう言うと思ったよ。じゃあ、一番年上のロフティがこのパーティのリーダーでいいかなあ？」

アフィンは勝手に話を進めていった。

「いいだろう。俺がリーダーをやる」

ロフティは言った。

「それじゃあ、これから敵情視察と参りますかあ」

アフィンはそう言うと、スキップしながら南の大通りに向かって行った。一人先に進んだアフィンは遠くから振り返り手招きしている。

俺とロフティは眼を合わせるとお互い苦笑いを浮かべ、アフィンの消えていった通りに向かって歩き始めた。

目指すアラーム騎士団の砦はアラーム城を囲む城壁のすぐ近くに
あった。城を囲む城壁とは別に、ぐるりと城下町を一周する頑丈な
城壁に囲まれており、東西南北それぞれに強固な城門が設置されて
いる。そしてそれぞれの城門の目の前にアラーム騎士団の砦がある。
敵に攻め込まれた時に真つ先に迎え撃つ事が出来るようにだろう。
俺たちが忍び込もうとしているのは一番侵入が難しそうな城傍の
中央砦だ。

中央砦は二階建ての大きな建物だ。俺達は少し離れた場所から砦
を観察しているが、アラーム国の兵士が二十四時間松明の明かりを
灯しながら交代で見張りに立っているようだ。

城も近いせいで辺りを歩く騎士達の姿も目立つ。

「侵入するのは一苦労だぞ」

隣で見ていたロフティが言った。

「とりあえず情報が必要だ。兵士の交代の時間や何人見張りがある
のかとか……」

俺は声を潜めながら言った。

「見張りの人数と交代の時間の他に必要な情報は？」

あまり声を潜めようとしないアフィンが聞いた。

「建物内の警備の状況も必要だな。後重要なのは鍵のある場所だ」

「ふんふん、そんなところだね。じゃあ、ちよつと行ってくる」

そう言うのアフィンは突然建物の陰から飛び出し、騎士団が駐留
している砦に向かって一人で歩きだした。

「い！ あ、あいつは何をやってるんだ？」

俺は思わず大声を出してしまった。しかし、離れた所にいる見張
りの兵士には気づかれなかったようだ。

隣ではロフティがアフィンの行動を固唾を飲んで見守っている。

俺は会話を聞くためにアフィンに意識を集中した。三十メートル
程離れた所で見張りをしている兵士に向かって歩いて行く。あいつ
は自分の性格を生かして、兵士から直接情報を収集しようとしてい

るらしい。確かに城下町に住む住人に話を聞くよりは確実だが……。

「おい！ 待て、お前！」

予想通り見張りをしている兵士に見つかり槍を顔の目の前に突き立てられた。

「こんな遅くまでご苦労様です」

アフィンは槍に臆することなく話し掛けた。

「名を名乗れ！」

「私は冒険者のアフィンです。ここで傭兵を雇っていると聞いて、一刻も早くこの国の役に立ちたいと思ひまして参上しましたあ」

アフィンの気の抜けた喋り方に兵士の方も拍子抜けしてしまったようだ。

「今は傭兵は募集してないんだ。ここのところ平和だからな」

毎月生贄を捧げているのだから平和なのは当然だ。アフィンはそのまま話し続けた。

「なんだあ、そうなんですか」

アフィンは暫く考え込んでから聞いた。

「じゃあ、ここの見張りとかやらせてもらえないですか？」

「人数は十分足りている」

別の無愛想な兵士が答えた。

「へえ、こんな大きな城下町を守っている位なんだから、相当な人数なんでしょうねえ」

アフィンは辺りを見渡しながら言った。

「この中央砦だけで三十人も兵士がこの城下町の平和を守るために見張りをしているんだ」

見張りは三十人という事か。しかし大きな城の見張りで三十人は少なすぎる。余程、良い生贄を捧げているに違いない。

「おい！ 喋り過ぎだぞ！」

無愛想な方の兵士が若いお喋りな兵士に注意した。

「あ、ああ、すみません」

若い兵士が頭を掻いて謝る。アフィンの情報収集もここまでか。

「ごめんなさい。僕が余計な事を聞いたばかりにい」

「いや、良いんだ。気にするな」

若い兵士が言った。

「ふああああ」

次は無愛想な兵士が大きな欠伸をした。そういえばそろそろ深夜の零時になる頃だろうか。

「眠そうですね。大丈夫ですかあ？」

「ふあああ……零時に交代要員が近くの兵士宿舎からやってくるんだ。そろそろ帰れそうだよ」

無愛想な兵士も意外と口が軽そうだ。

交代時間は深夜零時。俺は忘れやすい性格だったので、頭の中で復唱した。

「僕には深夜零時まで仕事するような根気はないなあ」

「はははは、それでは見張りの仕事など無理だな」

「僕なら石で出来た涼しそうな砦の中でサボっちゃうだけだな」
アフィンが砦の二階を見上げて言った。確かに木製の建物よりは石で出来た建物の方が若干涼しく感じる。

「残念ながら、砦の中でも見回りしている兵士がいるぞ。サボっているところを見られたら懲罰ものだ。もう二度と王宮に仕える事は出来なくなる」

またしてもペラペラと無愛想な兵士、いや既に無愛想とは言えない位喋っているが……見張りなんていう暇な仕事をしていると会話が無性に恋しくなるのかもしれない。

ましてやアフィンのように話易い相手だと自然と口が開いてしまふのだろう。

「誰も使っていない部屋とかないんですか？ あるなら、僕はそこに住んじやおうかな」

「宿屋じゃないんだし空き部屋はなんてないなあ。砦の中は武器庫や兵士の休憩所などがあるだけだよ。二階にはあの有名なアラム騎士団長のガリアス様がお住まいになっているし」

無愛想な兵士が二階を見上げる。

うっん……。大分離れているし薄暗いので分かりにくいが二階の中央辺りを見ているのだろうか？ 騎士団長とやらの部屋はその辺りか？

兵士は続けて言った。

「まあ、空いてたとしてもこの砦に住むのは許可されないだろうな」「ガリアス様って？」

アフィンが聞いた。俺も心の中で兵士に聞いていた。

「なんだ？ 知らないのか？」

兵士の説明によると、ガリアスは二十歳という若さで騎士団長に任命され、それから三年間で数々の武功を上げているらしい。キング・オブ・ジェミニという二本の剣を装備しているという事だ。

生贄を閉じ込めている牢屋の鍵はガリアスの部屋だろうか。

暫く兵士と話し続けていたアフィンは信じられない行動に出た。

「そうそう、さっき酒場でこの鍵を酔っ払いから売ってもらったんですよ」

アフィンは懷から金色に輝く鍵を取り出しながら言った。

「酔っ払いの話だと、この鍵はホープキング山の牢屋の鍵らしいんですよ」

それを聞いた二人の兵士は余程ボーカーフェイスが得意なのか、その鍵を無関心そうに眺めた。

「ホープキング山の牢屋？ 聞いた事ないなあ」

「え？ 本当ですか？」

「その酔っ払いに騙されたんじゃないのか？」

アフィンは予想外の反応にも動じる事なく話し続けた。

「ちくしょう！ 牢屋の中には財宝があると聞いて、十萬カリムも払ったのに！」

「はははは、何事も楽をしようと思ってもうまくいかないぞ」

「逃げられないうちに酒場に戻って金を返してもらいます」

「無理だと思うけど気をつけるよ！」

アフィンが踵を返して、俺とロフティのいる建物の影に戻ってきた。

俺はアフィンが近づいてくる間、長い事兵士を観察していたが、誰かに報告に言ったり、追跡してきたりする様子はない。

「む、無茶するな……」

ロフティは隣で青い顔をしている。

「で、どうだったんだ？」

ロフティは聞いた。盗賊の耳でない限り、この距離で会話を聞くのは無理だからだ。

「一般の兵士にはホーピング山に牢屋がある事自体、知らされていないみたいだな」

俺は言った。

「そうだねえ、そうすると一部のお偉いさんが勝手にやってるだけみたいだね」

俺とアフィンの会話を隣で聞いているロフティは全く意味が分からないようだ。

「怪しいのはやっぱり騎士団長の部屋か？」

「うゝん……どうだろうねえ」

アフィンが眼をグルグルと回している。一体、どういう思考をしているのだろうか。

「とりあえず、明日は騎士団長のスケジュールを調査する必要があるな。奴がいない間に砦に忍び込もう」

俺とアフィンは話をまとめると、その場を立ち去った。後からはロフティが「おいゝ」という情けない声を出しながらついて来た。

翌日も朝から雨だった。俺達三人は午前十時に昨日の噴水前で待ち合わせをした。

相変わらずアフィンはビニールの傘を差し、ロフティはずぶ濡れで噴水前で待っていた。

俺達は午後二時に再び噴水前で待ち合わせをして、それぞれ情報

収集のため別行動を取る事にした。

俺が最初に立ち寄ったのは馴染みの酒場ブルーバードだ。店に入る時にタコール達のパーティーがないかどうかを確認したが、どうやら大丈夫そうだ。

俺はいつも通りカウンター席に座るとコーラを頼み店内を観察した。さすがに昼間から酒を飲んでいる者は少なかったが、一攫千金に失敗したと思われる中年の男数人が半狂乱になって酒を飲んでいる。

俺は目の前で、別の客から注文されたカクテルをシェイカーを振って作っているマスターに向かって話し掛けた。シェイカーを振る時のシャカシャカという音が気持ちいを落ち着かせてくれる。

「マスター、ちょっといいか？」

シェイカーを振る手を止め、グラスにカクテルを注ぎ始めた。黄色の液体がグラスに注がれていく。パイナップルの爽やかな香りが漂ってきた。

マスターはカクテルを店員に渡すと、こちらを向いた。

「どうしました？ お客さん？」

「ガリアスさん、って知ってるか？」

俺は聞いた。普段は人見知りをする俺だが、いざ仕事のためとなると割り切って気軽に話し掛ける事が出来る。いや、いざ金のため……だな。

「ガリアス？ ああ、アラム騎士団長のガリアス様の事かい」

「そうだ、実はあの人に弟子入りしたいと思ってな」

間違っても騎士団の砦に侵入したいからスケジュールを教えてくださいと聞けない俺は、嘘をついた。

しかし俺はポーカーフェイスが苦手で嘘をつくのが下手だ。マスターに嘘だと気づかれなければ良いが……。

「弟子入りか？ ガリアス様はまだ弟子を取るような歳じゃないぞ。確かまだ二十三歳だったはずだけどな」

アフィンが昨日したようにうまく情報を聞き出す事が出来ないと感じつつ、俺は尚も話し続けた。

「弟子を取るのに、歳は関係ないだろ？　俺はガリアスさんを尊敬しているんだ」

俺は握り拳を作り、力いっぱい演技をして見せた。

「確かにガリアス様は尊敬出来るお方だ。ガリアス様は常にこの城下町の住人の事を第一に考えて下さる」

どうやらガリアスは表向きの顔は良さそうだ。裏では、女性の生贄を捕まえているかもしれないが。

「とりあえず、会ってみたいんだ。ガリアスさんには、どこに行けば会えるんだ？」

「日中はアラム城で仕事をしているだろう。一般市民には何をしているかなど理解出来ないけどね」

という事は、日中はあの砦にはいないという事か。それでも、確かな情報がない限りは安心する事は出来ない。

俺はマスターに礼を言うとしてブルーバードを後にした。

外は相変わらず雨が降っている。

俺はここ一週間程で何か特別なイベントの開催等がないかを確認するため、町の中に何箇所かある掲示板へ行く事にした。

情報収集をする相手は大抵酒場の主人やその客なのだが、人見知りをしてしまう俺は物を言わない掲示板へ向かう事にしたのだ。

昨日の夜、俺はマクルスと会った噴水の前に掲示板を見つけていた。どちらかという方向音痴な俺は、少し離れた掲示板のある噴水に向かって歩き出した。遠くても迷子になるよりはマシだ。

ふと気づくと、目の前で背の高い男がずぶ濡れになって歩いていた。

それが剣士のロフティである事に俺は気づいたが、まだお互いほとんど面識がないため俺は声をかけられないでいた。

すると突然、ロフティの身体がユラユラと揺れ始めたかと思うと俺の方へ倒れこんだ。

「お、おい！ ちょっと待った！」

俺は叫んだが、既に遅かった。急な事でロフティの体重を支えられなかった俺は、雨が降る中、城下町の通りで仲良く倒れた。

アラム城下町にある『高橋診療所』はしきりに咳をしている男や百歳を迎えていそうな老人などで混み合っている。

大きめの町などには、このような診療所や病院といった建物がある場合が多い。

身体の怪我などは回復系の魔法で癒す事が出来るのだが、風邪などの病気は、魔法で回復する事が出来ないため、このような施設が必要になってくる。

俺は診療所にある病室のベッドで静かに眠っているロフティを眺めていた。その右手には、点滴が繋がっている。

高橋医師の診断によれば、栄養不足と疲れによる貧血という事だった。ロフティの痩せ型の体系は栄養を十分に摂っていないからのようなのだ。

俺はロフティを病室に残して、外に出ようと病室のパイプ椅子から立ち上がった瞬間、ロフティが眼を覚ました。

「うつ……、ここは？」

ロフティは意識が朦朧としているようだ。

「診療所の病室だ」

再びパイプ椅子に腰を下ろして俺は答えたが、ロフティは俺の顔を見て固まっている。

「ブレイブじゃないか。どうしたんだ？」

俺は、目の前で俺を巻き込んで倒れた事と、ここが城下町にある診療所である事を短く説明した。

「そ、そうか……すまなかった」

「こここの医師の話だと、栄養不足らしいけど？ ちゃんと飯食べてるのか？」

俺が聞くと、ロフティは俯いた。何か訳がありそうだ。

「とりあえず、もう歩けるだろ？　こんな辛気臭い所はとっと出て、飯でも食べに行こうぜ？　そろそろ十二時だからな」

人見知りをする俺としては、精一杯の誘いだっただが、ロフティは悩みながらも断った。しかし盗賊の俺の耳は、ロフティの腹が鳴り続けているのを聞いている。

マクルスからの依頼を達成させるためにも、ロフティには色々と働いてもらわなければならない。こいつは何かを隠しているし、戦闘中にさっきのように貧血で倒れたら困る。

「パーティーを組んだ記念に昼飯くらい奢るぞ」

こいつが栄養不足で倒れたと聞かなければ、ここの診療代も払ってもらうつもりだったが、俺は何も言わない事にした。ロフティは俺の提案を渋りながらも結局はついて来た。

診療所の病室にいる間に雨はすっかり止み、地面には大きな水溜りが出来ている。俺はマントのフードの部分の背中を下ろした。

診療所を出て、城下町の大通りを北に向かって歩き出した俺達は、二階建ての定食屋を発見し、店内に入った。

店内は昼時とあってか、客で賑わっている。店員に二階の窓際の席へ案内された。窓からは、城下町の大通りを見る事が出来る。

俺はハンバーグ定食、ロフティはサバの味噌煮定食を頼んだ。料理を待っている間に色々とロフティに聞きたい事があったが、まだロフティに対して慣れていない俺はいつまでも話し掛けられないでいた。

暫くして店員が料理を運んできたが、俺達の重苦しい空気に耐えられなかったのか、そそくさと退散していった。

俺は早速料理を食べ始めた。俺が食べるのを確認してから、ロフティも食べ始める。その食べっぷりは豪快そのもので、俺が半分を食べ終わる前にロフティの皿は空になっていた。一体どれ程飯を食べていたのだったのだろう。

「なあ……」

俺は思い切って話し掛けたが、ロフティは俺の質問を聞く前に言った。

「すまん、聞きたい事は分かるが、話す事は出来ない……」

そう言くと、ロフティは席を立った。

「飯、旨かった。助かったよ……」

俺はロフティの後について店を出た。勿論料金は俺払いだ。

城下町の大きな通りは人で溢れかえっている。定食屋に入る前と比べると、三・四倍になったように見えた。

「これからどうするんだ？　アフィンとの待ち合わせの時間までは、まだ一時間程あるけど？」

俺はロフティに積極的に聞いた。どうやら俺は、自分よりも社交的ではない相手に対しては、少しは気軽に話せるようだ。相手が自分よりも劣っていると思うからだろうか。

「とりあえず掲示板を見ようと広場に向かっているところで、ブレイブに会ったんだが……」

やはりロフティも人に聞き込む事については、得意ではないようだ。俺も目的が同じ事をロフティに告げると、一緒に噴水のある広場に向かう事にした。

城下町にある大通りは人でごった返していたため、ロフティは裏道を通って広場に向かおうとした。俺はどんな性格の人間であつても、方向感覚のある奴は多少なりとも尊敬してしまう。

大通りとは違い裏通りには人影がほとんどなかった。ゴミを漁る犬や虚ろな眼で空を見上げる蹲った男などがいるせいだろう。

「どんな栄えた街でもこんな場所があるんだよな」

「そうだな」

俺の他愛無い世間話にロフティが答えた。

暫く人通りの少ない裏道を歩いていると、向こう側から最も会いたくない三人組がやってくるのが見えた。俺はロフティに警戒するように伝えようとした瞬間、ロフティは十五メートル程先に見えて

いる三人組に向かって走り出した。

「お、おい、待て！」

俺は叫んだが遅かった。ロフティは腰に下げてあった鞘からレイピアを抜き出し、三人組に向かって尚も走っている。

「な、なんだ？ あいつは？」

タコールが隣を歩くパッシに聞いている。俺はネカー&ネマーを構えると、ロフティに続いて走り出した。

「誰だか知らんが、襲ってくる奴は迎撃させてもらうぞ」

タコールはそう言うと言っていた斧を構えた。あの台詞から判断すると、まだ俺の姿は見えていないらしい。

ロフティの目の前でタコールの斧が空を斬った。あいつの馬鹿力を示すように、俺の所まで空気を切り裂く音が聞こえてきた。あいつは力は強大なのだが、驚く程動きが鈍い。

ロフティは余裕でタコールの攻撃をかわすと、ザムにレイピアを繰り出した。

金属同士がぶつかり合う音が人気のない裏通りに響く。ロフティのレイピアが見事に折られ、ザムが不気味な紫色の刀で今にもロフティの首を飛ばそうとしている。

俺はザムに照準を合わせ、ネカー&ネマーのトリガを連続で引いた。

ザムは俺の方へ顔を向け怪しげに笑ったかと思うと、右手の刀で硬貨を全て弾いた。

「タコール！ ブレイブがいますぜ！」

パッシが言ったが、盗賊にしては気づくのが遅すぎる。俺は既に奴らの五メートル程の距離に近づいていた。

ロフティを殺そうとしたザムは、俺の攻撃により後方に下がっている。俺はロフティとザムの間に立ちはだかった。後ろにはタコールとパッシがいる。

「ロフティ、どうしたんだ、一体？」

俺は振り返ってロフティを見た。ロフティはまるで俺が見えてい

ないかのように、ザムを鬼のような形相で睨みつけている。

「ザム……、やっと見つけたぞ！」

ロフティは言った。ザムの事を知っているのだろうか。

「これは、これは、お人好しロフティさんじゃないですか？ お久しぶ……」

「ふざけるな！」

ロフティはザムが言い終わる前に叫ぶと拳を握り締め、ザムに向かって走り出した。しかし目の前では、ザムが刀を構えている。『刀』対『拳』では結果は見えている。

俺は再び銃を構えたが、後ろにいたタコールの攻撃に邪魔された。俺は前方に転がりながら避けると、そのまま回転した勢いに乗ってザムの前に出た。

「おや、ブレイブさんも一緒でしたか」

俺はザムの顔の目の前に右手に持ったネマーを構えていたが、同時にザムの刀は俺の首筋で止められている。ロフティは荒い息

をしているが、どうやら少しは落ち着いたようだ。

「お前、ロフティを殺すつもりか？」

俺は言った。ザムはその冷たい眼で俺を見ている。

「何を言うんですか。これは正当防衛じゃないですか。襲ってきたのはロフティさんの方ですよ」

俺とザムが睨み合っている所へ、タコールとパッシがやってこようとしていた。

俺はロフティに向けていた銃の照準をずらし、タコールとパッシの足元に一発ずつ弾丸を放った。

「お前らは来るな。話がややこしくなる」

俺はタコールとパッシに向かって言った。やはりロフティからは色々と事情を聞く必要がありそうだ。

「まあ、いいですよ。ここはブレイブさんの顔に免じて、なかった事にしましょう」

ザムはそう言うと刀を下ろし、俺とロフティの向こう側で右往左往している馬鹿コンビの元へ歩いてった。

「この野郎！ ブレイブ！ この借りは必ず返すからな！」

去り際にタコールが言った。負け犬の遠吠えにしか聞こえない。

俺は立ち上がると、後ろで呆然としているロフティに向かって言った。

「いい加減、事情を説明してくれ」

第二章 奪取

俺達三人は喫茶店にある個室に案内された。既に二時を回っていたため、アフィンを含めて、ロフティから事情を説明してもらう事にした。アラム騎士団長ガリアスの話は後回しとする。

人気のない裏道で起こった事件については、俺からアフィンに大まかな説明をした。

「それにしても、そのザムという奴は危険だねえ。一般人を殺したら最重要指名手配として、全国に通知されるのを知らないのかなあ」

ロフティもザムを殺し兼ねない勢いだったが、大丈夫なのだろうか。ロフティも熱くなってしまい、冷静さをなくした事は反省しているようだが。

「話してくれるか？」

俺は言った。アフィンもテーブルの反対側の席に座り、ウンウンと頷いている。

「ザムは、俺の両親を殺したんだ」

「えええ？」

アフィンが気の抜けた声で真っ先に驚いた。

「じゃあ、ザムは最重要指名手配犯なの？　すぐに行って捕まえなきゃ駄目じゃあん！」

相変わらず、『すぐに』という内容が伝わってこない喋り方だ。

「いや、俺の両親を殺したのは、モンスターという事になっている」
アフィンが頭を傾げている。

「どういう事なんだ？」

「町に現れたモンスターを退治しに来たのが、ザムだったんだ。ザムはモンスターが手強いと見ると、突然俺が住んでいた家に押し入ってきたんだ。家には俺の両親と俺を含めた六人の子供いた」

「ロフティのご両親、随分頑張ったんだねえ」

アフィンがデリカシーのない事を言っている。ロフティは苦笑す

ると、再び話し始めた。

「ザムを追って家に入ってきたモンスターに俺の両親は殺された。

ザムはその真新しい亡骸に魔法をかけたんだ」

「直接手を下したのは、モンスターという訳だな」

「ま、そういう事になるな……」

ロフティもそのところは分かっているようだ。苦しい顔をしている。

「ご両親の亡骸に対して魔法を使ったの？ ネクロマンサーの術なのかなあ？」

ネクロマンサーとは死者を操る魔術を使う職業で、俺はそのドロドロした内容が大嫌いだ。

「分からない。俺の親父とお袋の亡骸から飛び出た骨が見る見るうちに姿を変えていって、最後はザムの身体を守る鎧となったんだ」

「ひ、酷い……」

俺とアフィンと同時に言った。

「治安維持協会には、報告したの？」

アフィンが聞いた。魔族討伐組合が魔族やモンスターを対象としているのに対して、治安維持協会は主に人間を対象としている。悪い事をすれば、この治安維持協会のお世話になってしまうことになる。

「ザムという奴は、世間の評判が良いらしいんだ。当時十八歳だった俺の意見なんて、聞いちゃくれなかったよ」

アフィンが暗い顔を見せた。いつもニコニコしているあいつが……。

まあ、確かに酷い話ではあるが世間なんて所詮そんなものだ。

「ま、俺の話はこんなものだ。今まで黙っていて悪かったな。今後は奴を見かけても突然襲い掛かったりはしないようにするよ」

「そのうちザムの件はなんとかしようねえ。次は、騎士団長の話かな？ 誰から発表する？」

俺もロフティも無言のままだ。ろくな情報収集は出来なかった。

「しょうがないなあ、二人ともお……」

アフィンが机に頬杖をつきながら言った。

「明日の夜、お城の闘技場で騎士団長から城下町に住む子供に対しての剣術指南があるみたいなんだあ」

と、いう事は……。

「明日の十六時位に、いつもの噴水前で待ち合わせだねえ」

アフィンが気の抜けた声で言った。

俺が宿屋に戻ってきたのは、大きな振り子時計が十七時を告げている時だった。

宿屋ゴージャスの一階は一般客も入れる定食屋となっていて、少し早めの夕食を取る人で賑わっている。

「よお！」

俺は見知らぬ剣士風の男に突然話し掛けられた。

タコール達のパーティの事もある。急に襲われでもしたら困るので、いつでも逃げられる準備はしておいた方が良さそうだ。

「ひ、久しぶりだな……」

俺は精一杯のフレンドリーな態度で話掛けた。

「久しぶり？ まあ、久しぶりという言い方も出来なくはないかな

……」

透き通るような青い髪をした男は曖昧に返事をした。この返事の内容からでは、目の前の剣士が何者なのか検討がつかない。一体、俺は何を『預かった』のだろう……。というか、こいつは誰だ？

「一緒に飯でも食わないか？」

「あ、ああ、そうだな。久しぶりだし、あれからどうしたのか聞きたいもんだ」

人見知りの俺にしては最高の返事だったはず。この問いに対する返事により、こいつの正体分かるはずだ。

「あれから？ 昨日風呂出た後は、若干疲れていたせいもあって、すぐに寝ちまったよ？」

昨日？ 風呂……。透き通るような青髪……。

「はあ……。あの時の野郎だったのか……」

「ん？ なんかつたか？」

「い、いや、なんでもない」

俺は半ば飽きれながら答えた。まさか、風呂場で一緒になっただけの奴を捕まえて、一緒に飯を食うのを誘う馬鹿がこの世の中にいるとは……。

俺が青髪の男の前の席に着くとすぐに、宿屋の主人兼定食屋の主人が注文を取りに来た。

「ああ、ブレイブさんですね。本日の宿屋客メニューは唐揚げ定食になります、どうします？」

俺は目の前の男が唐揚げ定食を食べているのを見る。

「海鮮丼セツト一つ」

「宿屋メニュー以外ですと、追加料金が発生しますが……」

「構わないよ」

はあ……。唐揚げ定食食べたかったなあ。

俺は心の中でそう呟くと、目の前で俺の事を観察している男を睨みつけた。何となく、こいつと並んで同じメニューを平らげるのは嫌だった。

男は青を基調とした鎧で全身を固めている。まあ、昨日は風呂で出会ったのだから、その時と同じ格好では多少問題があるかもしれないが。それにしても、中々高そうな装備だ。

「ブレイブって言うんだな」

さっきの宿屋のジジイのお陰で名前がバレってしまった。

「ま、まあな」

俺は曖昧な返事をする、他の客を観察しようと辺りをキョロキョロ見渡し始めた。

「俺の名前はカリューだ。風呂場では名乗らなくて悪かったな」

誰もお前の名前なんか聞いてないんだが。またしても、くだらない情報で俺の記憶容量を埋めてしまった。早々に忘れ去りたいが、

こいつの印象は悪すぎて中々消えてくれそうにない。

「俺も改めて名乗った方がいいよな。ブレイブだ。よろしく」

一応、礼儀という物はわきまえているつもりだ。俺は簡単に自己紹介すると、今度こそ、辺りをキョロキョロ見渡し始めた。

「ブレイブの職業はなんなんだ？ 昨日は銃を風呂場に持ってきてたみたいけど。銃士か何かか？」

いきなり呼び捨てとは、人見知りを知らない人間はこれだからイヤだ。

童顔な俺の顔を見て、確実に年下であると判断したのだろうか。

俺はこう見えても、二十一歳なのだが……。

「職業は盗賊だ」

「盗賊？」

カリューが、露骨にイヤな顔に変わったのに俺は気づいた。

「なんで盗賊なんだ？」

相変わらずのイヤそうな顔で聞いてきた。こいつは俺にケンカを売っているらしい。

「どの職業に就こうと俺の勝手だろ？ それより、カリューさんの

職業は何なんだ？」

「カリューで良いよ。俺の職業は勇者だ！」

『勇者だ！』の台詞と同時にガッツポーズをしながら、カリューは叫んだ。何て恥ずかしい奴なんだろう。

それにしても……。勇者に選ばれた者は、金色に輝く『眼』をしていると聞いた事があるが、目の前のカリューの眼はどこでも見かける白地に黒目だ。

「な、なあ……」

「いや！ 言うな！」

俺が何を言おうとしたのか察したのか、カリューは突然叫んだ。

まあ、予想は大体つく。『自称勇者』のカリュー、と言ったところだろう。風呂場で思った通り、こいつの腕は大したこと無さそう

「言っておくがブレイブが今、頭に描いているような理由ではないから」

カリューは念を押したが、俺は運ばれてきた海鮮丼セットの味噌汁をすすって無視した。

「職業の話なんて止めよう！ うん！ そうだな！ 止めような！」
少し話してみると、こいつも中々楽しそうな奴だな。カリューは必死で話題を変えようとしている。

その時、どこかの窓ガラスが割れる乾いた音が聞こえた。やたらと近そうだが……。

「おい！ ここの宿屋の二階から不審な男がガラスを突き破って出てきたぞ！」

「なんだって？ そいつはどこ行っただ？」

「広場の方に行っみたいよ？」

「泥棒かしら？」

「物騒なもんじゃ……」

「宿屋の二階の角部屋か？ あそこに泊まっている人は不運だったな。ま、俺じゃないから良いや」

宿屋の外で沢山の人騒いでいるのが聞こえる。当然、目の前のカリューや定食屋の中の客はほとんど気づいてないだろう。

「外が騒がしいな」

カリューが定食屋の窓から外を眺めながら言った。宿屋の外には既に人だかりが出来ているようだ。

それにしても、今はまだ十八時前……。こんな人通りの多い時間に盗みを働くとは……。

余程自信があるか、大馬鹿者のどちらかに違いない。恐らく後者だと思うが。

……………気になる。何か重要な事を忘れているような気がする。
「どうやら、この宿屋に泥棒が入ったみたいだぞ！」

目の前の熱血漢丸出しのカリューは席から立ち上がり、今にも定食屋を飛び出しそうな勢いだ。

「あああああああああああ！」

「うわあ！　なんだよ！　ブレイブ！　急にでかい声出すな！」
「に、に、に……」

俺は右手に持っていた箸を放り出すと、一目散に宿屋兼定食屋の入り口を飛び出した。

宿屋の二階の角部屋……。

「二階の角部屋は俺の部屋だあああああ！」

俺は大声を出しながら、辺りの気配を探った。

宿屋の部屋には大した物は置いてなかったが、全部売れば結構な額になるはずだ。タコールたちがとうとう実力行使に出たのだろうか。幸いネカー＆ネマーは装備しているが、部屋の中に置いてあった荷物の中には高価なアイテムがいくつか入っている。

「落ち着け、落ち着け……」

俺は自分に言い聞かせながら五感を研ぎ澄ませた。辺りの雑音は消え、微かに聞こえる足音を追う。

盗賊である俺の足に敵うはずはなく、暫く走ると前方を走る男の姿が見えた。

驚く事にすぐ後ろにはカリューもついて来ている。足はそれなりに速いようだが、逃げ足で培ったものだろう。

「すごいな、ブレイブ。よく遠くにまで逃げた泥棒の居場所が分かるなあ」

後ろで関心しているカリューは無視して右のホルスターから、愛銃のネマーを取り出し構えると、前方の盗人に照準を合わせた。

一思いに心臓を打ち抜こうかとも思ったが、俺は盗人の右足目掛けてネマーのトリガーを引いた。

「ぐあっ！」

盗人は叫び声を上げて、その場に転がった。右手には茶色い布袋を握り締めている。

俺は盗人の目の前まで来ると胸倉を掴んで引つ張り上げた。

「盗賊の俺の部屋に盗みに入るとは、不運だったな」

目の前の鬚面の男はキョトンとしている。タコールに雇われたのだろうか？

「と、盗賊の部屋？ 俺様が入ったのは、その青髪の間抜け面の剣士の部屋だぜ？」

「え？」

俺は思わず間抜けな声を上げてしまった。

「おい！ 泥棒！ 間抜けとは何だ！」

間抜けなカリューが反論した。

「おい、カリュー、お前、自分の泊まっている部屋が被害にあったっていうのは、すぐに気づいたのか？」

「え？ 俺の部屋が荒らされたのか？」

俺と目の前の盗人は呆れた。こいつは……。

「とりあえず、手荷物拝見……」

暴れようとする盗人はカリューに預け、俺は布袋を広げた。中には金目の小物や短剣などのアイテムが色々詰め込んである。中でも一番目立っているのが、そのほとんどが布袋に納まりきれていない、立派な剣……。

「あ、その剣、俺のだ」

こいつ想像以上にアホだ。布袋から半分以上飛び出した剣は、逃げる盗人の背中にも見えていたはず。

しかも自称勇者のくせして、剣を部屋に置きっ放しにしていると信じられない。

「！」

気づくと辺りは濃い霧に包まれていた。盗人を追って何も考えずに走っていたが、どうやら人気のない路地に入ってきてしまったようだ。

「何かいるな……」

隣で真剣な顔をしたカリューが言った。こいつも気づいたか。まあ、まがりなりにもレベル二十五以上はあるのだから、当たり前か。俺は両手に銃を構えた。隣のカリューも盗人の布袋から剣を抜き

出した。

鞘には華美過ぎない装飾が施されていて、その高価さを表している。

カリューは静かに鞘から剣を引き抜いた。その刀身は濃い霧の中でも目立ち過ぎな位に青く輝いている。どうやら魔法の力を秘めた剣のようだ。

「剣に見とれている場合じゃないぞ、ブレイブ」

「ああ……」

俺は路地の先から邪悪な気配を振り撒いて、隠れようともせずに近づいてくる人影を睨みながら答えた。

周りには俺とカリュー以外には誰もいない。

さっきの盗人は、この不気味な空気を感じてあつという間に逃げてしまっている。あいつが置いてった布袋は後で俺が預かっておう。

「あ、ありゃあ、人間か？」

暗闇から出てきたのは、全身を無数の骨で作ったと思われる鎧に身を固めた、人型の何か……。

中身は人間かモンスターか……、魔族だろうか。

「おい、止まれ。貴様何者だ」

剣を構えつつカリューが叫んだ。相手はまだ二十メートル程離れた場所を平然と歩いている。相手からの応答はない。

「ちよつと脅かしてみるか」

俺はネマーのトリガーを引いた。路地を歩いて来る骨野郎の足元で軽い破裂音と共に石畳が砕けた。

しかし、骨野郎は何事も無かったかのように、ただ平然と歩いて来る。

「ありゃあ、バーサーカーか？」

カリューが言った。バーサーカーとは狂った戦士という意味で、普通は呪われたアイテムを装備してしまったり、魔法で操られてなっってしまったりする。

「まーさーかー……」

俺は下らないギャグを飛ばした後、骨野郎の足に向かってネマーのトリガを引いた。

ガコツという音と共に、骨野郎の右足の鎧らしきものが吹き飛んだ。

俺の愛銃から放たれる硬貨の威力は相当な物のはず。いくら鎧を纏っているからといって、身体が無事な訳はない。今で足の骨は粉碎したつもりだったのだが……。

「駄目そうだな」

カリューが隣で呟いた。確かに骨野郎は歩みは全く止る気配がない。しかもいつの間にか、奴は右手に真っ白な幅の広いサーベルを構えている。あのサーベルも骨で出来ているのだろうか。

「んじゃあ、まあ、小手調べと行くか！」

そう言つと、カリューは地面を蹴つて十メートル程にまで近づいてきた骨野郎目掛けて突撃した。

踏み込みの速さは相当なものだ。さて足以外はどうか、とくと拝見させてもらおう。

「てりゃあ！」

カリューの最初の一太刀は、縦一閃に振られた。全く避けようともしない骨野郎の骨兜が真つ二つに割れる。そこから出てきた顔は俺の見覚えのある顔だった。

「パッシ……」

「え？」

俺の声に一瞬、カリューが隙を見せた。その瞬間パッシのサーベルが空を斬る。

横薙ぎに振られたサーベルをカリューは上体を反らしてかわした。そのままサーベルは向きを変えて、身動きが取れないカリュー目掛けて振り下ろされた。

それは正に一瞬の出来事だった。

その辺にいるような一般の剣士にはとても真似の出来ないような

動きで、カリューはパツシの後ろに回った。

反らした上体を腹筋の力で瞬時に戻し、パツシの上げた両腕により空いた脇の空間を素早く移動した。サーベルが振り下ろされる速さと同じ速さで。いや、それ以上かもしれない。

パツシの後ろに回ったカリューは、剣の腹の部分でパツシの背中を強打した。

鈍い音と共に骨の鎧が砕け、パツシの身体は狭い路地の壁に叩きつけられた。

「知り合いだったのか？」

全く緊張感のない声でカリューが聞いた。

こいつ、強い。

あれだけ危険に見えた太刀筋が、こいつにはスローに見えているのではないだろうか。

「ま、まあな」

俺は曖昧な返事をしながら、パツシの様子を窺った。

右足は有り得ない方向に曲がり、顔の額の所からは少し深めに傷がつき血が流れ出ている。

誰かに操られていたのだろうか……。

だとしたら一番怪しいのは、骨の鎧を着て戦ったという奴だが……。

……。一体何のために、俺達を襲ったんだ……。

「とりあえず、病院に連れて行った方が良さそうだな」

気を失っているパツシをカリューに担がせ、俺達三人は昨日ロフティが世話になった高橋診療所目指して歩き始めた。

勿論、俺の右手にはカリューにバレないように預かった茶色の布袋が握られている。

「ふあああああ」

俺は喫茶店の席に座りながら大きな欠伸をした。

「眠そうだねえ、ブレイブ」

隣にはいつも元気なアフィンがいる。

結局昨日は、あの後パッシを診療所に連れて行って色々治安維持協会のおっさんに事情聴取されて、解放されたのが真夜中一時……。それから宿屋に戻って、風呂に入って、簡単に夜食を食べて、布団に入ったのが三時……。

昨日のことがあった手前、警戒して朝から起きていたから、今日は四時間しか寝ていない。

「まだ少し明るいが、これからどうするんだ？」

隣に座った相変わらず痩せ細っているロフティが言った。

今は十六時半。俺達三人はいつもの噴水で待ち合わせた後、この喫茶店にやって来ていた。

「十二時位かなあ？ ガリアスって人が騎士団の砦を出発して、お城の方に向かって行っただよ」

「え？ ガリアスを直接見たのか？」

俺は仕事熱心なアフィンに問い掛けた。

どうやらアフィンは本当に城に剣術指南に行くのかを確認していたらしい。

アフィンの話によると、ガリアスの特徴は逆立った金髪を風に揺らし全身真っ白の鎧に身を包んでいたらしい。俺が昨日見たカルシウムの塊の色とは明らかに違うんだろ？

ちなみに、ガリアスの他の特徴は背が極端に低いらしいということだった。遠くから見ただけだから、正確な身長は分からないが、見た目で百四十センチメートル位という事だ。ホビット族だろうか。

「あんまり悪い事をしているようには見えなかったけどねえ」

とすると、ホープキング山のドラゴンに生贄を差し出している首謀者は誰なのだろう……。

「じゃあ、辺りが暗くなるまで、ここでノンビリしようかあ」

アフィンは伸びをすると、机に突っ伏して寝る体勢に入った。

「俺は新しい剣でも買って来ようかな」

ロフティが言った。そういえば、昨日のザムとのイザコザで剣を

折っていたな。

「ブレイブ、付き合わないか？」

「うゝん、俺も眠いから、アフィンと一緒にここで寝てるよ」

ロフティは残念そうな顔を見ると、喫茶店を出て行った。

「おい……」

「ん、ん……」

「おい、おきろ」

「うん？」

「寝坊助だなあ、ブレイブはあ！」

眠い目を擦りながら前を見ると、ニコニコ笑っているアフィンの顔があつた。すぐ傍にはロフティも立っている。

「……………」

「おい！ ブレイブ！ 寝るな！」

「あ、ああ。冗談だよ、冗談。ちゃんと起きてるよ」

「ブレイブう。眼を瞑ったまま言っても説得力ないよ」

俺は渋々頑張つて、眼を開けた。

喫茶店の窓から外を見渡すと、辺りはすっかり暗くなっていた。

喫茶店の時計は十八時四十分を指している。二時間ちよいも寝ていたのか。

「ロフティは良い剣、手に入つたのか？」

「マクルスさんに剣を格安で売ってもらつたよ」

そういうと、ロフティは腰につけた真新しいレイピアを握り締めた。

格安で売ってもらつた割りには、それなりに高価なように見える。

「それじゃあ準備も済んだことだし、お宝目指してレッツゴ〜！」

「その前に顔を洗わせてくれ」

俺が言つと、アフィンは掲げた手を恥ずかしそくに下ろした。

「いるねえ、この前とは違う見張りが門の前に二人」

「さて、忍び込むにしてもどうするかな……」

遠くから騎士団の砦を眺めながら、アフィンとロフティが話している。

辺りはすっかり暗くなり、砦の門を照らす松明がユラユラと揺れている。少し風が吹いているようだ。

「ここは無難に、一人がオトリをやって後の二人が屋敷に忍び込む、っていうのが良いんじゃないかな」

「さすが、盗賊ブレイブだねえ」

アフィンは首を縦にウンウン振りながら言った。盗賊じゃなくも考える事だと思うが。

「で、誰がやるんだ？ そのオトリは」

ロフティが言った。

「盗賊のブレイブと剣士のロフティには、砦に潜入して鍵を探してもらった方が良いんじゃないかなあ？」

「じゃあアフィンがオトリ役をやるのか？ 大丈夫か？」

ロフティが心配そうな顔をしながら言った。俺もアフィンにオトリが務まるのか少し心配だ。

「ふふふ、安心してよ、ちょっと離れててねえ」

そういうとアフィンは袖の中から小さな瓶を取り出した。中には、灰色の粉が入っているように見える。

周りに聞こえないようにアフィンは小さな声で呪文を唱え始めた。アフィンの職業はネクロマンサー。死者を操る呪文だ。とすると、今唱えている呪文は……。

呪文を唱え終えたアフィンは、小瓶の蓋を開けて粉を辺りに撒き散らした。

暗闇の中で、それは突然姿を表した。

茶色の犬……。暗闇の中で目を凝らしてみると、その犬の身体のあちこちから白っぽい骨のようなものが見えているのが分かった。

「紹介するよ。僕の愛犬のダニー。とっても賢いんだよ」

「うん？ 犬か？ いつの間に連れてきたんだ？」

ロフティは、犬の頭の高さまで屈んで頭を撫でた。ロフティ、気づいているのか？ その犬は……。

「俺の田舎でも犬を飼っているんだよ」

「へえ、そうなんだあ。ちなみにダニーは動物実験で殺されたところを僕が助けてあげたんだよ」

アフィンの言葉が大分おかしい感じになっている。俺の嫌な予感とは当たったようだ。

ロフティはアフィンの言葉を理解しようと頭をフル回転させている。その手がダニーの空洞になった腹を撫でた。

「ぎっ」

俺は盗賊自慢の手捌きでロフティの口を抑えた。こんなところで叫ばれたら、たまったもんじゃない。

「ネクロマンサーだったよな。アフィンは」

「うん、そうだよ。ダニーを使って見張りを簡単に襲わせるから、その間にブレイブと涙目のロフティは、砦に忍び込んでよ」

隣を見ると、俺の手で鼻と口を未だに抑えられているロフティが涙目でもがいていた。

「はー、はー、殺す気が、ブレイブ」

「ごめんごめん、そのうち何か奢るから勘弁してくれ」

「ま、まあ、良いだろう、そういう事なら……」

最近こいつらとも気軽に喋れるようになったと感心する。人見知りも青髪の単純馬鹿のせいで変わってきたのかもしれない。

「それじゃあ、俺とロフティは砦の東側に回るから、アフィンは反対側に見張りを引きつけといてくれ」

「任せてよ、じゃあ、ダニー！ 行くよ！」

そして……。

ここは騎士団の砦の中の薄暗い廊下の途中。俺とロフティは無事

に皆に忍び込んでいた。

俺達のすぐ後ろには、侵入して来た窓がある。鍵は俺が開けている。方法は企業秘密だが、ガラスに穴を開けるなどという、すぐにバレてしまうような真似はしていない、とだけ言っておこう。

「ロフティは左、俺は右だ。まずは二階への階段を探して、ガリアスの部屋に辿り着こう。ただし、ガリアスの部屋に確実に鍵がある訳じゃないから、怪しそうな部屋には、侵入してみてくれよ」

「難しい事言うな……。怪しそうな部屋ってどんな部屋だよ」

「見張りが一人は立っている部屋かな。邪魔な見張りが居たら、気絶させちゃってくれ。バレないように、気絶させた兵士はどっかの部屋にでも放り込んでおいてな」

俺は色々説明したが、ロフティがそこまでスムーズに出来るとは思っていない。

「止むを得ずに戦闘になった場合は一対一を心がけてな」

ロフティ位の腕があれば複数人相手をして大丈夫かもしれない。城下町を見回る兵士達を見ても分かる事だが、この兵士達は平和ボケしている。捕まってしまったら作戦失敗のため念には念を入れておく。

まあ、何が起きても最終的には全員捕まらずに鍵が見つければ良いのだ。

後は鍵が盗まれた事がバレてホーピング山の牢屋の鍵が取り替えられる前に、俺達が牢屋に行つてマクルスの娘を保護すれば、とりあえず任務はクリアといったところだろうか。

その後マクルスのおっさんはどうするつもりなんだろう。

俺はロフティと離れると、廊下の角まで行き辺りの気配を窺った。とりあえず近くに人の気配は感じられない。

廊下の角を出ると目の前にＴ字路が現れた。

さて、どちらに行くか。ロフティに左を任せたら、ここは右に曲がった方が良いと思うけど。Ｔ字路の右からは兵士二人の話声が聞こえてきている。

あの足音の間隔だと、このＴ字路に差し掛かるまで十秒。Ｔ字路を右に少し行った所にある部屋まで、俺の足なら三秒で辿り着く事が出来る。

俺は頭の中で考えながらＴ字路の右にある部屋を目指して走り始めた。勿論、足音など立ててはいない。

部屋の前まで辿り着くと、俺は音を立てずにドアを開け部屋へと侵入した。あらかじめ部屋の中に人の気配が無い事は確認している。「暑さも大分和らいできたよな」

「そうっすね。この暑苦しい服を着ての見回りも、少しは楽になって来たっす」

俺のいる部屋の眼の前のＴ字路で兵士二人が話している。俺は息を潜めて、二人が通り過ぎるのを待った。

俺は念のため自分のいる部屋を見渡した。どうやら物置のようだ。物音を立てないように部屋の中を物色してみたが、目的の鍵は見つからない。

「じゃ、俺はこの部屋の見回り担当だから、お前は先に二階に行つて見回りを続けてくれ」

「了解っす、ミゲル隊長」

ミゲル隊長と呼ばれた男は、俺の潜んでいる部屋に入つて来た。

「はぁ、見回りなんて退屈な仕事だよなあ。第一、誰が騎士団の詰め所になって忍び込むんだよ……」

ミゲルは部屋の棚の影やカーテンの裏を左手に持った松明で照らしながら、愚痴をこぼしてる。

よし、ここだ！

俺は身を潜めている暗闇から右足を突き出し、ミゲルの足を引っ掛けた。

「う、うわっ」

ミゲルは軽く叫ぶと、目の前の棚に豪快に激突した。

砦の外にまで響くくらいの派手な音を立てて、棚にあった壺や食器がミゲルに当たり床に落ちた。

高価な物はなさそうだが、あれだけ沢山砕けたとなると補充が大変だろう。

俺はミゲルが砕けた食器の下で唸っている間に、音を立てずに急いでドアから出ると、Ｔ字路の右の通路の影に隠れた。

暫くすると反対側の通路から、先程二階の見張りに行っただと思われる二十歳前後の若い騎士が走ってきた。

俺はその若い騎士がミゲルの倒れている部屋に入ったと同時に、部屋の前を素早く横切り、二階への階段があると思われる奥の通路へと進んだ。

遠くでミゲルと若い騎士の話声が聞こえる。

「ミゲル隊長！ 大丈夫ですか？」

「ああ、スナーフか。何かに足を躓いたようなんだが……」

会話が聞こえるだけで状況は見えないが、スナーフと呼ばれた若い騎士は辺りを手に持った松明で確認しているに違いない。

「隊長、きつとこれです。ホウキが斜めに立て掛けてあるですよ」

「イテテテ……、そうか。そうすると、掃除担当のサライの仕業だな。あいつはいい加減だからな」

「全くつすね、あつはつは」

俺は遠くなるミゲルとスナーフの会話を聞きながら、目の前に見えた階段を上り始めた。

二階には、見張りの兵士の気配を何人か感じる事が出来る。階段を上りきった目の前は長い直線の通路となっており、もう少し明ければ隠れる場所など無い程だ。

俺は通路にある柱の影に身を潜めると辺りの気配を詳しく窺った。一人、こちらに向かってきている気配がある。相手を気絶させて近くの部屋に放り込んで良いが、あまり危険は冒したくない。

俺は廊下の天井が少し高くなっているのに気づくと、柱に取りつけてある火の灯っていない燭台を使って天井近くに蜘蛛の様にへばりついた。

懐から取り出した盗賊用のアイテムで、足場を多少固定する。

「何か下が騒がしかったなあ。全く、あの新米騎士だなあ……」

俺の真下を通り過ぎて、階段を下りていく兵士が呟いた。騒がしくしたのは隊長だぞ、と俺は小さく囁く。

兵士が通り過ぎるのを待って俺は廊下に再び舞い降りた。

この通路は二十五メートル程あり、部屋が左右に二・三個ずつ並んでいる。突き当たりは左に曲がっているようだ。

俺は一つずつ部屋の中の様子を探りながら通路を進んだ。時折見回りに来る兵士は、通路の天井に張りついてやり過ごす。

その後、廊下を何回か曲がり、兵士が二人見張りに立っている部屋に行き着いた。この場所はこの皆を外から眺めた時に見えていた二階中央の部屋だな。

俺はまたしても天井に張りついて様子を窺った。そろそろ足と腕が疲れてきたが、どうやらあれが騎士団長ガリアスの部屋のようだ。さて、どうやって忍び込むか……。

俺はいくつかあるプランの中から一番安全な物を選ぶと、ガリアスのものと思われる部屋の近くの柱に身を潜めた。

見張りの兵士達は目と鼻の先だが、気配を消しているためそう簡単には気づかれない。

俺は手袋の縁にくくりつけてある腕輪から小さな小石を二つ取り外すと、俺の右方と左方に向かって同時に投げつけた。丁度、扉の両サイドで見張りをしている兵士を扉から離す方に対して。

「ん？ 何か音がしなかったか？」

「そうか？ まあ、気にすることはないだろう」

俺の予想は外れた。こいつら見張りの素質はゼロに等しい。いや、実際に一人の盗賊から、団長の部屋を守ったのだから、素質があるのかもしれないが。

その時、俺が上ってきた階段を勢い良く駆け上ってくる足音が聞こえた。

「榊さん！ 和馬さん！ 下で賊が暴れてるっす！ ミゲル隊長が

足止めしているので、手を貸して欲しいです！」

大声で事態を知らせたのは、先程の新人騎士のスナーフだ。

「分かった、今行く！」

そう言つと、榊と和馬は二人共持ち場を離れ、スナーフの後について走つて行つた。

こういう時は最低一人は持ち場に残るものなのだが。

それにしてもロフティは派手にやっているようだ。お陰で俺の仕事がやり易くなつたけど。

俺は見張りの居なくなつたガリアスの部屋へのドアに手を掛けた。しかし鍵がかかっているようで開かない。俺はベルトの後ろにつけた小さな鞆から針金を取り出すと、部屋の鍵穴へと突っ込んだ。

暫く動かしていると軽い音と共に、ドアの鍵が外れた。

部屋の中は外からの月明かりを浴びて見やすくなっている。

大きめのベッドに大きなタンス。大きな姿見までついている。

アフィンの話では、ガリアスはホビット族くらいに背の低い男だと聞いているが……。相当な見栄っ張りのようだ。

俺は部屋を物色し始めた。鍵と言えば、普通、壁に掛かっているものだが……。見当たらない。

タンスを全て開けて確かめたが、やっぱり見当たらない。

「隠し扉とか隠し宝箱とかは……」

俺は冷静に考えられるように言葉に出して辺りを再度調べ始めた。鏡の裏、ベッドの下、天井……。

「ない……。本当にただの住居みたいだな……」

という事はガリアスは生贄を捧げている件に関与していないという事だろうか？ だとしたら、この皆に鍵があるということ自体、ガセネタだったのだろうか……。

「ちっ」

俺はガリアスの部屋を出て再び部屋の鍵を閉めた。

この二階で他に怪しい部屋を当たってみるしかない。一階で騎士達を引き付けているロフティはまだ持つだろうか。

俺はガリアスの部屋から順番に奥の部屋を確認していった。

倉庫……。

仮眠室その一、その二、その三……。どれも鍵が隠されていそうな感じはしない。

「？」

俺は二階の奥の角を曲がった。その先には別の騎士が見回りをしているが……。随分としっかりと警備をしているものだ。一階で賊が暴れているというのに、こいつは「何も無さそうな」この通路を警備している。

通路の突き当たりはトイレのように見える。臭いで分かった。

俺はバレようにその騎士を暗闇から観察した。

「賊って何だよ……。まさかここまで来ないだろうなあ」

目の前の騎士はブツブツと文句を言いながら通路をウロチョロしている。時折、何も無さそうな壁をチラチラと見ている。

（バレバレだな）

俺は心の中で突っ込むと騎士との距離を一瞬で詰めてみぞおちに膝蹴りを食らわした。勿論叫ばれないように一瞬で騎士の口は塞いでいる。

「よし」と

俺は騎士の口をテープで塞ぎ両手両足をロープで縛ってトイレに放り込んだ。勿論外側から鍵をかけて「使用中」にする事を忘れない。

邪魔者が消えた通路で俺は騎士がチラチラと見ていた壁を調べる。

「……」

手袋を外し両手の皮膚の感触を確かめる。こうした方が何か仕掛けがあった場合に分かり易い。

俺は微妙に出っ張っているレンガを両手で掴むと思いつき引き張った。

「ビンゴ！」

レンガが外れて小さな棚が現れた。その棚には小箱が入れられて

いる。

罣がない事を確認して小箱を取り出し中身を確認した。
そこには一本の頑丈そうな鍵が入っていた。

「これだな」

俺はその鍵を無くさないように懐にしまつて、小箱は隠し棚に戻しておいた。すぐにバレないように似たような鍵を入れておく。

盗賊はこういった鍵を入れ替えるための偽物の鍵をいくつか持っていたりする。

再び通路を戻り窓を開けて階下を確認する。どうやらロフティは裏側で暴れているようだ。

俺は静かに窓を開けると、縁に立ち出てきた窓を閉める。そして隙間から特製の金具を差込み外側から窓の鍵を閉めた。

「んじゃ」

俺は音を立てずに二階から地面へと着地した。盗賊ならこれくらいの高さは問題ではない。

外に出ると丁度砦の裏からロフティが出てくるところだった。身体の高さが切られているようだ。

「タイミングが良かったな、全部片付けたのか？」

ロフティは辺りを確認した。どうやら戦いながら騎士達を撒いてきたようだ。

俺とロフティは砦から離れるように走り始めた。

「鍵はあつたのか？」

左腕を抑えながらロフティが言った。

「まあな。一応、第一ミッションはクリアかな」

俺はそう言うのと、持っていた頑丈そうな鍵をロフティに見せた。その時、目の前に誰かが立ちはだかっているのに気付いた。

身長の高さからいうと子供か？

「お前ら……砦に何のために侵入した？」

暗闇にいるため見えないが両手に持った長い剣を攻撃的に構えている。薄明かりの下で長い髪が金色に光ったのが見えた。

「もう剣術指南は終わったんですか？ ガリアスさん……」

暗闇から子供、いや騎士団長が姿を現した。

金色の長い髪を逆立て残りの髪を腰まで垂らし、全身を白い鎧で包んでいる。アフィンが目撃した通りの姿をしている。

そして不恰好な二本の巨大な剣……。いや、ガリアスが小さいせいで巨大に見えるだけで実際には、普通の長さの剣だろう。両手に構えた二本の剣からは、淡い黄色の光が放たれている。これが噂に聞くキング・オブ・ジェミニか。

「子供はもう寝る時間だ」

見た目に似合わない渋い声でガリアスは答えた。まるで俺たちに言っているかのようだ。

「こんな皆に何のようだ？ 腕試しか？」

こいつ、本当に知らないのか？ 嘘をついているようには聞こえない……。それじゃあ黒幕は一体誰なんだ。

鎌をかけてみるか。

「鍵だよ。牢屋の鍵……」

俺は盗んできた鍵を振って見せた。

「牢屋の鍵？ 罪人を逃がそうって訳か？」

ガリアスの小さい身体から危険なオーラが噴出し始めた。どうやら正義を貫こうとする気持ちが強いらしい。

「牢屋の鍵がこの皆にあるのか？」

ロフティも剣を構えて答える。ナイスフォロー！

「……知らん！ どちらにしろ侵入者を逃がす訳にはいかん！」

そう言っただけでガリアスが剣を構えて飛び出してきた。それをロフティが迎え撃つ。

やばい！

俺はネカーをぶっ放して、ガリアスが繰り出そうとしていた連撃を阻止した。

「ぬっ」

ガリアスは右手に持つ剣の衝撃に唸り声を出す。それでも剣を手

放さなかったのはさすがだ。

「気をつける、奴は二刀流だ」

俺はロフティに注意した。

ロフティは額の汗を拭くと剣を構えなおした。疲労しきったロフティでは荷が重過ぎるか？

逃げよう。

そもそも鍵を奪った今となってはあまりノンビリもしていられない。

俺はネカーとネマーを連射した。ガリアスには行動不能になってもらわないと困る。

しかし俺の考えは甘かった。

ガリアスが咄嗟に構えた両方の剣により硬貨が弾かれた。ガリアスの小さい身体は二本の剣でほとんどカバー出来ているようだ。

「時間が無いんだ！ 邪魔すんな！」

俺は更に銃を乱射しようとした。

「！」

一瞬のうちにガリアスの姿が消えている。

「ぬおっ」

ロフティが俺の下方にレイピアを繰り出した。静かな砦周辺に剣同士がぶつかり合う甲高い金属音が鳴り響いた。

ガリアスは体勢を低くして俺に突進して来ていたらしい。低すぎて視界に入らなかった。

攻撃を阻まれたガリアスは再び俺たちから距離を取る。

遠くから複数の足音が近づいてくるのが聞こえた。他の騎士達に気付かれたようだ。

「……時間？ 何を焦る必要がある？」

ガリアスが言った。

色々詮索してくる奴だ。問答無用で斬って捨てることも出来るはずだが、それをしないのは己の正義感のためだろうか。

「お前らが差し出した生贄を助け出すんだ！」

ロフティがあまり考えずに叫んだ。

まあ、台詞を考えている時間も無かったな。もうどうにでもなれだ。

「い、生贄だと！ 何の話だ！」

明らかに目の前のガリアスはうろたえている。

何かを知っている。

しかし確証はないといった雰囲気だ。

「生贄を閉じ込めている牢屋の鍵が皆に隠されていた。俺たちはそれを奪いに来た」

俺は再び盗んだ鍵を振った。

「そ、そんなの嘘だ！」

ガリアスが攻撃をしかけてくる。

しかしその動きには迷いが生じている為キレがない。

俺は慎重にトリガを引いてガリアスの両腕を狙った。二本の剣が宙を舞った。

「ぬう！」

空になった両手をガリアスは啞然として見つめた。

俺はガリアスに近づいた。ここは情報を得られるチャンスと踏んだからだ。まだ騎士達の足音は遠い。少しは時間があるはずだ。

「お前は知らないのか？ 騎士団長ともあろう奴が何も知らない？」

「五月蠅い！」

そう言つてガリアスは腕を振り上げた。

しかし子供のような体格のガリアスの拳は俺に届くはずもなく、空しく宙を舞った。

「……」

ガリアスは抵抗する事をやめたようだ。

「やはり父上なのか……」

ボソリと言ったガリアスの台詞を俺は聞き逃さなかった。ガリアス自身も俺に聞かれたとは思っていないに違いない。

俺はロフティに目配せをすると、同時にその場を走り去った。

父上……。どうやら、ガリアスの素性をもう少し調べる必要がありそうだ。

「マクルスさんに報告に行こう。アフィンはどこだ？」

ロフティはキョロキョロ辺りを見渡した。恐らくいつもの噴水で待っているのだろう。

俺とロフティは追っ手が来ていない事を確認すると、噴水目指して走り出した。

第三章 王の希望

「よくやってくれた」

いつもの広場の噴水。そこにアフィンとマクルスは仲良く待っていた。

辺りには真夜中のせいか、人っ子一人いない。

簡単な回復なら出来るよ、と自信満々に答えたアフィンが隣でロフティの傷の手当てをしている。

何やら禍々しい空気が流れているけど……。『ロフティ、ゾンビで復活』とかになったら恐いぞ。

「で、ガリアスの言った言葉だな……」

「マクルスさんは知っているのか？ ガリアスの親父が誰なのか」
考え込んでいるマクルスに俺は聞いた。

「アラーム軍の軍事参謀長……それが今の奴の肩書きだ……」

ロフティの回復が終わったのか、アフィンが会話に入り込もうとしている。辺りに充満していた異様な雰囲気はいつの間にか消え、ロフティは無事に人間として復活したようだ。

「ガリアスさんのお父さんって、マクルスさんの知り合いなんですかあ？」

相変わらずの気の抜けた声でアフィンが聞いた。

「ふむ……。昔、奴とワシはアラーム騎士団の双龍と呼ばれてな。

数々の戦場を二人で渡り歩いたもんだ」

遠い目をしながら、マクルスが思い出すように話し始めた。

ガリアスの親父の名前はガル。マクルスと同じホビット族らしいという事は、その息子であるガリアスの背が極端に低いのも頷ける。そして、マクルスが若い頃、ガルと二人で作ってもらった剣がキング・オブ・ジェミニという事だった。今はガリアスが一人で二本使っているが、昔は一本ずつ、マクルスとガルが使用していたらしい。

それから何年かが経ち騎士団を引退する時、ガルは王宮に残り、マクルスは町で武器屋を始めた。

キング・オブ・ジエミニは二本とも王宮に残ったガルのものとなった。

それから、二十五年……。

「大体事情は分かった。で、どうするんだ？」

俺は話し終わって一息ついていいるマクルスに聞いた。

「黒幕が分かったところでワシの目的は変わらん。早速、ホープキング山の牢屋目指して出発しよう！」

夜の森をひたすら駆け抜ける黒い馬車。

俺は居心地の悪い荷台で揺られていた。広場の時計で二十二時だったのを確認したのが最後だ。今は何時なのだろう。

木々の間から見える三日月がこれからの出来事を嘲笑っているかのような。

馬車はホープキング山にあると言われている牢獄目指して一直線に突き進んでいた。

深夜の森にはモンスターが多く出没する。俺は荷台から外の様子を窺い、馬車を襲おうと近づいてくるモンスターをネマーとネカーで撃退していた。

時折馬車の前からは異様な空気が流れ、暫くするとモンスターの断末魔が聞こえてくる。恐らくアフィンが不気味な術でモンスターを蹴散らしているのだろう。あまり想像はしたくない。

唯一遠距離攻撃の出来ないロフティは、馬の手綱を握り馬車を操っている。

「マクルスさん、娘が囚われている牢獄の位置は大体分かっているんだろう？」

俺はモンスターの気配が辺りになくなった事を確認すると、マクルスに聞いた。マクルスは一人荷台でインスペクターを両手の平に乗せて眺めている。一刻も早く娘に会いたくてウズウズしているの

が手に取るように分かる。

「この先にあるホープキング山には、アラーム国専用の金鉱がいくつかあるのは知っているな？」

今は辺りに危険がない事を悟ったのか、アフィンも荷台の方に来て会話を聞いている。

俺とアフィンは小さく頷くと、マクルスは再び話し始めた。

「その中で一箇所だけ、金塊が取れる筈のない位置にアラーム国専用の金鉱があるんだ」

「そこは怪しいねっけっ！」

その時、突然馬車が止った。その勢いで喋りかけていたアフィンが舌を嚙んだようだ。

俺達は急いで外へ出ると、天を見上げているロフティの視線を追う。

「き、金色のドラゴン……」

夜空には三日月の弱い光に照らされた金色のドラゴンが飛んでいた。ここからでは距離感が掴めなくて、金色のドラゴンの全長が分かりにくいのが、時々見かけるグリーンドラゴンよりは何倍もありそうだ。

「なんだろお、綺麗なドラゴンだねえ」

アフィンは空を見上げながら悠長な事を言っている。ホープキング山の麓で見かけたドラゴン……。

マクルスの話では、生贄を差し出している相手はドラゴンという事だった。まさか、あの巨大なドラゴンが。最悪のシナリオが俺の頭の中に生まれた。あのドラゴンとは戦闘になりませんように……。「とりあえず、そろそろ歩いて行った方が良さそうだな。あまり近くまで馬車で行ったら、見張りの兵士に見つかる恐れがある」

アラームの城下町を出発してから五時間位は経過しただろうか。辺りはなだらかな斜面になっていることから、既にホープキング山に入っているのだろう。

マクルスの提案により俺達は馬車から荷物を降ろし、牢獄目指し

て歩き始めた。馬車と馬は見つからないように茂みに隠しておく。

俺が先頭になり辺りの気配を窺いつつ進む。すぐ後ろにはマクルスが続き、俺に進むべき方向を指示。マクルスの後ろがアフィン、最後尾にはロフティがついている。

マクルスの言う通りに暫く進むと兵士を発見した。左手に持った松明で辺りを照らしている。

俺は後ろからついてくるメンバーに待ての合図をすると、一人気配を消して兵士の後ろに回り、素早く口を押さえた。と同時に兵士の持っていた松明は素早く取り上げる。

右の手の平には、睡眠薬を染み込ませたタオルを持っていた。

兵士は二・三秒抵抗すると、その場に崩れ落ちた。俺は兵士を口で縛り近くの茂みに隠した。そして松明の火を消し、後方の茂みで待機している仲間に向かってオーケーの合図を出す。

「見事な手並みだな」

マクルスは感心して言った。俺は少し照れながら再び前進を始める。

それにしても辺りにモンスターの気配が無さ過ぎる。こんな真夜中の森の中ならモンスターの一匹や二匹平気で出てきそうなものだが……。

やはり軍事参謀長ガル……。奴がドラゴンに生贄を差し出して取引をしているためだろうか。

「見えてきたようだな」

後ろからマクルスが言った。盗賊の俺の眼には大分前から、兵士六人が見張りをしている洞窟に気づいていたけど。

「さて、見張りは六人だな。どうする？」

俺は後ろを振り向き、仲間に意見を求めた。

アフィンは腕を組んで考え、ロフティは頭を掻きながら夜空を見上げている。

「僕のダニーを出してもいいけど、兵士全員が持ち場を離れる事は考えられないよね……」

「全員に眠ってもらうか」

アフィンの言った意見に対して、ロフティが言った。やはりそれしかないか。

牢獄は目前。兵士にバレたとしても人質を助け出せればそれで良い、という考え方も出来る。

「それしかなさそうかな？」

俺もロフティに賛成した。他のメンバーも異論は無さそうだ。

「危険ですので、兵士達が片づくまでマクルスさんはここで待っていて下さい」

そういうと、ロフティは馴れた手つきで目から下を黒い布で隠し始めた。アフィンと俺も正体がバレないように目から下を隠す。

準備が終わると兵士達の近くまで茂みに隠れながら進んだ。洞窟の左側の茂みにはアフィン、正面の茂みにロフティ、右側の茂みに俺が隠れている。

俺達はタイミングを見計らって、同時に茂みから飛び出した。

目の前にいた兵士が俺に気づいて、慌てて右手にもった槍を構えようとしたが既に遅い。俺はその兵士の口を右手で押さえて、腹に膝蹴りを喰らわした。

兵士は口を押さえられて声を出す事が出来ないまま、その場に倒れる。ズボンの下に装備している鉄の膝当ては想像以上の威力のようだ。

その倒れた兵士の左側に立っていた別の兵士が口に笛を咥えているが、その笛には小さなナイフが突き刺さっている。俺が茂みを飛び出た時と同時に投げたナイフだ。

兵士の吹いた笛からは、プヒューという情けない音が出ただけだ。音の出ない笛をくわえたまま啞然としている兵士の後ろに素早く回りこむと、今度は首の後ろを手刀で打った。笛をくわえたまま兵士は豪快に倒れる。

俺に割り当てられた兵士二人を片づけて、周りを見渡すと、ロフティが二人目をレイピアの柄で殴って気絶させているところだった。

的確に人間の急所を突いている。

その向こう側では、アフィンが身体の周りに異様な空気を纏いながら、兵士二人を同時に失神させていた。一体何をしたんだろっ……。

「一先ず片づいたな」

俺は辺りで伸びている兵士全員を縄で縛り終わると、茂みに隠れているマクルスと呼んで言った。

「この中に娘がいるはずだ」

マクルスは鉄で出来た牢獄の入り口を睨みながら答えた。俺は懷から鍵を取り出すと、牢獄に取りつけられている錠の鍵穴に静かに挿した。乾いた音と共に錠が外れる。

外れた錠前を少し眺めてみる。やはり生贄を閉じ込めておく牢屋らしく複雑な作りをしている。これは俺の開錠の腕でも無理だっただろう。

「洞窟の中には人の気配は無さそうだけど……」

俺は中の様子を窺って言った。洞窟は結構長いらしく薄暗いせいもあり、奥まで見渡す事が出来ない。

「まだ兵士が残っているかもしれない。マクルスさんは俺の後について来てくれよ」

「ああ」

返事をしたマクルスの肩にはインスペクターがちょこんと腰を下ろしていた。人質が捕まっている所を証拠として映像に残すつもりだろう。

俺は長い洞窟の所々についている松明の明かりを頼りにしながら、洞窟の奥を目指した。

思ったより深くない洞窟だった。二分程歩いたところで更に鉄の牢獄が作られており、その中のベッドに女性が一人横になっているのに気づく。辺りに兵士はいないようだ。

「おお、サニ！ 助けに来たぞ！ 大丈夫か？」

マクルスは牢獄の鉄柱を握りながら、ベッドで横たわっている女

性に向かって小さく囁いた。

サニと呼ばれた女性はベッドから身体を起こして、こちらを確認しているようだ。頭からスッポリとフードを被っており顔を確認する事は出来ない。

「……………」

サニは緊張しているせいか声を発する事が出来ないようだ。

俺は目の前の錠前を確認した。

やばい。

まさか鍵がもう一つ必要だったとは。俺は試しに皆で盗んできた鍵を鍵穴に差し込もうとした。全然大きさが合わない。

「え？ 開かないの？」

アフィンが心配そうに俺の手元を覗き込む。

「いや、心配するな」

外側にあつた錠前よりは大分簡易的な鍵だ。これなら「頑張れば」なんとかかなりそうだ。

俺は腰から針金を取り出すと鍵穴に差し込んだ。
手に神経を集中する。

……。

……………うん。

この先が曲がっているのか。

俺は鍵穴の形を確かめると針金を一度引き抜き、手先で器用に針金を鍵の形に折り曲げた。

「へえ」

何にでも興味を示すアフィンがさっきから手元を覗き込んでいる。

「企業秘密だぞ」

「うん」

「よし開いたぞ」

俺は錠前を誇らしげに掲げた。嫌な汗を大量にかいたが結果オライだ。

マクルスは扉が開け放たれたと同時にサニに抱きついた。親子の

感動の対面だ。

アフィンが鼻を吸る音が聞こえる。感動して泣いているのだろうか。

「他の兵士に気づかれると面倒だ。早くここから脱出しよう!」

ロフティが辺りの様子を窺いながら言った。

俺達はマクルスとサニを守るように陣形を組み、洞窟の出口目指して進み始めた。

「マズイな……。洞窟の出口に何者かの気配を感じるぞ」

暫く進んでから、俺は気づいた。相手は二人。足音からして、四足歩行の獣ではないようだ。

「ここは僕に任せてよ」

そう言うアフィンは先頭に立ち、怪しげな呪文を唱え始めた。すると、みるみるうちに辺りの空気がどんよりとし始めた。先程兵士を失神させた術を向こう側からやってくる二人に使うつもりのようなのだ。

確かにこの狭い洞窟内では剣を振り回したり、素早く動いて敵の後ろを取る事は難しい。ここは、アフィンに任せるか……。

しかし、俺の考えは甘かった。

アフィンの呪文が完璧に唱え終わる前に、この怪しげな空気に気づいたのか、二人のうちの一人が凄い勢いでこちらに向かって突進して来た。

虚を突かれたアフィンは呪文を中断して杖を身体の前に構える。

派手な打撃音が洞窟内に響き、同時にアフィンの身体が後ろに吹き飛んだ。

敵の攻撃が止った瞬間を狙って、俺は右手に構えていたナイフを相手の右手目掛けて振り下ろす。

しかし、それを察知してか、相手は不安定な体勢から俺に蹴りを繰り出してきた。その攻撃に素早く反応した俺は、後方に飛び退りかわす。

俺の動作の間に相手は既に体勢を立て直し、剣で突きの構えを取

っている。剣には鞘がついているようだが、この一撃を喰らったら痛い！

「でやつ」

敵の突きの攻撃に合わせてきたのは、後ろから飛び出してきた口フティだった。俺の目の前で口フティの剣と敵の剣とが交錯する。

その間に、俺は更に後方に下がって、体勢を立て直した。左手にはネカーを構えている。

豪快な音を立てて、傍の洞窟の壁が砕けた。敵の振るった剣が洞窟の壁に当たったようだが、その砕けた石の破片が俺の方へと飛んでくる！ こいつ、狙っていたのか！

俺は後方に丸腰のマクルスとサニがいる事もあり、腕を十字に構え、石の飛礫を防いだ。

「ブ、ブレイブ！ こいつ、強いぞ！」

目の前で剣を交じ合わせている口フティが叫んだ。俺は防御を解き、再びネカーを構える。

「え？ ブレ……」

暗くて確認出来ないが、一瞬間こえた声はカリユーの声。

その一瞬だけ放ったカリユーの言葉が終わる前に、今までマクルスの後ろにくつついていたサニが突然走り出した。

「サ、サニ！ どうした！」

マクルスが叫んだが、サニは止る気配を見せない。

「あんた達が馬鹿な事している間に、奴らが来ちゃったよ！」

突然喋ったサニの言葉に誰よりも驚いたのはマクルスだった。

「サニじゃない！」

サニを追い洞窟を出て真っ先に入ったのは、鎧を纏った一匹のモンスターだった。それは豚を人型にしたようなモンスター『オーク』だ。しかも金色に輝く毛並みをしている。普通、オークは茶色の毛並みのはずだが。

洞窟出口の脇には俺達がサニだと思い込んでいた女性が立ちすく

んでいる。

「今回の生贄は粹が良いみたいだな」

信じられない事に目の前のゴールドオーク（勝手に名前をつけた）が喋った。

モンスターは普通、言葉を発する事は出来ないはず。ほとんど見たことはないが、これが動物が進化したという獣人だろうか？

「金色のオークだあ！　綺麗だな」

一人アフィンが寝ぼけた事を言っている。言葉を発するモンスターには驚かないのだろうか。

「ちよつと黙ってて！」

謎の女性の一喝によりアフィンは黙り込んだ。なんて気の強い女性だろうか……。

「まずは、自己紹介をするわ！　私の名前は秋留、アラーム国の王ラディズにホーピンググ山の調査を依頼された冒険者よ！」

そういう事か。マクルスは自分の娘を助けるために俺達三人に依頼し、王様は軍事参謀長ガルの悪事に気づいて秋留という冒険者に依頼した……。ブッキングしてしまったという訳だ。

「名乗ったところで状況が変わる事はない。お前は我らが王、ゴールドドラゴン・バルバロス様の餌となるのだ」

オークはそう言くと、巨大な三叉の槍を構えた。

「いや、不味そうな生贄が何匹かいるみたいだが……」

オークが俺たちの顔を眺め回して言った。失礼な奴だ。俺の肉はきつと美味いに違いない。

「分かってないみたいだね。王様にガルの悪事が判明すれば、人間の生贄を捧げる事なんて打ち切りだよ！」

「ぬっ……」

「私が帰らなければ生贄を捧げていたのは真実だったと王様に証明出来た事になると思うけど」

オークがたじろく。秋留がニヤリと笑って、ここぞとばかりに続ける。

「貴方達モンスターにとって倒されるかもしれない危険を冒して人里に下りてくるよりも定期的に提供される生贄の方がリスクがないはずよね」

先程から聞いていると、色々と言っているが、秋留は可愛い声をしている。

「ぬううう！」

醜い豚のような顔が一層、醜く歪んだ。

「どうするの？ あんただけの判断で私達をどうにかするつもり？」

秋留は尚も強気な発言でオークを睨みつけているようだ。依然、フードを被っているせいでどんな顔で凶暴なモンスターに怒鳴りつけているのか分からない。

「そ、そこで待つておれ！ 人間共！」

オークはそう言つと、のっしのっしと歩きながら、森の中へと消えていった。言葉を話すモンスターというのは珍しいが頭はあまり利口ではないようだ。

暫く俺達はその場で凍りついていた。秋留と名乗った冒険者の迫力に唖然としているのである。

「それじゃあ、全員集まって状況を話し合いましょうか」

俺達は洞窟の目の前で小さな焚き火を囲んで腰を下ろした。秋留は近くの切り株に腰を掛けています。

オークが去つた後、秋留が目深に被っていたフードを外した時に、俺は虜になってしまった。秋留から目が離せない。秋留の事が気になって仕方がない。一体どうしてしまったんだろう。

秋留は腰位まであるピンクの髪の毛をしていて、可愛い顔をしている。歳は俺と同じ位だろうか。大人っぽい面もあれば、子供っぽい面もある。そんな不思議な女性だ。

真っ白な長いマントを装備し、短めの茶色のスカートを穿いている。上着はマントでほとんど隠れてしまっていて見えないが、クリーム色のセーターのようなものを着ているみたいだ。

冒険者のはずだが、装備がほとんど無いに等しいのは、敵に自分の正体がバレるのを防ぐためだったのだろう。まあ、こうなってしまっただけはモンスター側に正体を隠す必要もなくなったが……。

「おい！ ブレイブ！ 何ぼけくっとしてるんだ？」

突然、話し掛けられて、焚き火の反対側に座っている秋留から視線を外した。隣に座っているロフティが俺の顔を見ながら話し掛けてきたようだ。

「な、何でもない……」

俺は曖昧に答えると、焚き火を見るフリをして、チラチラと秋留の方を観察した。

「サニは無事なんですか！」

今まで気になっていて仕方が無かったのだろう。突然立ち上がった秋留の方を凝視しながら、マクルスが言った。

「心配ないですよ。山の麓の小さな町で国王直属の兵士に保護してもらっていますから」

秋留はモンスターと駆け引きしている時とは正反対の優しい口調でマクルスに答えた。

「う、うむ。分かった。感謝する……」

マクルスは安心したのか、再び地面に腰を下ろした。

「お姉さん、秋留って言うんだよねえ？ 亜細李亜大陸の人？」

アフィンはいつもと変わらぬ口調で秋留に話し掛けた。その性格、少し見習いたいものだ。

「そうだよ。亜細李亜大陸にある小さな村で育ったの」

秋留は朗らかに答える。その笑顔が眩しい。

「さっきのオークが戻って来る前に、状況の説明をした方が良さそうね」

秋留はカリユーの隣で怯えている爺さんの方を見ながら言った。見慣れない爺さんだが恐らくカリユーの雇い主で、黄金で一攫千金を狙う貧乏人だろう。

状況を察したのか、カリユーが話し始めた。

「このご老人はターキンさん。俺の雇い主で、この山で黄金を掘り当てるのが目的だ」

カリューは怯えて声も出せない老人の代わりに答えた。

「ターキンさん、安心して下さい。すぐに安全な場所に連れて行きますので」

秋留はまたしても優しい口調で言った。すると、今まで震えていたターキン老人は、安心したのか秋留を聖母を見つめるような眼差しで見た。

その汚い眼で秋留を見るな……と、俺はどうしてしまったんだろう。今までこんな気持ちになった事などない。まさか……。

「で、剣士さん？ 結構腕が立つようだけど、名前は？」

秋留が聞く。早く俺にも聞いて欲しいものだが。後どれ位で俺の順番が回ってくるのだろうか。

「俺はカリュー。剣士ではなく、勇者だ！」

カリューは厳しい目線で秋留を睨みつけた。余程勇者という職業を強調したいらしい。しかも、カリューの眼は、深く詮索するなど言っている。

「あれえ？ 勇者って金色の瞳をしてるんじゃないかっただけえ？ カリューさんは僕と同じ黒い瞳だけとお？」

アフィンには睨みつけ攻撃など聞かないという事を知らなかったようだ。露骨に聞かれてカリューは戸惑っている。

「まあ、細かい話は後にしようよ。オークが戻ってきちゃうかもしれないし」

秋留は先を促した。隣でカリューも力強く頷いている。秋留は続けてカリューに質問した。

「何で洞窟に入ってきたの？」

「洞窟の入り口を見ると、兵士が五・六人倒れていたんだ。気になつて洞窟に入つていたらブレイブ達と鉢合わせになった、という訳だ」

そう言つてカリューは俺の方を見た。

ナイス、カリュー！　これで俺の話す番がやってきた。秋留と会話が出来るぞ。

「その黒い人がブレイブ？」

う……。黒い人か……。確かに頭も黒ければ格好も黒いけど……。

「初めまして。ブレイブです。年齢は二十一歳。職業は盗賊でレベルは三十です。武器は二丁の……拳銃です！」

同時に両手に愛銃であるネカーとネマーを構えて言った。

うん、決まった！

「そ、そうなの？　ふん。それより、もっと肩の力を抜いて喋ったら？」

た、確かに……。俺は緊張のあまり肩に力が入り、訳の分からない『ですます調』で話していた。

「で、予想するに、そのホビットの人に『牢獄に捕まっている娘を助けてくれ』と依頼された、っていう感じかな？」

秋留は言った。正にその通りだが、そんなに完結に言われると秋留と会話する言葉がなくなってしまう。

「マクルスです。娘の事は本当に感謝しています。まさか、アラーム国王殿も同じ事をお考えになっていたとは……」

マクルスは突然話し始めた。俺の出番はもう終わりか？　俺は構えていた拳銃を静かにホルスターに戻した。

「先代のラディズ国王は金を安全に採取するために、ホープキング山の長であるゴールドドラゴンと取引をしたの」

秋留はまるで教師のように俺たちに説明を始めた。その話し方は分かり易く優しい感じがする。

「でもそれは人間の生贄を捧げるような取引ではなかった。最近になつて生贄を捧げ始めたのは軍事参謀長のガルだ……ラディズ国王はそう考えているわ。私はその事を確認しに来たの」

マクルスが「やはり」と小さく呟いて頷いている。これで俺たちは騎士団の砦に侵入しただけの犯罪者ではなくなったという事だ。

秋留は思い出したかのように俺の方を見ると会話を続けた。

「で、ブレイブの隣の陽気な長髪の人と細い人は？」

「僕はアフィンだよ。ネクロマンサーなんだあ！」

「俺の名前はロフティ。剣士だ」

二人は簡単に挨拶を済ませた。

「そう、ありがとう。随分頼もしいメンバーだね。当初は私一人で頑張る予定だったけど、随分楽になりそうだよ」

「うん？ 頼もしい？ 頑張る？ 楽になる？ 一体秋留は何をしようとしているんだろうか。」

「な、なあ、秋留さん？ 具体的にラディズ国王には、どんな依頼を受けたんだ？」

俺は秋留に聞いた。

「秋留、で良いよ。ブレイブのが年上だし」

「そうか。少し大人っぽい感じがしたが、秋留の方が年下だったか。とりあえず詳しい話は後ね。これからモンスターと戦闘になるかもしれないから、マクルスさんとターキンさんは山を降りた方が良いわ。麓の町でサニさんも待っているだろうし」

秋留が言った。まさか、あの巨大なゴールドドラゴンと一戦やらかすつもりだろうか。秋留の事は気になるが、戦闘は少し遠慮したい。

「ロフティとアフィンには、二人と一緒に山を降りてもらおうかな。モンスターが出るかもしれないから、マクルスさんとターキンさんの護衛よ」

秋留は的確に指示した。パーティーのリーダーの素質があるようだ。「秋留。悪いんだが、雇い主を見ず知らずの冒険者に預ける事は出来ない」

「カリューは言った。どこまでも頭の堅い奴だ。やはり、こいつとは上手くやっていけない」

「依頼人を連れて怪しげな洞窟に入る事は出来ても、他の冒険者に雇い主を預ける事は出来ない？」

秋留は少し強めの口調で言った。秋留の言葉には魔力が籠ってい

るようだ。その言葉を聞いたカリューは黙って、「任せたぞ」とロフティに言々とターキンさんを預けた。

「ブレイブ、念のためインスペクターを預かっておいてくれ」

マクルスが俺のところまでやってきてインスペクターを渡してきた。俺は黙って頷くとロフティ達を見送る。

親父二人組みを連れたアフィンとロフティは馬車の止めてある道へ戻って行った。その姿はすぐに見えなくなった。

「で、聞かせてもらおうか。俺とブレイブを残した訳を」

俺達三人になった後、カリューは秋留に聞いた。それは俺も気になつていた事だ。

「カリューはロフティより腕が立つと思つたし、持っている剣は魔法剣でしょ？ アフィンはネクロマンサーって言つてたけど、私もネクロマンサーの術は使えるしね」

そこまで話すと秋留は俺の方を見た。まともに眼が合う。ど、ドキドキするぞ！

「ブレイブは何かしてくれそうだから残した」

俺は頭を落とした。不確定要素な訳だ、俺は。その期待を裏切らないように張り切つて仕事をさせて貰おう、って……仕事？

「そう言えば、これから何をするつもりなんだ？ まださっきの質問の答えを聞いてないけど」

俺が聞くと秋留は空を見ながら静かに答えた。そう、俺も気づいていた。山の頂上の方から、何か巨大な物が空を飛んでくる気配に……。

「王様から頼まれた内容……。生贄になりすまし直接ゴールドドラゴンと交渉する。生贄は今後捧げないと……」

空を飛ばたいってくる気配は勢いを増して、こちらに近づいてくる。そんな事、許してくれなかったら？」

カリューもようやく気配に気づいたのか、青く輝く剣を両手に構えながら聞く。

「ラディズ国王には交渉に失敗した場合は逃げるようにって言われ

ているけど……逃げさせてくれないければ倒すしかないよね。国王は考え方が甘いのよ……」

秋留は静かに答えた。目の前に降り立った巨大なゴールドドラゴンを前にして。

普通のドラゴンが人間の身長約二倍、目の前のゴールドドラゴンは俺の身長約四倍程はありそう。山の麓で見たドラゴンは、やはりこいつだったか。

「誰を……倒すって？」

ゴールドオークに、バルバロスと呼ばれていたモンスターの王は、威圧感のある声で言った。バルバロスが喋るだけで軽く吹き飛ばされそう。その口からは大量の涎が垂れてきている。

「私達の会話が聞こえていたなら、すぐに答えてくれるかしら？」

秋留はゴールドオークにも言っていたような強気な口調でバルバロスに話し掛けた。

「グアッハッハッハ！」

バルバロスは豪快に笑った。辺りの木々が軋み、大地が揺れているような印象さえ受ける。

「ゴリアスの言っていた通り、面白い人間のような、娘よ！」

秋留の頭の高さまで首を下ろし、人間の頭の大きささほどもある眼で秋留を見つめながら言った。迫力があり過ぎるが、本当にこいつと戦わないといけないのだろうか。

「臭い口を近づけないでよ！ で、答えはどっちなの？」

相変わらず秋留は強気な口調で答えている。最早、笑うしかないか。あはは……。

「答えは……」

と同時にバルバロスは大きく息を吸った。まさか！

「ノオオオオオオオオオオオオだあああああああ！」

答えと同時にバルバロスの口から炎が噴出される。それを予想していたのか、秋留はどこから取り出したのか、折りたたみ式の杖を取り出し、呪文を唱えた。

「ヴィント・ヴァント！」

秋留の言葉と同時に俺達の目の前に突風が吹き荒れた。襲い来る炎は、その風の壁によって、四方に散る。

「ほう！ 面白い！」

血走った眼でそう言うと、バルバロスは巨大な羽を広げた。炎の次は風か！

「だりゃあああ！」

隣で襲い来る炎とそれを防いだ秋留の魔法に啞然としていたカリューが叫びだし、巨大なバルバロスの足を駆け上っていく。

それに気づいたバルバロスは右手でカリューを払いのけようとする。

俺は両手に構えた銃から硬貨を連射した。ドラゴンの強固な身体はそう簡単には傷がつくはずもないからだ。

俺の放った硬貨はバルバロスの右手から突き出た爪をことごとく砕いていく。その間にカリューはバルバロスの肩に乗り、巨大な翼目掛けて飛び出した。バルバロスの広げた翼だけで、小さな宿屋位の大きさがある。

「又オオ！」

バルバロスは巨大な雄たけびを上げた。

カリューは空中で剣を振り回し、バルバロスの左翼をスタスタに切り裂く。一方、俺の方もカリューの動きに見とれるだけではなく、ネカーとネマーを一直線上に連射し、右翼を横に切り破いた。

その状態で大きく動かしした翼からは、威力の落ちた風が吹き荒ぶ。しかし、そこは巨大なドラゴンの羽ばたき。威力が落ちたからといって、簡単に防げるようなものでもなかった。

二メートル程吹き飛ばされた俺は一回転して体勢を立て直した。隣では、秋留が可愛く尻餅をついている。あまりの威力に啞然としているようだ。この化け物を一人で相手にしようとしていたんだから度胸が相当据わっているのか後先を考えていないのか……。

「小癪な人間共めえええええ！」

雄たけびに近い声を発し、左手を空中で振った。

俺の眼にはその左手から空気を切り裂いて何かが飛んでくるのが見えた。

咄嗟に右側にいた秋留を突き飛ばし、その何かを避ける。

俺達がいた場所が豪快な音と共に三本の爪の形に削れた。その攻撃で俺は左足に軽いダメージを受けた。

「あ、ありがとう」

突き飛ばして俺の腕の下にいる秋留が言った。俺は慌てて秋留から離れると、再び銃を構えた。若干左足が痛い、気にしている場合ではない。

バルバロスの足元では、爪での攻撃の隙を突いたカリューがバルバロスの左足を剣で切り裂いていた。真っ赤な血が辺りに舞った。

「グオオオオオ！」

何度目の雄たけびだろうか。バルバロスは突然、凄い勢いで身体を反転させた。

俺の視界の端でカリューが森の中へと吹き飛ばされた。

「尻尾だ！」

俺は叫んだが既に遅かった。思いつきり近くの大木に叩きつけられる。しかし俺の叫び声のお陰か、秋留は地面に伏せて尻尾の攻撃を防いでいた。

「岩山の巨人ジャイアントロックよ！」

秋留が杖を構えて立ち上がりながら、呪文を唱え始める。

一方バルバロスは更に半回転し、その勢いで左手の爪で秋留を襲う。しかしその動きを予測していた俺は、懷から小型の火薬瓶を取り出し素早く火をつけてバルバロスに投げつけていた。丁度、左腕の肘関節目掛けて。

小さな爆発音と共に、バルバロスの左腕から血が吹き出た。元々、小さな火薬瓶如きに巨大な腕を吹き飛ばす事は出来ないと判断していた俺は、バルバロスの左腕の関節を狙っていた。

腕の関節を攻撃されて腕が曲がったバルバロスの攻撃は、秋留の

遙か頭上を通り過ぎた。憎悪の眼差しが一瞬俺に向けられる。

「我の前にその力を示せ！ ジャイアント・アーム！」

秋留が更に呪文を唱えると、同時に秋留の目の前の空間が歪みバルバロスの腕と同サイズの岩で出来た腕が飛び出してきた。

「又オオオオ！」

秋留の正面を向いていたバルバロスは、突然の巨大な腕の攻撃をまともに顔面に受けた。鼻の穴から血飛沫が上がる。

バルバロスの頭がのけぞった瞬間、森から飛び出してきたカリューは再びバルバロスの身体を駆け上った。

「グハッ」

丁度心臓の位置。カリューは剣を突き立てた。同時に血を吐くバルバロス。しかし、まだ終わっていない！

「このバルバロス様を舐めるなよおおお！」

バルバロスは左手で胸に剣を突き刺しているカリューを掴み上げると、地面に叩きつけた。カリューが二・三度地面を転がった。

バルバロスの胸には剣が突き刺さったままとっている。カリューの腕と剣でもドラゴンの厚い皮膚を突き破る事は出来なかったようだ。

「グオオ、グオオ、この人間共めが……」

バルバロスは息を切らしながら、俺と秋留を睨みつけている。

「バルバロスさん、元々、先代アラム国王の時代から賢者の石を貰っていたそうですね。その代わりにホープキング山での金の採掘を許可していた……」

賢者の石？

確か凄い力を秘めた石だと聞いた事があるが……。詳しい事は知らなかった。盗賊の中にはレアで高価なアイテムを知っている者も多いのだが、俺にはそういう知識はない。

「で、そこに現れたのがガル軍事参謀長……。金を更に採掘するために、人間の生贄を差し出そうと言いついてきた……」

秋留は尚も続ける。それを黙って聞くバルバロス。まるで自分を

落ち着かせようとしているようだ。

「そうだ！ あの人間が余計な事を言ってこなければ、こんな事はならなかったんだ！」

バルバロスの顔が憎悪で歪む。ようやく真実が見えた。俺の肩に必死にしがみついているインスペクターも狂気に歪んだバルバロスの姿と証言を撮影し続けている。

「俺は知らなかったんだ！ 人間を喰らうと止められなくなるという事を！」

「中毒性があるのよ……。だから魔族はいつまでも人間を襲い続けなくてはいけない。人間と魔族の争いは終わる事はないのよ」

秋留は悲しそうな顔をしている。元々争いごとなど好きではないのだろう。心の綺麗な秋留は無理をして戦闘をしているに違いない。可哀想だ。俺が守ってやりたい。

ん？ それにしても……。

「なあ、バルバロス……。どうして城に降りてきて、人間を襲おうとはしなかったんだ？」

俺が聞くと、バルバロスの顔が更なる恐怖で歪んだように見えた。

「ガルだ……。あいつには敵わないiiiiiiiiiiii……」

バルバロスが首を大きく振る。

バルバロスの中で何かが壊れ始めているようだ。

「なぜ？」

秋留が今までとは打って変わって、優しい口調で聞いた。

「それは……」

バルバロスの顔が恐怖に引きつる。いつの間にか焦点も合わなくなってきたようだ。

「奴の眼だ……。あの眼には逆らえない……」

バルバロスが急に静かになる。

土ぼこりの舞う戦場に暫しの沈黙が流れた。

「どうしたの？ バルバロス？」

秋留はバルバロスに一步近づき、尚も優しい口調で語りかけてい

るが、俺は嫌な予感がした。

静かになったバルバロスの内側から発せられる何か強い感情により、身体を動かす事が出来ない。

それは秋留も同じ様で、顔に冷や汗をかきながら必死に動こうとしている。

目の前でバルバロスが大きく息を吸う。

「喰わせろおおおおお！」

あらぬ方向にバルバロスが右手を振り上げて攻撃を繰り出した。

巨大な大木が木っ端微塵に吹き飛ぶ。

「俺様の我慢の限界に近づいた時にいいいい……生贄はいつもやってくるううう！」

口を開いて近くの大木を噛み砕く。

荒れ狂うバルバロスに恐怖していて俺たちは動くことが出来ない。

もう駄目か！ そう思った瞬間、俺の脇を通り抜けてカリューがバルバロスの身体を再三登り始めた。

どうやらカリューはバルバロスからの威圧感を跳ね除けて動けたらしい。

そしてバルバロスが炎を吐くのと同時に胸に突き刺さっていた剣を抜き出し、バルバロスの顎へと勢い良く突き刺す。その衝撃でバルバロスの顎が宙を向いた。

「ゴガアアア！」

一発目に放った炎よりも二倍の威力はあろうという炎の柱が天に向かって立ち上る。薄暗い空が、パツと明るくなった。

「うおおおおお」

俺は大声を出して気力を振り絞った。全身から汗が噴出したが何とか動けそうだ。秋留も隣で何とか精神を集中させて動こうとしている。

突然目の前の地面が二メートル程先から削れ始めた。

俺はネカーとネマーを盾代わりに目の前で十字に構える。気づくのがもう少し遅ければ、バルバロスの爪の攻撃で即死していたかも

しない。盗賊の動体視力があつてこそ防げたのだろう。

そんな事を宙に舞いながら考えた。バルバロスの攻撃により、俺は十メートル程宙に吹き飛ばされていたからだ。ダークスーツの胸の所は大きく裂け、胸を少し斬られているが致命傷ではない。問題はこのまま地面に落ちたら結構痛いという事だ。生憎バルバロスの攻撃で身体を動かす事が出来ない。

「ヴァイント・ヴァント！」

俺が地面に落ちようという時、秋留が魔法を唱えた。一回目のバルバロスからの炎の攻撃を防いだ風の壁。しかしそんなものを喰らったら、俺は再び宙を舞ってしまう。

だが取り越し苦労に終わった。威力を弱めた秋留の魔法は、俺の落下の速度を落とすだけに収まっていた。軽く地面に尻を打ちつける。

地面に腰を下ろしながら、横を見上げて秋留に礼を言った。

「助かったよ」

「和んでいる場合じゃないぞ！」

いつの間にか目の前で剣を構えていたカリューが言った。その向こう側では、バルバロスが狂気の眼でこちらを睨んでいる。

最早話し合いなどで解決出来る問題では無さそうだし久しぶりの獲物を逃がす気もないらしい。

「生贄が万が一反撃に出てもどうにもならないような状況にバルバロスを置いているんだな」

俺は体勢を立て直しながら、秋留に言った。

「許せねえ野郎だな！ 同じ人間として恥ずかしいぜ」

カリューに話し掛けた訳ではなかったが、振り向いてカリューが答える。

「可愛そうだけど……ゴールドドラゴン……、倒すよ！」

秋留がバルバロスの方を向いて言った。

ゴールドドラゴン……。秋留はそう言った。意思のないモンスターと認識するためだろう。そうでもないかと、目の前の利用された

ドラゴンに止めを刺す事をとまどってしまっ

ゴールドドラゴンが大きく息を吸う。その攻撃は隙が多いぞ！

俺は心の中で叫ぶとネカーとネマーを構え、トリガーに指を置く。

同時に目の前から突風が吹き荒ぶ！ しまった！ 翼の攻撃か！

攻撃態勢を取っていた俺はドラゴンの攻撃により、後方にある茂みに吹き飛ばされた。カリューと秋留も突風により攻撃出来ないでいるようだ。

「ガアアアア！」

ドラゴンの叫び声、そして吹き荒ぶ突風の中に吐き出された炎が交ざった。

燃え上がる木々。熱を帯びた空気。辺りは一瞬にして火の海と化した。辺りを炎で囲まれた俺は近くの燃えていない木々を駆け上り、高い位置から、比較的炎の回っていない地面へと飛び降りる。

と、同時に目の前にいるドラゴンに対して、硬貨をぶっ放す。しかし、予想通りドラゴンの堅い皮膚に弾かれてしまった。

「グオオ？」

今の攻撃でドラゴンに気付かれたようだ。こちらを向いたドラゴンは左手で宙を風ぐ。同時に、襲い来る風の爪。それを寸前のところで前転してかわす。背中に痛みを感じた。避け切れなかったようだが、痛がっている暇は無い。

前転の途中でネカーとネマーに硬貨を補充した俺は、更に近づいたドラゴンの胸を目掛けて狙いをつける。狙いはズバリ、カリューが剣で突き刺した傷。

「グガアアア！」

見事に心臓の傷に命中した。と、安心していると、ドラゴンの左足が俺目掛けて飛んできた！ こ、これは避けられない！

「ジャイアント・フット！」

突然聞こえてきた秋留の声と同時に、俺の目の前に巨大な岩の足が飛び出てきた。

その岩の足は、勢い良くドラゴンの左足を踏みつけた。再び叫ぶ

ドラゴン。

そして追い討ちを掛けるように、カリューが反対側の足から駆け上る。

俺はカリューの援護をするべく、ネマーとネカーのトリガを引き、心臓の傷へと打ち込んだ。ドラゴンは止め処なく叫び続ける。その叫びが悲しく聞こえる。後少しで楽にさせてやるからな。

「だりゃあ！」

カリューは叫び声と共にドラゴンの胸まで駆け上がった。まさか、先程傷つけた胸の傷に再び剣を突き刺すつもりだろうか？ しかし、その傷には俺の放った硬貨が詰まっただけで奥まで突き刺す事は出来ないはず。

俺の不安とは裏腹に、カリューはそのままドラゴンの身体を駆け上り、顔の目の前までやってきた。

カリューは、そこから頭上に剣を振りかぶる。

「はあっ！」

気合と共にカリューは、ドラゴンの顔面目掛けて剣を振り下ろした。額からは大量の血が飛び散ったが、傷は浅い。怒り狂ったドラゴンは息を吸わずに炎を吐き出す。そんな事も出来るのか！

まともに炎を喰らうカリュー。しかしドラゴンの額に剣を突き刺したまま、その攻撃に耐えた。何て奴だ。

「止めだあ！」

カリューはそう言うのと突き刺していた剣を一度引き抜き、再び同じ傷へと勢い良く剣を振り下ろした。

一度目は剣のつばの部分までしか突き刺さらなかった剣が、今度はカリューの二の腕位の深さまで、額の中へと突き刺さった。

声にならないドラゴンの絶叫。辺りの空気が振るえ、大地が揺れる。その振動により辺りの炎は一層強く燃えた。まるで森の主を送っているかのように。

ゴールドドラゴン・バルバロスの最期だった。

ドラゴンの巨体カリューごと地面へと倒れる。その衝撃で燃え

盛っていた大木がバルバロスの動かない身体へと倒れこむ。

ギリギリのタイミングでバルバロスの身体から離れたカリューは引き抜いた剣を鞘に収めた。カリューの身体はバルバロスからの返り血で真っ赤になっている。

炎の上がった森からはモンスターの鳴き声が無数に聞こえた気がした。

主人がこの世を去ったのが分かったのだろうか……。

倒す事でしかバルバロスを救う事が出来なかった俺達は、燃え上がる炎がバルバロスの身体を包み込むまで暫くその場に立ち尽くしていた……。

第四章 転機

森を降り始めたのは、それから一時間程経ってからの事だった。燃え広がってしまった炎を秋留が魔法で消火していたからだ。秋留の魔力もほとんど底をついていたようで、だいぶ息が荒くなっていた。

辺りは徐々に明るくなって来ている。

後手に回る訳にはいかない、という秋留の言葉で俺達は急ぎ足で山を降りていた。アラム城からは真つ赤に燃えるホープキング山が見えていたはずだ。それを見たガルが何を企むのか分からない。しかし。

麓の町まで戻るまでに時間がかかり過ぎる。俺たちが乗ってきた馬車はロフティ達が乗っていっただろうし。

俺達は各々に考えながら駆け足で山を降りると反対側から馬車がやってくるのが見えた。俺は両手を広げて馬車を止めると、御者に向かつて言った。

「急いでいるんだ！ 馬車でアラム城下町まで行ってくれないか？」

目の前の目深に帽子を被った御者が荷台に向かつて叫んだ。

「だんなあ、怪しい三人組が城下町まで運んでくれてよお！」

暫くの沈黙。どうやら馬車の主は荷台で寝ていたようだ。やがて、モゾモゾと人が動く音が聞こえた。

「う、うゝん？ なんだ？」

荷台から響く低い声。どこかで聞いた事のある生理的に受けつけない気持ち悪い声。その声の主が荷台から飛び降りた時に、大地が揺れたような感覚がした。

「タコールかよ……」

俺は露骨に嫌な顔をしながら、目の前の赤い奴に向かつて言った。
「て、てめえはブレイブ！」

タコールは右手に斧を構え、左手で俺を指差しながら叫んだ。口からは唾の飛沫が飛んでくる。

「何？ ブレイブ、知り合い？」

少し遅れて走ってきた秋留が言った。すぐ横で話掛けられて、少しドキッとしてしまう。

「ま、まあな……」

俺は曖昧に返事をして目の前のタコールを見た。タコールは秋留の事を見つめたまま赤い顔を更に赤くして硬直している。

はあゝん、さては、こいつ。

「こいつ知り合いなんだけども、秋留からも馬車を貸してくれるようにお願いしてくれよ？」

タコールは中々良い馬車を借りていたようで、アラーム城は既に目の前に見えている。

秋留からの申し入れにタコールはあっさりと馬車を貸してくれた。城に向かう途中に御者から聞いた話によると、タコールは傷ついた仲間の治療費を払うために、金鉱を探そうとしていたらしい。何でも、右足に受けた傷が特に酷いらしく腕の良い魔法医を雇うのに金がいるらしい……。

仕事が一通り片づいたらパッシの所に行って、金を少し置いてこよう。

それにしてもザムの姿が無かったが……。あまり考えられないが別行動で金の工面でもしているのだろうか。

「ここで降ろしてください」

広い城下町の大通りを走り終わって、城の棧橋の前で御者に向かって秋留が言った。俺達は装備を整えると荷台から降りた。装備を整えると言っても、秋留もカリューも俺も、ゴールドドラゴンとの戦いで大分消耗しているため心細い。しかし店で買い物している時間など無い。

城に来る途中の荷馬車の中で、秋留に簡単な回復はしてもらった。全快とまではいかなかったが、贅沢も言ってられない。秋留は回復魔法は得意ではないという事だった。

ちなみに息切れしていた秋留は木の実のようなアイテムで魔力を回復していたようだ。今ではすっかり元気を取り戻している。

「門番がいないな……無用心な」

カリューが呟いたのが聞こえた。確かに城の前まで来たというのに城門も開けっ放しで門番も一人いない。

俺は辺りの気配に耳を傾けると、目の前にそびえる巨大な城の上の方で戦いの気配を感じた。

「城の上の方で何かが始まっているみたいだぞ！」

「謁見の間かな？ 急いだ方が良さそうだね！」

そう言つと、秋留は呪文を唱え始めた。空を飛ぶような呪文だろうか。

「岩山の巨人ジャイアントロックよ！」

そう、秋留が唱えたのはゴールドドラゴンとの戦いで何度か聞いた事のある呪文。俺はとっさにネカーとネマーを両手に構えて、これから起こるであろう惨事に備えた。隣のカリューは何が起こるのか分かってないらしくて、その場でボケっつと突っ立っている。

「ジャイアント・アーム！」

秋留の叫び声と共に、石畳が盛り上がってきた。

軽い衝撃と共に勢い良く変わる回りの景色。俺は今、鳥になっている。そして、見る見る内に近づいてくる城の窓。

俺はネカーとネマーを構え、目の前の窓ガラスに向かって硬貨を放った。

窓枠ごとガラスが碎けて俺の身体はその隙間から城内へと転げ込む。しかし、視界の端ではカリューが壁に叩きつけられたのが確認出来た。運の悪い奴だ。

「ごめ〜ん！ カリュー！ ブレイブ！ 私は階段上っていくから、それまで何とかしといて！」

俺がぶち割った窓の外から秋留の叫び声が聞こえた。それと同時に窓の横の壁に張りついて、必死にもがこうとするカリューのうめき声。どうやら、咄嗟に壁に剣を突き立てて、転落するのを防いだらしい。

俺は秋留の声とカリューの悪戦苦闘するうめき声を背中に受けながら、辺りを観察した。

至る所に負傷した騎士達が転がっている。中には既に事切れている者もいるようだ。

戦いの音を頼りに城の中を進んでいく。

走りながら負傷した騎士達を観察してみると、ほとんどの奴が一発で戦闘不能にさせられているのが分かった。これがガルの力なのだろうか？ それとも……。

赤い絨毯が敷かれた廊下の角を曲がると左手奥には大きく開け放たれた扉があった。どうやらあの部屋が戦闘が行われている謁見の間らしい。

「お、お前は……」

謁見の間への入り口近くで倒れていた身体の小さな騎士が俺の顔を見上げた。ボロボロの身体を必死に起こそうとしている。手足が変な方向を向いているのに無理をする奴だ。

どこかで見たことがある奴だが、どこだったろう。

俺は「任せろ」と眼で合図すると入り口の脇にインスペクターを降ろして謁見の間に走りこんだ。この中での戦いではインスペクターを守る自信が無かったからだ。何が起きようともガルの悪事は記録に残す必要がある。

謁見の間に突入して目線を上げると、王と思われる男を守るように構えるロフティとアフィンが見えた。その身体は傷だらけとなっている。一方、俺の雇い主であるマクルスは王の隣で倒れていた。死んでないでくれ！ まだ前金しか貰っていないんだから。

ロフティとアフィンに対峙するのは俺も見覚えのある男、ザム……。そのザムは俺の方も確認せずに言った。

「遅かったですね、ブレイブさん。ドラゴンは強かったですか？」
なぜザムがドラゴンの事を知っているのだろうか。黒幕はガルの
はず。そのガルは……。俺は何者かの気配を後ろに感じ、慌てて前
転して左手のネカーを後ろに構えた。

身長はマクルスと同じ位だろうか。両手には立派な剣を装備して
いる。ガリアスの持っていたキング・オブ・ジェミニとは違うよう
だ。ガルの持つ剣には禍々しい感じを受ける。

「お主、ブレイブと申すのか。マクルスが雇った最後の冒険者、と
いう訳だな？」

軍事参謀長ガル……。真っ黒の髪は突風を浴びたように真上に伸
び、顔全体が同じく黒い鬚に覆われている。髪と鬚の間から不気味
に見える目が異様に恐怖を感じさせた。

俺の背中に一筋の汗が流れた。身体が全くと云って良いほどに動
かない。蛇に睨まれた蛙とは正にこの事だろう。

「やれやれ。どいつもこいつも触れなければ良い事に触れるからこ
うなるのだ」

ガルの拳が俺のみぞおちを叩いた。息が止まるが全く動くことが
出来ない。バルバロスから発せられた怒気とは違う異質のものに身
体を縛られている感じ……。

「こうなってしまうえば最早、証人を全員消して、ワシが次期アラ
ム国王となるしかないなあ。のお？ ラデイズよ……」

問われたラデイズは情けない声を出して玉座に縮こまっている。

その時、俺の後ろから邪悪な気配が感じられた。

「ソウル・ハーデン！」

後方から響いたアフィンの声と同時に、俺の脇を白い影が通り抜
けた。ゆ、幽霊か？

その白い影がガルに纏わりついた。その瞬間に身体が自由になっ
た俺はガルと間合いを取るために後方に飛ぶ。

しかし、再び真後ろに感じられる別の殺気！ 次はザムか！

「キンツ」という金属音に反応して後ろを振り向くと、そこでは

ロフティとザムが剣を交えていた。ロフティは険しい顔でザムを睨んでいるが、そのザムは俺の方を向いたままだ。

「ロフティさん、貴方、しつこいですね」

尚も俺の方を向いたまま涼しい顔でザムは言った。

「お前の相手は俺だ！ 貴様だけは許せん！」

傷だらけのロフティは一度剣を引くと、ザムに向かって突きを繰り出す。その攻撃を最小限の動きでかわして、右手に持つ紫色の刀の柄をロフティの背中に打ちつけた。ロフティは俺の隣までそのまま前のめりに転がった。

「大丈夫か？」

俺は目の前にいるザムと、後方で構えているガルに注意を払いながら言った。ロフティは肩で息をしながら立ち上がった。ザムの顔を凝視しながら無言で頷く。

「しつこいと言えば……」

ザムが俺の顔を睨みつけた。

「ブレイブさんも結構しつこいですよね」

俺は息を整えて隙を伺う。ザムは特に構えも取っていないが隙が見当たらない。

「ガルさんから邪魔者を消して欲しいと言われて、まずはブレイブさんにパッシさんを差し向けたんですが……」

やはりカリューと一緒にの時に襲ってきたパッシはザムに操られていたのか！

俺は怒りに身を任せてネカーとネマーのトリガを引いたが、ザムに両銃を蹴られ、硬貨はあらぬ方向へと飛んでいつて石壁を叩いた。「何も知らずに死んでいく親友ブレイブさんの為に色々教えてあげているんですけど……」

足を振り上げた状態のままザムが不敵に笑う。

どこか足が変な角度で振り上げられているのは気のせいだろうか。俺は両銃を構えなおしてザムに問う。

「ガルに雇われたのか？」

ふふ、とザムが笑った。

「私の悪評は一部では有名みたいですから……ね？　ロフティさん」
「うおおおお！」

ロフティが怒りに任せてザムに飛び掛る。

それを闘牛士の如くヒラリと交わすとロフティの背中を紫の刀で切り裂いた。

「ちっ！」

俺はザムの攻撃の終わりを狙って再び両銃のトリガを引いた。

「おっと」

ザムがおどけた掛け声と共に硬貨を避ける。有り得ない方向に腰やら首を曲げて……！

「また邪魔者が増えそうだな」

俺がザムの奇怪な姿に啞然としている時間を破るようにガルが言った。その言葉の通り謁見の間に飛び込んだのは、鼻から血を流しているカリューだ。

「ザムよ、早くこいつらを始末してくれんか？　でないと、いつまで経っても王の首を取る事が出来んよ」

立派な椅子で小さく震えている王に向かってガルが歩きながら言った。その動きに合わせて床を蹴ったカリューが、ガルの正面に回り込む。

「邪魔だ、小僧」

ガルの低い声により、カリューの身体が硬直するのが見て取れた。硬直したカリューの脇を何事も無かったかのようにガルは通り抜ける。

眼だ。

ガルのあの恐怖を植えつける眼が身体を動かなくさせているんだ。恐怖で足がすくむとかそういう現象に近いのかもしれない。ゴールドドラゴンが恐れていたのはあの眼だったのか。

城の廊下で多数の騎士達が無抵抗に戦闘不能にさせられていた理由が分かった気がする。あの眼で睨まれたら普通の奴なら動けなく

なってしまうのだろう。

この絶望的な状況を破るようにガル目掛けて飛び込んだのは一匹の犬だった。アフィンのお供のダニーか！

「先程、ザムが粉々に砕いた筈だが……。ゾンビという物はしつこいのぉ」

そう言うときガルは目の前に迫っていたダニーに向かって両手の剣を振り回した。

「アンチ・ソウル！」

王の前で依然と構えていたアフィンが叫ぶ。その声と共にダニーの身体が灰と化する。

「何？」

ガルは驚きの声を上げた。斬る事の出来ない灰目掛けて剣が通り抜ける。そして再びアフィンが叫んだ。

「リンク・ソウル！」

ガルの目の前でダニーが再び実体化した。この間合いでは防ぎ用が無い！

しかし、いつの間に来たのかザムが紫色の刀でダニーの身体を真横に切り裂いた。再びダニーの身体は灰と化する。

「さすがに四対二はキツくないですか？」

ガルの隣に立ちながらザムが言った。

「せっかくお前を雇ってやったんだから、早く何とかしてくれ」

「そうですね……。では、ちょっと本気を出して、人数を減らさせてもらいましょうか」

ザムは言うと同時に右手に持った刀を床に突き立てた。

「！」

身体が動かない！ 先程ガルに睨まれた時の様な、恐怖で身体が動かせないというレベルではない。何か内側から身体をロックされたような不快感……。

「紫雲縛^{へばとづい}」

ザムが両手をボキボキ言わせながら呟く。必死に身体を動かそう

としても、指一本動かす事が出来ない。

「この技は己の力を回り一面の地面に這わせる事によって、相手の骨を制御する技……」

と言いながらアフィンの前までやって来て、腹をえぐるように殴った。アフィンから小さく声が漏れる。顎の骨も制御されているらしく声を出す事もほとんど出来ない。

「さすがに少し疲れましたが……。これで邪魔者には消えてもらいましょうか」

立て続けにアフィンの腹や顔面を殴りつけるザム。最早アフィンの意識は無くなっているが、それでもお構いなしだ。

「貴方はネクロマンサーという職業のせいか、やたらと恐怖には強いようなので苦戦しましたよ」

アフィンの隣まで悠然と歩くガルは、ザムの技にかかっていないようだ。

「そいつはその辺で良いだろう。最早虫の息だ」

ザムは次にロフティへ近づいた。

「この紫雲縛はその威力の大きさのせいか、あまり長い時間は持たないもので……」

ザムは肘でロフティのみぞおちを打った。と同時にそのまま顔面に裏拳を叩き込む。

「では、ワシはその厄介そうな剣士を狙おうか」

ガルは両手に剣を構えながらカリューの方へと向かった。俺は厄介な相手ではないと思われているのが、嬉しいような悲しいような「それが良いでしょう……」

ザムは不気味に笑いながら俺の方を見た。その間もロフティへの攻撃は止まない。既にロフティの意識も途絶えているようだ。

カリューの目の前にやって来たガルは両手の剣を頭上に掲げて、勢い良く振り下ろした。

「アースクラック！」

その時、秋留の声が響いた。と同時に広めの謁見の間の地面に縦

に亀裂が走る。

「ぬう！　しまっ……」

ザムが叫び終わる前に、謁見の間を縦に裂いた亀裂が小さな爆発を起こした。床に突き立てていた刀は、小さな爆発で謁見の隅にあった柱に突き刺さる。

俺は身体が軽くなつたのを確認すると、素早くネカーとネマーのトリガを引いて体勢を崩したザムを狙った。腕の一本や二本は吹き飛ばす覚悟で。

しかしその攻撃を前転でかわし、勢いでザムが俺の目の前に近づく。だが俺の手の動きを馬鹿にしてはいけない。俺は素早く目の前のザム目掛けて引き金を引いた。

「ぬお！」

驚きの声と共にザムが左方に飛んだ。ザムの左肩と左足を硬貨が傷つけた。やべ、危うく殺すところだった。

「こ、殺す気ですか？　ブレイブさん……」

傷ついた左肩を押さえながらザムが立ち上がった。

一方、同じく身体が自由になったカリューは、ガルの攻撃を寸前のところでかわして今はガルと一対一で対峙している。

「何とか間に合ったみたいだね」

謁見の間の入り口に姿を現した秋留。随分久しぶりに見たような気がする。

「間に合っ てないぞ！」

ガルとの剣戟の合間に叫ぶカリュー。確かにロフティとアフィンとマクルスは床に倒れて痙攣している。玉座の近くで座ったままの王様も、恐怖のあまりか白眼を剥いて泡を吹いていた。

カリューに指摘されて辺りを見回した秋留は、恥ずかしそうに一番重症そうなアフィンの元へと駆け寄った。

「何者か知りませんが、邪魔はしないで下さいよ」

俺の目の前にいたザムが踵を返して秋留の方へと突進しようとする。

秋留の危険を察した俺は、両手に持ったネカーとネマーを逆手に持ち、ザムの後頭部を強打した。

その場に突っ伏すザム。頭を抱えてのたうち回っている。

「あ、ありがとう、ブレイブ」

秋留は俺の行動に感動したのか、嬉しそうな足取りでアフィンの元へと向かった。苦笑いをしているように見えたのは気のせいだろう。

その時、空気を裂く音が聞こえた俺は急いでその場を飛び退った。だが攻撃を避け切れずに左手に衝撃を受け、握っていたネカーが落ちた。乾いた音を立てて床を転がり遠くの柱にぶつかって止まる。

「やはり、勝負をつけなくてはいけないようですね、ブレイブさん

……」

今の攻撃はザムが起き上がりざまに放った回し蹴りだったようだ。後頭部を押さえながら目の前に立ち上がるザム。その顔は憎悪に歪んでいる。

「平気で仲間のアイテムを盗み、隙があれば敵が後ろを見せていても攻撃を仕掛ける……。私はそういうブレイブさんの性格……。嫌いではなかったんですけどねえ」

両手をダランツと下げながらザムが言う。ザムに喰らった左手が痺れていて動かない。俺は右手のネマーを構え直した。

「やられてみて、初めて気づきましたよ……。こんなに嫌なものだったとは……」

「ぐうっ」

何のモーションもなく繰り出された正拳突きを俺は右肩に喰らった。右手が痺れ危うく残った銃も落としそうになる。

格闘術などほとんど出来ない俺は、両手の回復を待ためザムとの距離を開けようとした。しかしそれを予測してか、一瞬で距離を詰めてくるザム。

またしても何のモーションもなく繰り出される左の拳。

その攻撃を右頭部に受け、俺の身体が一メートル程宙を浮いた。

目から火花が出る痛みに俺はその場に片膝をついた。頭がグラグラして立つ事すら出来そうにない。

「さっきのお返しですよ」

位置が低くなった頭目掛けてザムの足が飛んでくる。変な角度で！俺は素早く右足首に装備していた短剣を右手に持ち、その攻撃を迎撃する。

しかし、人間の構造上有り得ない角度で再び足の角度が変わり、俺の後頭部へと力カト落としを食らわしてきた。

目の前が一瞬暗くなる。俺は必死に意識を繋ぎ止め、ザム目掛けて突進した。倒れ掛かったと言ってもいいかもしれない。

もつれて倒れるザム。しかし、またしても予想も出来ない軌道でザムの右足が俺の顔面を捉えた。

再び低い体勢で少し距離が開いた。一瞬で右手にネマーを構えなおし、ザム目掛けてトリガを引く。その攻撃はザムを外れて後方へ……。

「どこを狙って……」

ネマーから発射された硬貨は後方の柱に命中し、辺りに破片を撒き散らした。ザムが眼を細めた一瞬を狙って、俺は素早く右手で先程の短剣を投げつけた。

「ぬうつ」

ザムの左太腿に短剣が突き刺さる。しかし、右手も少し痺れていたせいか、あまり深くは突き刺さらなかったようだ。

「お前……、骨を操る事が出来るんだろう？」

俺はザムに向かって言った。ザムは何も答えない。

「モーションのない攻撃。有り得ない角度からの蹴り……」
そう、つまり……。

「自分の骨すら操って、攻撃してきている訳だ」

生物の関節、構造に囚われない攻撃。

盗賊という職業には観察力、洞察力などが必要となってくる。罠が仕掛けられた宝箱やトラップのある通路などを観察し起こり得る

事態を予測する力が必要なのだ。

それは無機質な物に対する話だけではない。

動く対象、魔族やモンスター、敵となる相手が次に何をしてくるのかを瞬間の動きで判断する。

戦士や武道家の様に、攻撃が繰り出されてから避けるだけの素早さは体捌きの能力はほとんど無い。あくまでも予測して避けるのだ。「さすが盗賊の観察力……といったところですかね」

ザムは自分の太腿に突き刺さった短剣を引き抜くと、秋留に向かって投げつけた。なんて事を！

俺は右手に持ったネマーのトリガを引いた。発射された硬貨の方が投げつけた短剣より速いはずだ。

秋留の二メートル程手前で短剣と硬貨とがぶつかり合い、短剣の軌道を変えた。

短剣が勢い良く刺さったのは玉座。王が再び気絶したようだが、秋留が無事なら気にしない。

「そして、その射撃の腕。さすがですよね」と言ったと同時に指をパチンツとならした。

閃光を發し謁見の間の端に置いてあった木箱が破裂する。中からは真っ赤な棒らしきものが何本が出てきて、フヨフヨとザムの元へと集まった。

「話は変わりますが、タカールさんを知りませんか？」

突然の事に「知らん」とだけ言い放つと、警戒のため、右手のネマーをしっかりと握りなおした。痺れていた左手も今では何とか回復している。

「こういう大舞台の時にはタカールさんを使う予定だったのです」が……」

そう言つと、ザムは真横で浮いている赤い棒を優しく撫でつける。赤い棒……。いや、色は赤いが、あれは骨……。パーツの大きさから言つと、人間の……。

「仕方なく同時に精製していたパツシさんので我慢しましたよ」

「お、お前……」

あいつがタコール、パツシと行動を共にしていた理由が分かった。あいつにとつて奴ら二人は仲間でも何でも無かったんだ。ただのアイテム……装備品……。

震える声でザムを睨みつける。

ザム目掛けてネマーをぶっ放す。最早手足を狙うような甘い考えはない。こいつは、人間として生かしておいてはいけない奴だ。

しかしザムの目の前に展開された赤い骨が、俺が放った硬貨をここごとく弾き飛ばした。

「ふむ、予備として精製していましたが、強度は十分そうですね」
何かに引きつけられる様に赤い骨がザムの身体に纏わりつく。骨はザムを守る真っ赤な鎧となった。

頭蓋骨は何枚にも分かれ、ザムの頭部を怪しく守っている。腕の骨は腕に、足の骨は足を守る鎧となっっているようだ。

「パツシさんの骨格が小さい分、重くもないし、動きやすいですね。これならブレイブさんとも十分互角に戦えそうですね」

俺とザムは同時に地を蹴った。ザムは俺の方へ、俺はザムから遠ざかる様に後方へと飛ぶ。

ネマーを構えようとしたが、ザムは攻撃されるのを警戒してか、左右に動きながら近づいてくる。ザムの次の動きを予想しようとしても、その予測出来ない関節の動きに惑わされて、攻撃出来ない。

「追いつきましたよ」

ザムの右拳が眼前へと迫る。その拳は赤い骨で強化されている。

俺は咄嗟に左手で攻撃を防いだ。俺の左腕から鈍い音がして激痛が走る。

「いい音が聞こえましたよ、ブレイブさん！」

左腕が動かなくなった。同時に左手に握っていたアイテムを地面に落とす。俺は瞬時に眼を瞑った。

俺の臉を通して感じる真っ白い閃光。俺が左手に持っていたアイテム『発光珠』の力だ。少しの衝撃でも碎け、辺り一面を光の海

と化す。

普通に地面に投げつけたなら、ザムも警戒して防御態勢を取っていたかもしれない。しかしザムの攻撃により落としたアイテム、となれば話は別だろう。

「ぐあああああ！」

ザムの叫び声が聞こえる。俺はゆっくりと瞼を開いた。目の前には、両目を抑えその場に立ち尽くしているザムがいる。

更に向こう側には同じく眼を押さえて立ち止まるガルとカリュー。俺の予想が正しいなら、ガルに対して恐怖を感じるのはその眼のせいだろう。これでカリューは互角以上に戦えるはず。

一方の秋留には俺の考えが分かったのか、真っ白のマントで顔を隠している。気絶している面々の事は気にする必要もない。

俺の構えるネマーの銃口の目の前にザムの顔がある。俺は憎悪に負けそうになる気持ちを必死に押さえながら、ザムの纏う鎧の隙間を狙ってネマーを連射した。

「があああああ！」

ネマーの放った硬貨は、ザムの左足首を吹き飛ばし、膝の皿を碎き、肘の関節を破壊した。勿論、五肢全てを吹き飛ばす事も出来たが、俺は照準をずらした。その場に倒れこむザム。

俺は念のため、止めの肘打ちをザムの腹へと打ち込んだ。ザムの小さなうめき声が聞こえた。顔も二・三発殴ってやりたかったが、遠くから睨んでいる秋留の視線を感じて止めた。

視線を上げると、カリューもガルに止めを刺そうとしているところだった。ガルの二刀流を風の様にかわし、後ろに回りこんだ。そして剣の柄の部分でガルの後頭部を強打する。最早、ほとんど眼の见えないガルは成す術も無く、その場に倒れ込んだ。

暫しの沈黙。

「終わったな」

「終わったな、じゃねえ！」

俺の台詞に対して、すかさずツツコミを入れるカリュー。

「お前のせいで、眼が見えなくなっただじゃないか！」

眼を擦りながら怒鳴るカリュー。こいつ、視力が全然ない状態でガルの攻撃を避け止めを刺したのか。やはり敵にはしたくない相手だ。

「とりあえず、誰か回復魔法の使える人を探してきて！ アフィンもロフティもマクルスも私の回復呪文じゃ追いつかない程の傷を負っているの！」

秋留の衝撃発言に俺とカリューは傷ついた身体を引きずりながら謁見の間を飛び出した。

血で汚れ大きく床の裂けた謁見室を離れ、今はアラム国王ラデイズの寝室に招かれていた。俺が日頃泊まっている宿屋とは比べ物にならない程豪華で広々とした部屋だ。

部屋の中央にはドカンと置かれた天蓋つきのベッドがある。

ラデイズ王はそのベッドに横になり俺達の方を眺めている。なぜか俺に向ける視線だけ陰しい気がするのは気のせいだろう。

ベッドの隣には立派な法衣に身を包んだ司祭らしき人物と、部屋の隅には衛兵らしき男もいる。さすが一国の王ともなると警備も厳重だ。

ちなみに、アフィン、ロフティ、マクルスは、城にある治療室に運ばれて今は手厚い看護を受けている。城の至る所で倒れていた騎士達も同じ部屋で治療を受けているはずだ。

「助かったぞ、秋留。そして、カリューにブレイブ。二人にも感謝せんとな……」

弱々しい声で言うラデイズ。

「いえ、ラデイズ王が無事で何よりです」

お決まりの台詞で秋留が言う。

秋留に言われた事が嬉しかったらしく、ラデイズの顔が少しほころんだ。こいつ、秋留を狙っているんじゃないだろうか。少しでも

危険な動きをしようものなら、頭を吹き飛ばしてやる。

暫くニヤニヤしていたラディズだったが、何かを思い出したらしく、突然震え出した。

「以前城に仕えていたマクルスが謁見の間に飛び込んできた時には、何事かと思ったが……」

悲しい顔になったラディズが続ける。

「黒幕だと思われるガルを呼び出してみれば、この有様だ。情けない事に途中で気まで失ってしまった」

横目で秋留が睨んでいるのを俺は気づいたが、気にせず俺はラディズに話し掛けた。

「ガルとザムはどうなりました？」

「ふむ。ガルは地下の魔力牢に閉じ込めてある」

魔力牢。ある程度大きな町や城には大抵あるものなのだが、読んで字の如く。魔法の力で人や魔族を捕らえるために作られた牢屋だ。ガルが相手に恐怖を与える眼以外に、何かあるのか分からないための処置だろう。

「ザムという冒険者についても、一応魔力牢に閉じ込めてある。傷が酷い様だったので、治療をした後にな」

これでザムの悪事が認められ、ロフティの両親も浮かばれる事だろう。

これで全てが終わったのか。後はマクルスから金を受け取るだけで終わりだ。マクルスには早く回復してもらわなくては。

俺はこの場にいる他の二人の冒険者を横目で確認した。

短かったが秋留と一緒にパーティーは楽しかった。カリューも悪くはない。何より強いから俺が楽出来る。

今まで特定のパーティーを組もうとは考えた事は無かった。何度か見知らぬ冒険者と依頼のために一時的にパーティーを組み、今後一緒にパーティーを組まないか、と誘われた事もある。

しかし、俺はその度に断ってきた。

別れが恐くなるからだ。モンスターや魔族を相手に戦う冒険者に

は常に危険が伴う。時にはパーティーのメンバーが殺されてしまう事もある。実際に一時的に組んだ仲間を失った事もあった。

それでも秋留となら一緒にパーティーを組んでも良いと思った。いや、一緒にパーティーを組みたい。秋留が危険な時には俺が盾になれば良い。

そう言えばあのドラゴンとの戦闘でも秋留を助けたな。ザムの攻撃からも……。

思えば同じパーティーの仲間を助けた事はあまり無かった。こんな事は初めてだ。

俺が一人、秋留をぼくと眺めながら考え事していると寝室の扉がノックされた。

入って来たのは謁見の間の横で手足を変な方向に曲げて倒れていた騎士だった。まだ生きていたのか。

「失礼します、陛下……。この度は私どもの不手際であります。申し訳ございません。そして、父の事も……」

小さな騎士は頭を下げながら言った。

「気にする事はないぞ、ガリアス」

ガリアス！ あいつは騎士団長のガリアスだったのか。どこかで見たことがある顔だとは思ったんだが……。

ラディズはガリアスの心中を察したかのように、優しい声で答えた。

「ガルも、そのうち反省してくれる事と思うぞ」

続けてラディズは言った。

しかしガリアスは分かっているはずだ。王に逆らった者がどんな処罰を受けるのかを。

「そうだ、丁度良いところに来た。この者達を客室に案内して貰えんか？」

「はい、陛下……」

ガリアスはそう言うと、俺達三人を連れて王のいる寝室を後にした。

「ありがとうございます」

ガリアスが突然言ったのは、暫く無言で城の長い廊下を歩いた後だった。

ガリアスは俺達の方に振り返り、片膝を床についてる。ホビットの小さい身体が余計に小さく見える。

「そ、そんな、気にしないで下さい。私は王に頼まれた仕事をしただけですから」

秋留は慌てて言った。

「私も何度か父には忠告したんです。父が何か良くない事をしているのは知っていました」

ガリアスは答える。俺がアラム騎士団の砦に忍び込んだ時にも、ガリアスは同じ様な事を言っていた。

「父上は立派な剣の使い手だったぞ」

カリューの言葉にガリアスは無言で頷くと、俺達に顔を見られないうちにしながら再び廊下を曲がって階段を上り始めた。

どこまでも続く長い廊下。その所々にある扉の前には、それぞれ衛兵やら冒険者らしき者が立っている。扉の中には他国の重要人物等が泊まっているのだろうか。

「ここから三部屋分が、貴殿達の部屋になります。城内が落ち着き疲れが癒えるまではここでのんびりして下さい」

そう言うところガリアスは深々と礼をして、廊下を戻って行った。

残された俺達三人は、それぞれの顔を見合わせた。と言っても、俺は秋留の顔しか見ていないが。

昨日から徹夜という事もあり、秋留の顔には疲れが見える。それは俺にも言えるようで、秋留が俺の顔を見て苦笑いをした。

「とりあえずいつ何が起きるか分からない。ラディズ王の好意に甘えて、今は休ませてもらうか」

カリューの提案に俺と秋留は頷くと、それぞれ別の部屋に向かって歩き出した。

俺は真ん中の部屋に向かって歩き出す。秋留の隣の部屋が俺の部屋として用意されていることが少し嬉しかった。

木製の扉を開けると、俺が泊まっている宿屋の二倍はありそうな部屋が広がっていた。壁には綺麗な風景画が飾っており、心を落ち着かせてくれる。

窓際にある大きな目のベッドの上には、宿屋に置きっぱなしにしておいた俺の荷物が置いてあった。盗まれないように宿屋の部屋に色々小細工をしておいたのだが、取りに行った人は大丈夫だっただろうか。

俺はドラゴンに切り裂かれた上着を脱ぎ捨てると、荷物の中から新しい赤のYシャツを取り出した。このシャツには、敵の魔力を弱める力もある。ついでにズボンも取り替えてから一通り部屋中に罠を張り巡らして、俺は廊下へと出た。ネカーとネマーは分かり難い場所に致命傷を与えられるような罠と共に隠した。

「どうかなさいましたか？」

廊下で見張りをしていた兵士に呼び止められた。兜を目深に被っているせいか顔を確認する事が出来ない。

「風呂に入りたいんだが」

昨日からの戦闘続きのせいか、身体のアちこちが汚れている。綺麗な好きな俺は毎日風呂に入らないと気がすまない。野宿の時などは仕方なく我慢しているが。

俺は兵士に連れられて城の地下へとやって来た。目の前に大きな通路が見える。

「この先を左に行った方が男湯となっております」

兵士に礼を言くと、俺はつきあたりを左に曲がって目の前の扉を開けた。中から温かい湯気が出て来る。

少しでも早く身体を洗い流したい俺は即行で服を近くのカゴに放り込むと、風呂場へと入った。

「よお！ ブレイブじゃないか」

脱衣所で服を脱いでいた段階で風呂場に誰がいるのは分かっている

たのだが、またしてもカリューとは。

俺は逃げられない事を覚悟し、カリューの隣に腰を下ろして無言で髪を洗い始めた。

「なかなか大変だったよな」

確かに大変だった。まさか、この世に秋留の様な天使が舞い降りているとは。俺は秋留の事を考えながら髪の毛を洗い流し、身体を洗った。その間カリューの声は全く聞こえてはこなかった。

身体を洗い終え、熱めの湯船に浸かった。身体の芯から疲れが取れるようだ。

カリューは俺に話し掛ける事を諦めたのか、少し離れた所で風呂に浸かっている。

俺は十分程浸かった後そそくさと風呂場を出ると、城の中の自室に向かつて歩き出した。後ろからカリューの俺を呼ぶ声が聞こえたが、俺はそのまま歩き続けた。

俺は何度か道を間違えながらようやく自分の部屋に着くと、そのままベッドに倒れ込んだ。

久しぶりの休息に俺は一瞬で眠りについた。

再び眼が覚めたのは夕方だった。身体がまだ少しダルイが腹が減った。俺はネカーとネマーを装備して一通り準備を整えると、廊下へと出た。夕食に秋留を誘おうと思ったが、部屋の中からは気配を感じられない。どうやら秋留も外に出掛けているようだ。

風呂に案内してくれた時と同じ兵士に夕食を取ってくる事を伝え、俺は城を出て街を散策し始めた。

城前の大通りには夕食の材料を買い出しに来ている女性で賑わっている。露店も数多く出ていて、色々な所から美味そうな匂いが漂ってきた。

俺は大通りを少し進んだ所で売られていた魚肉バーガーを食べながら、高橋診療所目指して歩いていた。パッシは死んでしまったのだろう。どんなに腕の良い魔法医や医者が居ようとも、骨を抜かれ

た人間を治療する事など不可能なはずだ。

案の定、パッシの寝かされていたベッドには、何事も無かったかのように白い清潔なシートが被せてある。しかし俺の盗賊の鼻は嗅ぎ取っていた。この部屋全体に残る真新しい血の臭いを。

「パッシさんのお連れの方ですか？」

突然話し掛けてきたのは、この診療所の院長高橋だった。髪の毛を六対四位の割合で分け、度の厚い眼鏡をかけている。

「パッシさんはアラム共同墓地の方に埋葬させて頂きました。あまりに酷い状態だったもので……」

そう言いながら高橋は深く一礼をすると、部屋の奥へと消えていった。

全く面識のない相手ではない、と思った俺は高橋医師に教えられた墓地へと行く事にした。

辺りは若干暗くなって来ていた。夜の墓場というのは不気味なものだ。俺は墓場の管理局で松明を借りると、教えられたパッシの墓目指して歩き始めた。地面は若干湿っていて歩き心地はあまり良くない。

管理局を出た時から気づいていたのだが、遠くに小さな松明の明かりが見えている。教えられたパッシの墓はその明かりの近くのはずなのだが。

そして近づくことにその明かりの正体はつきりとした。

「ブレイブじゃないか……」

松明の明かりに照らされたタコールの顔は暗い。長年パーティを組んできた仲間の死をまだ受け止め切れていないのだろう。俺が今まで特定のパーティを組んだ事がないのは、こういう時に気持ちの整理がつかない事が理由だ。

俺は無言でパッシの墓を見つめた。盾程の大きさの石に、名前と日付が入れられている。

タコールにはどういふ風に接したら良いのかも分からなかった。

また、いつもみたいに錢袋をくすねてトンスラするか。

俺が錢袋を取ろうとした瞬間、突然タコールが話し掛けてきた。

「ザム……なんだろ？」

タコールの予想外の台詞に俺は啞然としてしまった。パーティの仲間にパーティの仲間を殺される。その気持ちは俺には分からないが、相当こたえているはずだ。

「なぜそれを？」

俺はタコールの顔を見ずに答えた。

「ザムは戦闘で時々モンスターや魔族の骨を操っていたんだ。パツシの身体からは骨が無くなっていた」

タコールの身体から信じられないような闘気を感じた。いつもは隙だらけで間抜けな奴なのに、今はタコールを警戒せずにはいられない。

「ありがとうな、ブレイブ。パツシの敵を討ってくれて……」

タコールは言ったが、俺は別にパツシの敵を討ったつもりはない。あくまで依頼の範囲内での話だ。しかし俺はそれを口には出さずに黙って墓を見続けた。

「でも、俺はこの手で殺してやりたかった。パツシを……、俺の弟を殺したザムを！」

そう言うと、タコールは右手に持っていたアックスで宙を薙ぎ払った。と同時に辺りの空気が揺れる。

まさか、タコールとパツシが兄弟だとは知らなかった。なんて不幸な奴なんだ。

俺は哀れみの眼でタコールの方に顔を上げた。タコールの眼からは大粒の涙が流れていた。

翌日、俺は荷物をまとめて、宿屋ゴージャスに舞い戻ってきた。やはり、このごんまりとした部屋が落ち着く。部屋に荷物を置くと、そのままマクルスの武器屋へ行くため宿屋を出た。

「いやあ、大変だったな」

どこかで聞いたような台詞をマクルスは突然吐いた。マクルスの小さな武器屋の中に、アフィンとロフティもいる。どうやら三人共無事なようだ。

今は武器屋の扉に休憩中の看板を掲げているため、店内には俺達しかない。

「早速だが、報酬を渡そう」

そう言うマクルスは机の下から銭袋を取り出して、俺とロフティに渡した。この重さが堪らない。

「娘は城下町の宿屋で休ませているが、明日には田舎に返す予定だ」マクルスは言った。そう言えば、マクルスの娘はどういう人物だったのだろう？ まさか、マクルスそっくりではないだろうか？

俺が恐怖の想像をしていると、ロフティも話し始めた。

「結局、俺たちは犯罪者という事にはならなかったんだよね？」

「ほっほう、そうだな。まあ、英雄には少し遠かったかもしれないがな」

俺たちは笑った。アフィンは杖を掲げた銅像のポーズをして笑いを更に誘う。

「思えばこのパーティーもそれなりに良かったな。」

「そもそも……」

咳払いをしてマクルスが喋り出した。

「治安維持協会の後押しがあったんだよ、あんたらにお願いした依頼には……」

「え？」

俺とロフティは同時に声を挙げた。アフィンは銅像のポーズをしたまま動かない。

「のお？ 治安維持協会のアフィン殿？」

「ええええええ！」

再び俺とロフティは同時に叫んだ。アフィンは銅像のポーズをしたままこちらを振り向いて笑っている。そういえばさっきマクルスから報奨金を受け取って無かったな。依頼を受けた時は俺たちに怪

しまれないようにワザと金を受け取っていたのか。

冒険者と違って治安維持協会は金で依頼されて動くような組織ではないのだ。

「マクルスさんが相談しに来たんだよ、治安維持協会に」

アフィンが言った。

そうか。それでインスペクターなんていう取り扱いの難しいものがあつたのか。

「それなら先にいってくれば良かったのに」

当然の如くロフティが言う。

「治安維持協会の方でもまだ確信は無かつたんだよ。それに僕が治安維持協会員なんて言ったら、ロフティもブレイブも何だか落ち着かなかつたでしょ？」

確かに治安維持協会員と一緒に考えたら色々と緊張してしまっそうだ。何しろ悪いことは出来ないからなあ。

「人間の生贄を捧げていたという証拠はばっちりだし、それにね……」

アフィンがロフティの方を振り向いた。

「ザムが骨を操るのも見たし、邪悪な言動も記録に残せたらから……」

ロフティがアフィンの台詞で何かを思い出したかのように険しい顔をする。

「ごめんね、ロフティ」

「！」

ロフティが驚いて反論する。

「何でアフィンが謝るんだよ！ アフィンは何も悪いことはしてないじゃないか！」

ロフティがアフィンの肩を黒い髪が大きく揺れる程に力強くがっしりと掴む。

「悪いのはザムだ！ 今回のインスペクターの記録で奴が裁かれるなら……」

ロフティが俺たちに背を向けた。肩が震えているのは泣いているからだろう。

「これでやっと……天国の親父達も浮かばれる……！」

俺たちは暖かい眼でロフティの背中を見つめ続けた。

両親か。

俺の両親は今も故郷の町で仲良く暮らしているだろうか。わがままな妹は周りの住人に迷惑をかけていないだろうか。

「さて！」

ロフティが俺たちの方へと再び振り向いた。若干眼が充血しているようだ。気付かないフリをするのが友情というものだろう。

「もう少しブレイブやアフィン、マクルスさんと世間話もしたいところだけど……」

そう言うときアフィンは壁の時計を見た。

「そろそろ出発しないと港町ブーゲンに出発する長距離馬車に乗れなくなる」

港町ブーゲンとはここから馬車で四日程の距離にあるゴールドウイッシュ大陸の中でも一、二を争う大きな港町だ。俺は別の港町からこの大陸に来たため、ブーゲンには行った事がない。

「この金を少しでも早く兄弟たちに持つていつてやりたいんだ」

「そっかあ、寂しくなるねえ」

アフィンが相変わらずの間の抜けた返事をする。

ロフティには五人の兄弟がいるはずだ。その兄弟のために危険な冒険者という職業についているのだろう。あいつが栄養失調で倒れたのは、田舎で暮らす兄弟のために自分の食費も削っているせいなのか。

「ちゃんと飯を食えよ」

「ああ……」

俺は武器屋を出ようとするロフティに向かって言った。

ロフティは軽く笑うと、無言で武器屋を出て行った。

「アフィンは治安維持協会に戻るのか？」

「そうだよ。この辺りで一番大きな支部のある港町ブーゲンに一刻も早く行って報告して来ないとお……」

俺の問いかけに答えていたアフィンの言葉が止まる。

「じゃ、僕も急いで行こうかなあ！ 今ならロフティと同じ馬車で行けそうだよ」

アフィンは、うんつと伸びをすると、武器屋の扉の前まで歩いた。あまり急いでる感じは相変わらずしない。

「また、どこかで会うかもしれないねえ。その時はよろしくねえ！」

最後まで気の抜けた喋り方でアフィンも武器屋を出て行った。治安維持協会に会うというのもあまり縁起の良い話でもない。犯罪者としては会いたくないものだ。

「待つてよおーロフティー僕も行くよおおお」

ドアの外でアフィンが叫んでいるのが聞こえる。

そして。

今や武器屋の中には俺とマクルスの二人しかない。

「ブレイブ、世話になったな。お前はこれからどうするんだ？」

「俺はもう少しこの大陸にいるよ、まだまだ稼げそうだしな」

俺は右手に握った銭袋の重さを確かめながら適当に答えた。今の俺の眼は硬貨の形になっているに違いない。

俺も武器屋の扉を開けると、宿屋に向かって歩き始めた。太陽が眩しく照りつけてくる。

今日は高そうな店でも見つけて美味しいものでも食おう、と心に誓った。

第五章 紅い旋風

マクルスから依頼料を貰ってから、三日が経過した。今日も俺はこの広いアラム城下町をブラブラとしている。昨日、魔族討伐組合に行つて適当な依頼を探したが、どれもこれも報奨金の額も内容もパツとしないものばかりだった。

まあ、たまにはこういうゆったりとした気分で町を歩くのも悪くは無い。

運が良ければ秋留に出会えるかもしれない。まだこの城下町にいるだろうか。こんな事なら城にいる時に連絡先の一つや二つ聞いておくんだつたと、思わなくもないが。

出会いたくない青い髪のあいつには何度か出くわした事があるが、その度に俺は高度な気配消しを使ってやり過ごしている。

「ぎゃあああああ」

男の悲鳴が聞こえてきたのは、俺が大通りで魚肉バーガーを注文している最中だった。両手にネカーとネマーを構えながら、俺は悲鳴の聞こえてきた方に走り始めた。

普段なら金にならない事には首をつっこまないと決めている俺だが、最近暇で退屈していた。その退屈しのぎには丁度良さそうだし、上手く行けば礼金などをもらえるかもしれない。

「また悲鳴が聞こえたぞ！」

青色の制服を着た複数の男達が慌しく走り回っている。あの制服は治安維持協会のものだ。

また……？

この城下町で何かが起ころうとしているのだろうか？

「！」

風を切り裂く乾いた音が聞こえ俺は素早く身を屈めた。隣を反対方面へと逃げていた一般市民の背中に鮮血が走る。

「うわぁ！」

俺と同じ方向へ向かっていた治安維持協会員達もあっけなく吹き飛んでいった。

「ちっ」

俺は舌打ちすると立ち止まり辺りの気配を伺った。

後ろか！

俺は咄嗟に前転する。俺の頭上を何かが通り抜けていったのが分かった。

「ほう！ 我的攻撃を二度も避けたか！」

俺はネカーとネマーを構え、声のしてきた頭上を見上げる。

空から優雅に舞い降りたのは、一匹の黄金の毛並みをした鳥の獣人だった。右手には黄金色のレイピアを握っている。

「お前、獣人か？ 獣人っていうのはそんなに野蛮なのか？」

俺は獣人というものにほとんど面識がない。

今まで冒険して来た大陸でもあまり見かけなかったからだ。

「獣人？ 我をそんな下等な生き物と一緒にするな。俺は知恵ある高貴なモンスター様だ！」

傲慢なモンスターは無視して俺は辺りを見渡した。普段着の男や買い物帰りの女性。騒ぎを聞きつけた冒険者や兵士の姿。その全員の身体が真っ赤に染まり、石畳の地面に転がっていた。

舌打ちを一つして、素早い動きでネカーとネマーのトリガを引いた。的確に頭と心臓を狙ったのだが、鳥人は左手に装備していた黄金の盾で頭への硬貨を防いだ。心臓を狙った硬貨は、鳥人が胸に装備していた金色のチェストアーマーに弾かれる。

しかしその衝撃は伝わったらしく、くぐもった叫び声と共に鳥人は体勢を崩した。

俺は再びネカーとネマーのトリガを引いたが、それより一瞬早く鳥人は空へと舞い上がる。丁度、太陽をバックにしているせいで、鳥人の姿を確認する事が出来なくなった。

風の音と共に俺の左腕に激痛が走った。危うく落としそうになったネカーを慌ててホルスターに戻す。

俺は鳥人の攻撃を防ぐべく、大通りから脇の細い通りへと身体を滑り込ませた。

そして大通りに向かってネマーを構える。俺を追ってこの細い通りに向かってきたところを、ネマーの乱射で倒すつもりだ。

予想通り大通りからこの細い通りへと突っ込んでくる鳥人。俺は鳥人目掛けてネマーのトリガを連続で引いた。この距離なら避けられないはず！

しかし俺の予想を裏切り、俺の放った硬貨は鳥人に届く事なく、あっさりと弾き飛ばされた。

再び俺の目の前で鳥人の持つレイピアが振られた。その攻撃をなんとかネマーの銃身で防ぐ。

そして俺の後ろ、細い通路の奥で鳥人が優雅に舞い降りる。俺の眼には鳥人の身体を守る様に風の流れがあるのが見えた。

「そ、その風のバリア……。ま、魔法を使えるのか？」

俺は素早くネマーもホルスターに戻し、その右手を左腕に受けた傷口へと持っていく。こういう事もあるのかと、俺は両手の手袋に回復薬を塗りつけてある。

この会話は言わば、傷が回復するまでの時間稼ぎ。モンスター如きにこの時間稼ぎがバレル訳がない。

「このバリアが見えるのか？ 風結界魔法ブロードが……」

下等な生物を見るような見下した眼をしながら鳥野郎が喋っている。

金色の喋るモンスター……。バルバロスのように何か特別な存在なのだろうか。

「魔法の詳しい説明などいつでも出来る！ 時間稼ぎはさせんぞ！」

ちっ！ 時間稼ぎだとバレたか。モンスターにしては、頭が回るようだ。

鳥人は再び呪文を唱え始めた。

「全てを吹き飛ばすシルフの咆哮！ ブリーズインパクト！」

呪文攻撃に気づいた時点で、この細い通りから大通りへと後退し

ようとしたが、間に合わなかった。

俺は全身に突風を浴びると、大通りの反対側の民家の壁に叩きつけられた。気を失いそうになる程の衝撃を受け、息が止まる。

鳥人は更に追い討ちをかけるため、通りから勢い良く飛び出して来た。俺は目の前に迫ってきた鳥人目掛けて、再度ネマーのトリガを引いた。

「無駄だあ！」

先程の繰り返しで、風の結界に弾かれた硬貨が鳥人の頭上に舞う。俺の予想通りに。

俺はネマーの照準を宙を待っている硬貨に合わせて、トリガを引いた。

「どこを狙っている！」

俺は両手をクロスにして、これから起こる衝撃に供えた。

同時に小さな爆発が城下町の路地の空気を振るわせた。

俺が一発目に放った硬貨は、硬貨の間に火薬を挟んだ特別製。風の結界に弾かれる衝撃では爆発しない事は予想していたため、俺は弾かれた硬貨に更に衝撃を与えるために二発目の硬貨を放った。

クロスしていた手を解除し、煙に包まれた辺りを見渡す。左前方の壁に鳥人が叩きつけられているのが確認出来た。

俺はネマーのトリガを連続で引いた。今度は普通の硬貨弾。冒険中でもないのに特別製の硬貨をそれ程持ち合わせていないからだ。

だが風の結界に守られていたせい、ダメージが浅かったようだ。鳥人は硬貨が当たる前に再び宙へと舞い、俺の放った硬貨は空しく民家の壁に突き刺さった。

「やるな、冒険者！」

身体から煙を立たせながら鳥人が言った。風の結界は張ったままのようだ。火薬を挟んだ硬貨はもう無いので、さっきのような奇策で奴にダメージを与える事は出来ない。

「明後日！ 再び決戦の時が来るだろう！ その時を楽しみにしているぞ！」

鳥人はそう捨て台詞を残すと、空に舞い上がり消えていった。

「明後日……」

俺は言い知れぬ不安感を抱きながら、鳥人の消えていった空を眺めて呟いた。

金色の鳥人。確かバルバロスの前に現れたオークも金色をしていた。何か関係があるのだろうか。

石畳の所々にヒビが残っているものもあったが、ここは、アラーム城謁見の間。

目の前の真新しい玉座には、相変わらず顔色の悪いラディズ国王が座っている。連続する領地内での事件発生により憔悴し切っているようだ。

俺の隣には、以前会った時とは違って冒険者らしい格好をした秋留と、その向こう側に何度か見かけたカリューがいる。

秋留は黒いマントに白のライトメール、魅惑的な黄色と黒のチェックのミニスカートを穿いていた。

一方、ドラゴンとの戦闘でダークスーツを修復中の俺は、赤いYシャツに黒のノースリーブコートだ。だいぶ暑いが装備のためにはしょうがない。

「お主らに再び集まってもらったのは他でもない。昨日、アラーム城下町に金色のモンスターが出現した事は知っているな？」

俺達三人は無言で頷いた。どうやら昨日の騒ぎは秋留もカリューも気づいたようだ。

「突然現れたモンスターによると、明日何かが起きるらしい事を言っていたそうだ」

オドオドしながら、ラディズ王は話を続ける。

「事の真相を確かめるために、城の兵士にホープキング山に偵察に行かせたんだが……」

ここでたっぷりと間を空けるラディズ王。もったいぶるような内

容ではないと思うのだが。

「山の麓にモンスターが集結しつつあるようなんだ……。奴ら、この大陸全体からモンスターを集めているらしい……」

宣戦布告だったか。しかしモンスターには知能というものがほとんどないはず……。そのモンスターを一箇所に集めている。恐らく金色のモンスターの仕業だろう。

ラディズ王は賢者の石という物をゴールドラゴンに献上していたという話だったが、その石の力でモンスターが知能を持ってしまったのだろうか。

「どうするおつもりですか？」

秋留はラディズ王に尋ねた。秋留に話し掛けられ、ラディズ王は少し落ち着いて話し始めた。

いつも思うのだが、ラディズ王を落ち着かせるために秋留は何かの魔法を使っているのだろうか？

「今まで軍事参謀長がやってきた事に対する罪の償いと思っている。しかし！ 民を見殺しにする訳にはいかん！ 平和は戦って勝ち取ってみせる！」

ラディズ王は突然立ち上がり、俺達の眼を一通り見つめた。秋留への視線だけ長かったような気がするが、気のせいだろう。

「我々の力で良ければ、是非、協力しましょう」

勝手に眼を輝かせたカリューが話を続ける。

単細胞カリューは『民を見殺しには出来ない』『平和を勝ち取る』などの熱血的な単語につられた結果だろう。協力するのは良いが、依頼料は頂きたいものだ。

「ラディズ王。今現在、モンスターの軍に対する対策は立てているのでしょうか？」

秋留が何事も無かったかのように話を続ける。秋留も依頼料などいらない、正義のためなら命も捨てられるという信念の持ち主なのだろうか。

「モンスターに負けぬよう、ゴールドウィッシュ大陸にある他国へ

も援護を要請している」

ラデイズ王は謁見の間の壁に取りつけられている、大きめの地図を指差して話始めた。

このゴールドウィツシュには、多くの金鉱山を保持しているこのアラーム国をはじめとした四つの国がある。

あまり仲は良くないと聞いたことがあるが、この王も我がままを言っていられる状態ではなくなったという事か。

「魔族討伐組合、治安維持協会へも援護の要請をしている。明日までには多くの冒険者が駆けつけてくれるはずだ」

国からの要請ともなれば、依頼料も半端な額ではないだろう。しかもこの国は金で栄えているアラーム。期待は大きくなる一方だろう。そんな中、俺達は無償で力を貸さなくてはならないのだろうか。しかし、秋留に嫌われるかもしれない事を言えない俺は、黙って話を聞いていた。

「ラデイズ王。それでは、私達も早速明日の戦闘に備えて装備を整えたいと思いますので、そろそろ失礼させて頂きます」

秋留がラデイズ王の方を見ながら言った。暫く続く沈黙……。ラデイズ王は秋留に操られているかのように暫く呆けていたと思ったら、突然話始めた。

「すまんすまん！ お主らも冒険者、依頼料が必要だったな」

「いえ、ラデイズ王、そのようなつもりで言ったのでは……」

咄嗟に言い返す秋留だったが、ラデイズ王は傍にいた近衛兵に何やら耳打ちをすると、三つの錢袋を持って来させた。

「ここに、支度金として五百万カリムを容易した。プラス、モンスター軍との戦闘終結後、更に千万カリムを手渡そう」

俺は高額な依頼料に気分が大分高揚してきた。暫くは豪遊が出来る。

「この命に代えましても、アラームの国は守ってご覧にいきます」
何も喋っていない俺は、適当にラデイズ王が喜びそうな事を言うておいた。

「うむ、頼むぞ。後、城の武器庫も見ていってくれ。何か必要な物があれば、このサラムに言ってくれば用意させよう」

紹介されたサラムという兵士は軽く会釈をすると、俺達三人を従え、謁見の間を出て階段を降り始めた。

勿論、既に錢袋は俺達の手に握られている。

暫くして、城の一階の扉の左右に兵士が見張りをしている場所をやってきた。

頑丈そうな鍵で閉められている分厚い扉を、サラムが懐から出した鍵で開けた。中には剣や杖、兜や鎧などが所狭しと並べられている。武器庫独特の金属の匂いが鼻に突く。

「何か必要なものがあれば言ってくれ」

サラムが扉の前に立って言った。

早速俺達は部屋の中に入って武器や防具を見て回る。

秋留もカリユーも冒険者の経験が長いのだろ。手に取る武器・防具はそれなりに威力のある物や、魔法がかかっている物が多いようだ。

俺は武器庫の奥の方に銃専用の棚があるのを見つけた。使い方の分からない銃や、俺の力じゃ持ちきれないような巨大な銃身をした銃もある。

その中でわりと軽めのライフルの分類に当たる銃を手についた。今回はモンスターの大量を相手にしなくてはいけない。少しでも数を減らすためにも、射程の長いライフルはありがたい。

「ブレイブ殿は銃が使えるのですか？」

隣に来ていたサラムが聞いてきた。

「大量を相手にするからな。出来れば射程の長い武器で数を減らしておきたい」

俺は軽くネカーとネマーでアクロバティックな動きを見せると、サラムに言った。勿論、同じ部屋にいる秋留を意識しての事だ。

「それでしたら、これはどうでしょう？」

そう言っサラムが棚の裏の方から取り出してきたのは、一丁の

真つ赤なライフルだ。おかしな事に、長い銃身の先には、穴の代わりに水色の綺麗な水晶がついている。

「これは魔法銃と言いまして、とある魔法使いの方に魔力を込めて頂いたライフルです」

サラムがその魔法銃を構えた。その姿が様になっていて少しムカついたが、腕は俺の方が断然高いはずだ。

ちなみにサラムは人生の折り返し地点を少し越えたような落ち着いた風貌をしていたが、武器を構える隙の無い姿はその力量を物語っているように見えた。

「この魔法銃は先端に水色の水晶がついているでしょう？ だから、水属性の魔力弾を発射します」

そう言つて水色の水晶のついた魔法銃を俺に手渡すと、サラムは棚の裏に行つて色の違う水晶のついたライフルを三丁持つて来た。

「黄色い水晶のついた雷属性、赤い水晶のついた火属性、茶色い水晶のついた地属性です」

「全部もらおう」

魔力弾を発射するライフルを気に入った俺は即決した。

「重くならないですか？ 一応、そのライフルは折りたためますけど……」

そう言つと、サラムは持つていたライフルを素早く折り畳んだ。サイズは半分程になった。

俺はそれらのライフルをコートの内側へと全て取りつける。

この黒のノースリーブのコートは一見するとただのコートだが、実は飛竜の羽を編み込んだ特別製で、装備したアイテムは十分の一度の重さにする事が出来る。飛竜の羽自体に浮力があるからだ。

ただし、重さが減るだけで大きさが変わる訳ではないから、動きにくくはなるのだが……。

俺はサラムから魔法銃に関する簡単な説明を聞くと、一人で武器庫の他の場所を見回つた。しかし、俺の眼を引くものは、他には無いようだ。

結局、秋留は何に使うのかよく分からないアイテム数点とカリューは大振りの剣一本と短剣三本を装備し、武器庫を後にした。

城下町にある沢山の飲食店の一つスパイス亭。俺達三人は城を出た後、少し遅めの昼食を取るためにこの店に入った。店内はランチタイムを少し過ぎたにも関わらず沢山の客で埋め尽くされている。

俺達は店のほぼ中央のテーブル席に案内された。外の景色を観察するのが好きな俺は、どうも落ち着かなかったが我慢する事にする。俺は注文したカレーランチセットBが来るまで店内を観察していた。目の前に座っている秋留は眩しすぎて直視出来ない。

「おい、これからどうするんだ？」

「はあ、どうしようかなあ……」

モンスターの大量が攻めて来るといふ情報は、早い段階でこの城下町の住民に伝わったらしく、この店内の至る所でも今後どうするかを話し合っている声が聞こえてくる。

席の真横にまとめた荷物を置いて食事をしている家族や、両手でも抱えきれない程の鈍器を見ながら食事をしている戦士風の男の姿も見える。

これから起こるであろう戦闘の準備は着々と進められているようだ。

「さて、どうしようっか？」

秋留が聞いた。その眼はどこか悪戯っぽく光っている。

「力あるのみだな。片っ端から片づけてやる」

カリューが隣でカレーを乗つけたスプーンを持ちながら、アホっぽい台詞を吐いている。俺は格好良くサラムから頂いたライフルを構えて言った。

「まずは遠距離攻撃で、ある程度数を減らすべきだろうな」

秋留は無言で頷いたが、顔は曇っている。

「何か不安な事でもあるのか？」

俺は思った事をそのまま秋留に聞いた。

「あいつら金色のモンスターの知能がどこまであるかによるね。モンスターを迎え撃とうとする魔法を使える者は皆、遠距離攻撃を狙っているはずだし……」

水を一飲みしてから、秋留は話を続ける。

「知能のあるモンスターが何も対策をして来ないとは思えないんだけど……」

「問題ないさ、最後は正義が勝つんだ！」

カリューの正義一直線な台詞のせいで俺達の会話は終わってしまった。それ以降、俺達は黙って料理を食べ続けた。

俺にはこの料理は少し辛いようだ。

額に汗を浮かべながら料理を食べ終わると、俺達はそれぞれの宿に戻った。明日の早朝、城下町城門前で待ち合わせる事を約束して……。

眠い目を擦りつつ、部屋の時計を確認した。四時……。七時間は寝れたようだ。

俺は手早く顔を洗うと、ブラシで簡単に髪の毛を整えた。特に、広い額を隠すのに苦労したが綺麗にまとまっている。

今日も秋留と会える！

俺はモンスターの大量と戦闘するよりも、その事を考えていた。

秋留の事は何としてでも守る！俺は心に誓いつつ、装備を整えた。昨日頂いてきたライフルは、コートの取りやすい場所に装備する。

ライフル以外にも俺のコートの内側のポケットには、数々のアイテムが括りつけてある。

それと城門脇には硬貨を詰めた木箱を置いてくれるように、サラムに伝えておいた。これで俺の金は使わなくて済むし、余ったら頂ける。

「おーい！ブレイブ！準備出来たか？」

同じ宿に泊まっているカリューが扉の外で騒いでいる。俺は最後にネカーとネマーを確認すると、部屋の扉を勢い良く開けた。その

扉は豪快な音と共にカリューの顔面を直撃する。

「くっか〜！」

カリューは鼻を押さえて涙目になっているようだったが、俺はそれを無視して宿屋の階段を下りた。

「ブレイブさん、行ってらっしゃい。気をつけて下さいな」

宿屋玄関前のカウンターで主人に話し掛けられた。

俺は戸締りをしっかりするように主人に伝えたと、外へと出た。

後ろからは文句を言いながらカリューがついてきている。

まだ陽が昇りきっていないにも関わらず、宿屋の前の大通りは数多くの冒険者で一杯になっていた。一方、店屋の多くは、扉や窓に板を打ちつけ、万が一に備えている。

俺達はそのまま城門目指して歩き始めた。通りの至る所には兵士が見張りについている。モンスターに攻め込まれた時には、彼らが活躍してくれる筈だ。

歩きながら俺は周りを見渡した。状況を把握しておく必要があるからだ。

城下町にある高台の何ヶ所かには、射手が構えているようだ。教会の鐘の横や時計台の屋根にも射手の姿が見える。兵士姿、冒険者風などの射手が交ざりあっている。中にはエルフ族もいるようだ。

目の前に巨大な石造りの城門が見えてきた。城門の左右には巨大な見張り台があり、そこには二機の巨大な投石機が設置されている。「すげえなあ」

隣でカリューが巨大な投石器を見上げて呟いている。確かにこれ程巨大な投石器は見た事が無いし、大群で攻めて来るモンスターの群れには有効な武器だろう。

城門前には数え切れない程の冒険者が待機していた。中には冒険者情報誌『冒険者クラブ』に載っているのを見た事のある冒険者もいる。

俺はそこから、サラムの姿を見つけ出した。

「ブレイブ殿、お待ちしてました」

サラムの傍には木箱が三つ並べられていた。

「ブレイブ殿のご要望通り、硬貨を沢山ご用意させて頂きました。ラディズ王の命を助けられたブレイブ殿だからこそその処置ですので、勘違いなさいません様に……」

俺は木箱の一つを開けてみた。中には千カリム硬貨がぎっしりと詰まっている。周りにいた冒険者の眼の色が変わったようだ。気をつける必要がある。

さすが国ともなると太っ腹だが、一番安い硬貨を詰めているのは少しかかりだ。

俺は素早い手の動きで木箱に詰められた硬貨をネカーとネマーに詰めると、近くの城門目掛けてトリガを引いた。木箱に詰まった俺の硬貨を羨ましそうに見つめていた愚か者共の頭に、無数の岩の破片が舞い散った。

どうやら硬貨の威力を理解したらしく、周りの冒険者達は目を反らし始めた。

「戦闘中はこのミゲルが木箱を見張っておりますので、ご心配なく……」

サラムが苦笑いをしながら説明すると、隣にいた兵士が敬礼をした。

「それでは私はこれで……」

そう言つと、サラムは軽く会釈をして持ち場に戻って行った。恐らく王を守るために城に行ったのだらう。

それにしてもミゲルって、騎士団の皆に忍び込んだ時に俺が転ばせた兵士隊長じゃないか！　こんなドジな奴が俺のカリムを守るって大丈夫だらうか。

サラムが去ったすぐ後に秋留がやって来た。危うくミゲルに話し掛けられるところだった。

秋留の髪の毛が少し跳ねている。

「おはよ、秋留」

俺はカリューに先を越されないように素早く言った。しかし秋留は軽くこつちを見ただけで、返事は返ってこない。

「朝は弱いんだよね」

俺は秋留がボソツと言った一言を聞き逃さなかったが、特に突っ込まない事にした。

腰には赤い柄のレイピアを下げている。魔法使いが持つ武器には魔力を込められるものが多いと聞いた事がある。秋留が装備しているあのレイピアにも魔力を込める事が出来るのだろうか。

日が少しずつ昇り、辺りがだんだんと明るくなってきていた。

もうすぐ戦闘が始まる。全員の意識が一つに高まり、辺りの空気が重苦しくなってくる。

秋留の目も今はパツチリとして遠くを見据えていた。

「始まるな」

カリューは背中の中の鞘から剣を抜き出して構えた。周りの冒険者達も武器を構える。俺もネカーとネマーを握りなおした。

城下町を囲む城壁の上にいる射手や魔法使い達も身構えている。

あちこちから呪文の詠唱も聞こえ始めた。止まっていた時が一斉に流れ出したような感じを受ける。

今にも戦闘が始まると思えたその時、突然、城下町の上空に邪悪な気配が出現した。

その邪悪な気配に気づいた秋留は唱えていた魔法を上空に放った。

「コロナ・レーザー！」

秋留のかざした両手から真っ赤なレーザーが上空目指して進む。

空には、黄金に輝くゴーレムが浮かんでいた。

他にも上空の敵に気づいた魔法使いがいたのだろう。色とりどりの光の柱が何本もそのゴーレム目指して突き進んでいった。

「なっ？」

ゴーレムを中心に広がった真っ黒いドーム上の球体が幾筋もの光の柱を飲み込んだ。秋留の放った真っ赤なレーザーも例外ではない。その真っ黒い球は一瞬のうちに城を覆い尽くす程の大きさに広が

った。

「エーテルクラッシュ？」

秋留は上空の球を見上げながら呟いた。

「エーテルクラッシュ、って何だ？」

カリューが秋留に聞いた。

「簡単に言うと、魔力を無効化するフィールドだよ。本来ならマイナス効果をつけられた相手に対して使うものなんだけど……」

秋留は明らかに動揺している。その間にも、上空の球体は大きくなつて来ている。

「城下町から一旦離れるよ！」

秋留は辺りの冒険者にも聞こえるように大声で叫んだ。まるで、空気を伝わって言葉がどこまでも流れているように感じる。

その声を聞いた冒険者達は城壁の外を目指して走り始めた。

俺達が城壁の外に出たのと、城下町全体が黒いフィールドに包まれたのは、ほぼ同時だった。

秋留は隣で魔法を唱え始めた。フィールドから免れた他の魔法使い達も魔法を唱え始めている。当初の予定通り、魔法による遠距離攻撃を仕掛けるためだ。

一方、球体に取り込まれた城下町からも魔法を唱える声が聞こえてきているが、魔法を放出する事が出来ないようだ。

しかも、この黒いフィールド。一度中に入ってしまうと外に出れなくなってしまうようで、球体の中へと助けに入った兵士が外に出られなくなつて右往左往している。

さっきまで俺達がいた城門前は一応フィールドの外だから、ミゲルと俺のカリムは何とか無事のようなのだ。

今のところ、透けて見える球体の中ではモンスターが発生している事はないようだ、この先何が起こるのか不安だ。

暫くすると多くの魔法が遠くに見えるモンスターの大量目掛けて一斉に解放された。

遠くで巨大な火柱や雷が落ちる。誰の耳にも聞こえてきたのである

うモンスター達の断末魔と雄たけび。

しかし、城下町からの魔法の遠距離攻撃が無いため、モンスターの数はほとんど減っていないようだ。

「後ろの球体、なんとかならないのか？」

俺は遅れを取らないように、コートの内側から赤い水晶のついたライフルを取り出しながら秋留に聞いた。

「今、魔法唱えながら考えてるから待つてて！」

そう言うのと、秋留は両手で持った三日月型の魔力の球がついた杖を天にかざして呪文を唱え始めた。

モンスターの本隊が到着するまでに、この黒い球体を何とかする必要がある。しかし今は着々と近づいてくるモンスターの数を減らすのが先決だ。

俺は近くの岩に銃身を固定して、ライフルに取りつけてある照準を覗いた。遥か彼方に蠢くモンスターの一体一体がはっきりと見える。

俺は後々面倒となりそうな鳥類のモンスターに照準を合わせてトリガを引いた。軽い発射音と共に、照準を通して見える一体の鳥類モンスターが燃え上がり大地に落ちる。まずは一匹！

その間にも回りの魔法使い達は次々と魔法を唱えている。

しかし俺は気づいていた。それらの魔法がモンスターに当たる事が少ない事に。所詮は大群目掛けて発射しているだけという事だろうか。

ただ、秋留の放つ魔法だけは、的確にやっかいそうなモンスターを捕らえている。まさか、まだ五百メートルは離れているモンスターの一体一体が見えているのだろうか。

どれ程のモンスターを打ち落としただろうか。

既に辺りの空には鳥類モンスターが飛び交い始めた。そのモンスター目掛けて、城下町、城壁の外にいる魔法使いや射手が狙いをつける。時折、モンスターを外れた矢が空から降って来ているが大丈

夫だろうか。

隣では、カリューがモンスターの大量へ飛び出たくてウズウズしているようだ。モンスターの大量は三百メートル程の距離にまで近づいてきていた。俺の視界に移る水平線全てにモンスターが敷き詰められている。

と、俺は地面が一瞬歪んだような気がした。

「カリュー、俺がネカーぶっ放す場所に行ってくれ！」

俺はライフルを脇に置くと、ネカーを少し離れた大地に向かってネカーをぶっ放す。

何も聞かずにカリューは剣を構えて、その地面目掛けて走り出す。カリューも気づいたのだろう。

「グオオオオン」

地面が突然隆起して、一体のゴーレムが出現した。岩で出来た人型のモンスター。城下町の上空を浮かんで黒いフィールドを維持しているゴーレムとは違い、ただの土色のゴーレムだ。

そのゴーレムが出現したと同時にカリューの剣が唸り上げる。ゴーレムは出現と同時に碎け散った。しかし、同時に地面の至る所からゴーレムが出現し始める。

俺は五感を総動員して、出現した瞬間にゴーレムをライフルで破壊していった。

秋留も遠距離攻撃から手近のゴーレムを倒すために魔法を唱え始めている。

その間にも、今まで遠くに見えていたモンスターの群れが近づいてきていた。

今や城下町の中を含めて、色々な場所で戦闘が開始されている。モンスターの叫び声に交ざって、人々の断末魔も聞こえ始めた。

俺もライフルを打つ合間にネカー、ネマーで周りの冒険者の援護をしているが、それが追いつかない程、辺りは鳥類モンスターとゴ

ーレムに囲まれてきている。

俺は周りで出現しているゴーレムを他の戦士系の冒険者達に任せ、ライフルで遠距離攻撃を再開した。まだまだモンスターの数は減らない。俺はライフルのトリガを引いて、次々と大型モンスターを倒していった。

既に火属性と地属性と水属性のライフルは撃ち尽くした。残っているのは、雷属性のライフルだけだ。

俺は最後の一丁の照準を覗いた。

そこには他のモンスターの十倍の大きさがありそうな一匹のトリルが映し出された。顔は左眼と右眼の大きさが違い、鼻は大きく垂れ下がっている。全身をボロい布で覆っているが、布から出ている堅そうな毛は金色に輝いていた。

普通のトリールは人間サイズで緑色の毛並みをしているはず。そうになると、俺が見ているトリールは、上空に浮かんでいるゴーレムと同様という事だろう。

俺は慎重に照準を合わせるとトリガを引いた。

巨大なトリール目掛けて、稲妻の弾丸が飛んで行く。

見事トリールの額を打ち抜いたが、まだその足は止まらないようだ。俺は何発もトリールの身体を打ち抜いたが、足が止まる気配は一向にない。

ライフルのレンズ越しにトリールを観察してみると、異常な速さで傷が回復しているように見える。

「秋留！ 巨大なトリールが見えるだろ？」

秋留は呪文を放ちながら無言で頷いた。

「何発もライフルを打ち込んだけど、倒れるどころか立ち止まりもしない！」

「今はモンスター軍との距離が遠すぎて強力な攻撃魔法は届かないの。とりあえず、周りの雑魚から片づけていって」

秋留は早口でそれだけ言うと、再び魔法の詠唱を始めた。モンスターの大量との距離は百メートル程に縮まっている。動きの素早い

狼系のモンスター等は既に辺りの冒険者と戦い始めていた。

俺もライフルの照準を覗いてトリガを引き続けた。時折近くにモンスターの気配を感じた時はネカーとネマーをぶっ放す。

「エーテルクラッシュ使える人！」

秋留は突然叫んだ。その声が再び辺りに風に流れるように伝わる。しかし誰からも返事は無いようだ。

エーテルクラッシュ。今、後方に広がっている黒いフィールドがエーテルクラッシュだという事だったが。秋留はどうするつもりだったのだろう。

俺の疑問を察したのか秋留が話し始めた。

「エーテルクラッシュにエーテルクラッシュをぶつけるの！ うまく行けば、お互いの魔法を打ち消しあって、このフィールドを吹き飛ばすと思ったんだけど……」

秋留は齒軋りをしながら呟いた。再び呪文の詠唱を始めながら色々と考え始めたようだ。

「どりゃああああ！」

近くでカリューが吠え、三匹のモンスターが真つ二つにされて宙を舞う。

「ふう」

人間離れな事をした後に軽い感じでカリューは息をついた。

「後方で回復魔法の援護をしてくれてるから、思う存分戦えるよ」

カリューは剣についた血を振り払うと、後ろを振り返りながら言った。

確かに後方には、僧侶や神官達が戦う冒険者達のために回復呪文を唱え続けてくれているが、中にはネクロマンサーも混じって回復呪文らしきものを唱えているようで安心は出来ない。

再びカリューは大地を蹴って近くのモンスターの首を跳ね飛ばすと、宙で一回転してそのままゴーレムの身体を縦に切り裂いた。相変わらず人間離れをした戦い方をしている。

俺は気を取り直すと打ち終わってしまったライフルを投げ捨て、

ネカーとネマーに持ち替えた。近くにいたモンスターの頭を片っ端から打ち砕いていく。やはり長年連れ添った相棒は手に馴染む。

暫くしてネカーとネマーを打ち切った俺は、硬貨の補充をするために城門の前まで戻った。俺の木箱の守りをしていた兵士の周りにモンスターの群れが出来ていた。兵士は俺の姿に気づくと大声で俺を呼んだ。と同時に、モンスターの視線が俺に移る。

「ちっ！」

俺は舌打ちをすると、自分の硬貨をコートの内側から素早く取り出し、ネカーとネマーに補充した。

目の前まで大口を開けて飛び込んでいた狼系モンスターの口内目掛けてトリガを引く。モンスターの身体は五メートル程吹き飛んで城門に激突した。

その光景を目の当たりにしたモンスター数匹が俺の向かって飛び掛って来たが、問題なく全て打ち落とした。

「ブレイブさん、助かりました」

確かミゲルと呼ばれていた兵士は、涙目になって頭を下げている。俺は木箱の中の硬貨をコートの内側に取りつけていた大きな目の袋に、一口一杯まで詰め終えると、ミゲルを無視して再び秋留の隣へと舞い戻った。

「荒れ狂う空を縦横無尽に闊歩する雷帝ヴォルトよ。汝の力を大地の民に知らしめ、全ての者に滅びの恐怖を……」

俺が戻ると丁度秋留が目前に迫ったモンスターの群れ目掛けて呪文を唱えていた。上空には晴れ間にポツンと真っ黒な雲が出現している。

「スプラッシュサンダー！」

秋留の叫びと共に上空の雨雲から幾筋もの雷がモンスターの群れ目掛けて飛来した。雷を受けたモンスターは一瞬で消し炭と化す。

周りにいた魔法使い達も遠距離魔法から中距離魔法へと切り替えたらしく、先程からの攻撃とは異なった魔法が辺りを行き交っている。

しかし、そろそろモンスターの群れとの距離も無くなる。そうになると乱戦となり、味方も巻き込んでしまうような巨大な魔法は使えなくなってしまうだろう。長年コンビを組んでいる様なパーティーなら連携も出来るのだろうが……。

俺もネカーとネマーで近くのモンスターを倒し始めた。中には全く見た事も無い様なモンスターもいる。

辺りはモンスターの死体で地面が見えない程になってきた。冒険者の中には死体となったモンスターを操っている器用なネクロマンサーもいるようだ。

たいした時間も経たない内に乱戦となってしまった。長距離攻撃でどれ程のモンスターを倒せたのだろう。モンスターの上げる土煙で後どれ位の数が残っているのか把握出来ない。

俺がネカーとネマーを打ちまくっていた時、上空の空気が動いたのを感じ、咄嗟に後方に回転した。隣にいた秋留も華麗に宙を舞い大地へと降りる。しかし、逃げそびれた近くの冒険者の何人かの身体が吹き飛んだ。

「また会ったな、冒険者！」

空から舞い降りたのは全身金色をした鳥人だった。前に城下町で俺を襲って来た鳥人だ。

「あの時は名乗らなくて悪かったな。我が名はビュール。誇り高きバルバロス様の五金獣の内の一人だ！」

ビュールと名乗った鳥人は、右手に持った黄金のレイピアを俺にかざしている。俺は問答無用でネカーとネマーをぶっ放した。その攻撃が突然地面から生えた金色の腕によって遮られる。

「ヒキョウナ、ヤツダ」

地面から出現した金色のゴーレムが喋った。俺は咄嗟にエーテルクラッシュの球体がある上空を振り向いた。そこには金色のゴーレムの姿は無かった。

「クロイノ、ナヲナノレ」

金色のゴーレムは俺を指差しながら言った。黒いの、とは俺の事

らしい。

「盗賊ブレイブだ」

俺は挨拶と同時に、鳥人の前に立ちはだかったゴーレムにネカーとネマーをぶつ放した。しかし小さな破片が舞うだけで、ゴーレムの身体を砕く事が出来ない。

俺の紳士的な態度に敬意を表すためか、ゴーレムは金色の腕を俺に繰り出してきた。

動きの遅い攻撃を予想していたが、ゴーレムの動きが速い。俺は回避が間に合わない事を悟り、ネカーとネマーを防御のために胸の前で交差させた。

「死を悟った嵐の猛攻は、仇名す者を滅ぼす爆風となる！ ウィンド・ボム！」

秋留が咄嗟に唱えた魔法が、俺の目前まで迫っていたゴーレムの身体を吹き飛ばした。同時に俺はゴーレムの影に隠れていた鳥人に、ネカーとネマーを放つ。しかし、いつの間に唱えていたのか、鳥人の周りに張り巡らされた風の結界が硬貨を弾き飛ばした。

「ブレイブか。中々卑怯な奴みたいだな」

ビュールと名乗った鳥人はレイピアを鞘に収め、腕を組みながら俺を睨んでいる。騎士ではない俺は、正々堂々などという戯言は嫌いだ。

「そっちのお嬢ちゃんも中々卑怯みたつつぐ」

ビュールが喋り終わるよりも早く、秋留の唱えた炎の魔法がビュールを風の結界ごと吹き飛ばした。しかしダメージは受けていないようだ。

「幻想士の秋留だよ、よろしくね」

「オレノナハ、ボローム」

金色ゴーレムの方も秋留の魔法でのダメージは受けていないようだ。平然と立ち上がり何事も無かったかのように話している。

ビュールとボローム、秋留と俺とで五メートル程間をあけて向き合う形になった。俺達の愛のパワーを見せつける良い機会だ。

しかし、生半可な攻撃では傷もつけられそうにはない。

暫く睨みあう両者。その間も周りでは他の冒険者達が多くのレストランと死闘を繰り広げていた。時折り近づいてくるモンスターは俺のネカーとネマーで瞬殺している。

「全てを吹き飛ばすシルフの咆哮！ ブリーズインパクト！」

沈黙を破ったのは、ビュールの唱えた呪文だった。俺と秋留の間を通り抜ける軌道で飛んできた風の攻撃をお互い左右にジャンプしてかわす。

俺の方へボロームが素早く近づいてきた。金色の巨大な拳を後方にジャンプしながら避ける。避けながらボロームの顔についた二つの小さな穴、恐らく眼と思われる物に向かってネカーとネマーを同時にぶつ放した。

金属に弾かれる音と共にあっさり硬貨は弾かれた。一体奴の身体の構造はどうなっているのだろう。俺の攻撃に全く怯まないボロームは、連続で左右の拳を繰り出してきた。それを一つ一つ慎重に避けながら、ボロームの全身に硬貨を打ち込んだが、全くダメージを与える事は出来ない。

「ヨケルダケカ！」

ボロームの台詞と共にボロームの足に力が入った。力を入れた地面にヒビが入る。

蹴りが来る事を予想した俺は、俺の身長の二倍程あるボロームの足の間を潜って背中側へ回った。ボロームの蹴りが空気を切り裂いて宙を流れる。

空振りした事により体勢を崩したボロームの軸足にネカーとネマーを打ち込んだ。更に体勢を崩したボロームが俺の方に倒れて来る。倒れてくる事も予想していた俺は、その場所を避ける時にボロームが倒れるであろう位置に小型の火薬瓶を設置した。

小さな爆発が起こりボロームの身体が浮いた。

乱戦時に使うよう火薬の量を調節して作った火薬瓶だ。周りに被害を出ない程度にしている。それでもダメージは与えられただろう

か。

しかし次の瞬間、土煙の中から繰り出されたボロームの右腕をまともに腹に喰らってしまった。口の中に血の味が広がる。

俺は空中で一回転して地面に着地すると、ボロームがいると思われる土煙の中に向かってネカーとネマーを発射した。再び硬貨が弾かれる音がして、土煙からボロームの全身が勢い良く飛び出してくる。

照準を再びボロームの眼に合わせて連続でトリガを引いた。今度はダメージ目的ではなく、視界を遮るために。

俺の予想通りボロームの攻撃は俺の脇をかすめた。通り過ぎたボロームの背中を確認すると、火薬の効果だろう。常人には見逃してしまうほどの小さなヒビが入っている。俺はそのヒビ目掛けてネカーを打ち込んだ。

「グオッ」

ボロームの口から初めて苦痛の音が漏れる。俺を狙っていたボロームの拳が勢い良く地面を打った。何か嫌な予感がした俺は、その場から上空に飛んだ。

爆音と共に辺りの地面から無数に生える岩の拳。その無数の攻撃は、辺りで戦闘していた冒険者や他のモンスターを吹き飛ばした。近くで戦っていた秋留とビュールは地面から生えた拳の攻撃を咄嗟にかわしたようだ。

どうやら、城の近くに突然出現したゴーレムは、このボロームが生み出したものらしい。無数に生えた岩の拳は、その巨大な全身を地上に現した。

無数の岩ゴーレムが一斉に俺の方を振り向く。俺はネカーとネマーを連射して、次々に岩ゴーレムの頭を砕いていった。しかし量が多い。

左方から繰り出された岩ゴーレムの攻撃を上体を反らしてかわし、正面から攻撃してきた岩ゴーレムの頭をすれ違い様に打ち砕いた。

避けながら攻撃をするという動作を繰り返していた時、突然、右

にいた岩ゴーレムの身体が砕け散り、俺の方へ無数の岩の破片が飛んできた。

ネカーとネマーの連射で岩をほとんど打ち落としたが、いくつか俺の身体に命中する。

そして、体勢が崩れた隙にボロームが再び攻撃を繰り出してきた。ボロームの風を切り裂く左腕の攻撃が、俺の右肩をかすめる。

若干の痛みを伴ったが俺はそのままボロームの後方へ回り、背中の小さな亀裂に向かってネカーとネマーを連射した。

再び上がるボロームの絶叫。ボロームが振り向き様に繰り出した右拳は、近くにいた猿型のモンスターを殴り飛ばした。

依然として俺目掛けてゴーレムが次から次へと攻撃を繰り出してくる。

俺はボロームの攻撃を避けつつ、ボロームの背中へと攻撃を繰り返し続けた。ボロームの背中の傷は明らかに広がってきている。

と、その時、風の結界をまとったビュールがボロームに激突した。秋留が魔法で吹き飛ばしたらしい。

「死を悟った嵐の猛攻は、仇名す者を滅ぼす爆風となる……」

秋留が俺の隣に走りこみながら魔法を唱えた。

その詠唱を聞いたボロームがビュールの前へと出て、対抗呪文を唱え始める。

「エーテルクラッシュ！」

ボロームの詠唱と共に目の前に真っ黒な球体が出現した。その球体を確認したと同時に秋留がボロームとビュール目掛けて走り始めた。

「ブレイブ！ 援護して！」

秋留が呪文の詠唱の途中で俺に叫んだ。という事は先程唱えた詠唱が無駄になったという事か。

俺はあまり深い事は考えずに、ネカーとネマーをビュールとボロームに乱射した。同時に俺もビュールとボローム目指して走り始める。走ってる途中もネカーとネマーを乱射し続けた。

ビュールが警戒してか秋留に向かってレイピアを振り上げる。

俺は飛竜のコートの内ポケットから真っ白い毛糸の玉を取り出すと、ビュールのかざしたレイピアに向かって投げつけた。

「な、なんだ！」

レイピアに当たって開いた白い毛糸の玉『縛りの糸』がビュールをつつむ風の結界に取り込まれていく。

ビュールの風の結界は堅い物質などは弾き飛ばすが、蜘蛛の糸のような軽い物は巻き込んでしまう事を前回の戦いで見抜いていた。

視界が悪くなったビュールは咄嗟に風の結界の魔法を解いた。障害物のなくなったビュールの身体へと周囲を舞っていた縛りの糸が降り注ぐ。

身動きの取れなくなったビュールは地面へと舞い降りた。その間も俺はボロームの眼に向かってネカーとネマーを乱射して視界を遮り続けていた。

「水の精霊、美しき精霊ウンディーネよ。汝が使いし全てを写す優しき鏡を我に与えたまえ……」

ボロームの目の前まで行った秋留が呪文を唱え始めた。ボロームに背を向けて。秋留の目の前には、先程ボロームが出現させたエーテルクラッシュの球体が浮いている。

「ナニヲスルツモリダ！」

ボロームが俺からの攻撃を右腕で防ぎながら左腕を振りかぶる。

俺はボロームの後ろに回り込み再び背中への傷に向かってネカーとネマーを乱射した。

「ミラーオブアクア！」

「グオオオッ！」

ボロームが叫んだのと秋留が魔法を唱えたのは同時だった。秋留のかざした両手の眼の前に水で出来た鏡が出現する。

秋留がその鏡をエーテルクラッシュにぶつけた。

辺りを閃光が包み、エーテルクラッシュは凄い勢いで飛んでいく。城下町全体を覆う巨大なエーテルクラッシュへと。秋留は、相手の

魔法を跳ね返す様な魔法を唱えたようだ。

巨大な風船を小さな針で破裂させるように、二つのエーテルクラッシュは突風と共に消え去った。辺りに転がっていたモンスターや人の亡骸も突風と共に崩れ去る。

「火炎の王を守りしサラマンダーよ。炎の槍となり我が意に従え！
フレイム・スピア！」

秋留の唱えた魔法は身動きの取れなくなったビュールへと。俺の放ったネマーとネカーの効果は辺りのモンスターを巻き添えにして暴れ狂うボロームの背中へと飛んでいく。

「ぬがあああ！」

「ブオオオオム！」

ビュールは炎の槍が身体へ突き刺さり全身が燃え始めた。ボロームは背中 of 小さな傷が全身へと行き渡り崩れていく。

五金獣と名乗っていたビュールとボロームを倒した。

しかし安心は出来ない。

既に辺りに無傷の冒険者はいないからだ。ともに立っているのは数人だった。いつしか、後方で回復魔法の援護をしていた僧侶達も力尽きている。

少し離れた所でカリューが死体の山を築いているのを除いて、まだまだ人間側が不利なのは変わらない。

そして、俺達の目の前には、遠距離攻撃で不死身の回復力を見せた巨大なトロールが立ちはだかっていた。

「ふう……、さて、あのデカイのはどうする？」

「巨人には巨人を……」

秋留はそう呟いて、眼を瞑り呪文を詠唱し始めた。

「岩山の巨人ジャイアントロックよ……」

その間に俺は秋留の傍でネカーとネマーを構え、俺達に襲いかかるモンスターを確実に仕留めていく。

俺の視界の端で、カリューが金色のオークと対峙しているのが見える。ホープキング山で出会った、ゴールドオークのようだ。

「我の前にその力を示せ、ジャイアント・アーム！」

俺が援護をしている後ろで秋留が呪文を唱えた。目の前の空間が歪み、勢い良く巨大な岩で出来た腕が飛び出す。

その巨大な岩の腕を、またしても巨大なトロールの腕が向かえ打つ。

気持ちの悪い音と共に、弾け飛んだのはトロールの金色の腕だった。その見るからに痛そうなダメージでもトロールは何事も無かったかのように、残った左腕を秋留目掛けて振り下ろす。その激しい攻撃を秋留は宙を舞う羽毛の様に華麗に避けた。

秋留は宙を舞いながら再び呪文の詠唱を始める。俺は秋留の傍に駆け寄り、辺りから襲ってくるモンスターを打ち落としていった。

秋留がトロールに呪文を放ちつつ、俺がネカーとネマーで辺りにモンスターの死体の山を築いていく。

いつしか俺と秋留、そして少し離れたカリューの周りの地面は、モンスターの死骸で埋め尽くされていた。

「うおおおお！」

カリューの持つ鋼鉄の剣がゴールドオークの持つ三叉の槍と交錯する。

「甘いわあ！」

ゴールドオークは叫び、両手で持った槍を捻ると、三叉に挟まれたカリューの剣が真っ二つに折れた。

舌打ちをすると、武器を失ったカリューは後方に飛び迫り来る槍の攻撃をかわす。

「氷の精霊セルシウスよ。氷の契りに従い、全てを撃つ弾丸となれ……。フリーズバレット！」

槍を繰り出しながらゴールドオークは呪文を詠唱した。ゴールドオークの目の前に無数の氷の弾丸が生まれる。

俺は咄嗟にネカーとネマーの照準をその氷の弾丸に向かって合わせた。

巨大トロールの口から紫色の液体が俺目掛けて飛んでくる。その

攻撃を素早く転がってかわしたが、転がった先にいた蜥蜴型のモンスターが尻尾の攻撃を左眼に喰らってしまった。

片目でネカーの照準を蜥蜴モンスターの脳天に合わせてトリガを引いた。やはり片目では照準が合わないようで、蜥蜴モンスターの腹が吹き飛んだ。

俺は左手を左眼に当て応急処置をしながら、右手のネマーで秋留とカリューの援護を続けた。ちなみにカリューは、氷の弾丸を落ちていた剣で全て叩き落とし、引き続きゴールドオークと戦っている。

「はあ、はあ……」

隣の秋留は肩で息をしている。目の前のトロールは身体中欠損しているが、みるみる内に足りない部分を補っているようだ。

「秋留、大丈夫か？」

俺は秋留の援護をしながら聞いた。

「あ、後少しだから……」

そう言うのと、秋留は再び呪文を唱え始めようとした。と、横から蜥蜴型のモンスターが秋留に飛び掛ったきた。

「はあっ！」

モンスターの腹に秋留が素早くレイピアを突き刺した。人間の頭大程のモンスターがレイピアに指されて小さく爆発した。やはりあのレイピアは普通の武器ではなかったようだ。

「ふう…… 本当なら木っ端微塵にするつもりだったんだけどね」

秋留が額の汗を拭って言ってきた。秋留の魔力もそろそろ限界だろう。俺はコートの内側から、とっておきの一品を取り出して秋留に手渡した。

「こ、これは？」

肩で息をしながら、秋留は聞いた。

「魔力の実だ。食べれば魔力が回復する事間違い無しだよ」

俺は既に回復した左眼から手を離し、両手でネカーとネマーを操りながら秋留に言った。

「これが魔力の実？ 初めて見るよ」

トロールの攻撃を器用にかわしながら、秋留は言った。

魔力の実とはその名の通り、魔力を回復する事の出来るアイテムの一つだ。希少価値が高く、まず市場には出回っていない高級品だ。魔法の使えない俺が、どうしてそんなものを持っているのかは企業秘密だ。

秋留は軽く頷くと、ドングリ大程の実を口に放り込み噛み砕いた。秋留の身体の内側から暖かな白い光が漏れ出す。

「助かったよ、ブレイブ！」

秋留の顔に生気がみなぎっているのが分かる。秋留は力強く魔法の詠唱を始めた。

「ウンディーネの怒りは全てを飲み込む反流となる……」

魔法を唱えるには、魔力の籠った言葉を発する必要がある。

俺も長い間冒険者をしていてその程度の知識は身につけている。

トロールが秋留目掛けて、回復させた右腕を振り上げた。腕を吹き飛ばしただけでは止まらない！俺はそう判断し、ネカーとネマ―に火薬を挟んだ硬貨を入れた。打ち尽くすまで連続で巨大トロールの左足を狙う。

巨大な爆音と共にトロールの左足が木っ端微塵に吹き飛んだ。足を失い体勢を崩したトロールだったが、その拳は尚も秋留に向かって振り下ろされる。

「流水の力を我が手に宿し怒りを静める剣となれ……」

秋留の呪文の詠唱はまだ終わっていない。この後に魔法を放出するための言葉を発する必要がある。

魔法の威力を上げるためには、魔法を放出した時のイメージも行わなくてはいけない。秋留は今まさにイメージを強めている段階に違いない。

このままでは間に合わない。トロールの右足を狙おうにも、火薬の弾丸を撃ち尽くしてしまい、硬貨を詰め替えている時間がない！俺は意を決して秋留の前へと移動した。秋留の事は俺が守る。

その時、トロールの右足が斜めにずれた。鋭い斬撃だった。両足

を失ったトロールが天を仰ぐ。

「危なかったな。ブレイブ、秋留」

傷だらけになりながら、カリューが俺達の前に現れた。ゴールドオークと戦っていた場所を振り返ると、そこには金色の毛並みを真っ赤に染めた首の無いオークの死体が転がっていた。

秋留が力強く頷き、呪文詠唱最後の言葉を発する。

「フラッドブレード！」

秋留の唱えた呪文と共に、秋留の右手から透き通った刃が生まれた。その鋭い刃が一直線にトロールの醜い身体へと突き進む。

崩れかけた両腕を身体の前でクロスさせて、トロールは防御体勢を取った。

しかし、水で出来た鋭利な刃物は、そこに何も無いかの様にトロールの身体を通り過ぎて、やがて自然に消滅した。

目の前の両足を失ったトロールは暫く動かなかったが、やがて肉を切り裂く音と共に、左右に切り裂かれていった。

真っ二つになったトロールの身体は白い湯気を発しながら再生を繰り返そうとした。

「おい、秋留、大丈夫なのか？」

俺は両手でネカーとネマーを構えながら秋留に聞いた。

「もう、目の前のトロールから、生命力が感じられない」

秋留が大きく息を吐き出しながら言った。俺は目の前のトロールの左半身を眺めた。もうもうと上がっていた湯気が収まって行く。

「このトロールは強大な生命力で傷や欠損箇所を補っていたに過ぎないの」

「無限に回復する身体とは別に、体力は無限じゃなかったって事だな」

辺りにまだ残っているモンスターを切り倒しながらカリューが言った。俺もネカーとネマーで生き残った雑魚共を葬っていく。

「無限じゃないけど、強大な体力を削るのは大変だったけどね」

大きく深呼吸しながら、秋留が言った。

こうして見回すと、襲ってくるモンスターもほとんどいなくなつた。指揮官を失つた兵隊の様に逃げ去っていくモンスターの姿も見える。

「とりあえず私はまだ助かりそうな負傷者の回復をするから、ブレイブとカリューは襲ってくるモンスターの撃退お願いね」

秋留はマントを翻しながら言うと、近くに倒れている冒険者の元に行つて、脈を確認すると回復呪文を唱え始めた。

一方、俺とカリューはそれぞれの武器を構えなおして、襲ってくるモンスターを倒しに行つた。

エピソード

数多くのモンスターを打ち倒した戦闘終結の翌日。

俺達三人はアラム城の二階にある会議室に呼ばれていた。破壊の限りを尽くされたアラム城の中で、運良く残ったまともな部屋の一つらしい。

実は俺達が外門前でモンスターと戦っている間に、このアラム城にも金色のモンスターが出現したらしかった。

何本もの足を持つ金色の蜘蛛のモンスター『ザナック』と名乗ったらしい。何人もの兵士が死傷者となってしまうが、最終的に騎士団長ガリアスが二本の剣でザナックの身体を四等分して決着がついたという事だ。

そのガリアスは瀕死の重傷を負って、今は城下町にある魔法医の元で治療を受けている。

「ご苦労だった。秋留、カリュー、ブレイブよ」

秋留の後ろならまだしも、カリューより後に名前を呼ばれたのが気になるが、黙ってラデイズ王の話を聞き続ける事にする。

「戦闘が始まってしばらくは、余も城のテラスの望遠鏡からお主らの戦いっぷりを見ていたんだが、すさまじい戦いっぷりだったな」

この王さんは、暢気に戦場視察か。ライフルをテラスにぶち込んでやれば良かったかな。

ラデイズ王は尚も興奮しながら話し続けた。

「あの戦いは、正に戦場を駆け抜ける嵐、いや、旋風の様であったぞ！」

俺の隣ではカリューが王様の声に真剣に耳を傾けて頷いている。奥の秋留は聞いているのかいないのか分からない表情をしていた。

「……うむ。お主らパーティーをレッド・ツイスターと呼ばせてもらおう」

レッド・ツイスター……。紅い旋風か？ 数いる冒険者のパーテ

イーでも異名を持つパーティーはそれ程多くは無い。

「ありがたき幸せ」

カリューは頭を下げると言った。いかにも正義大好きなカリューらしい台詞だ。

その後ラデイズ王の苦労話を長々と聞かされた拳句、俺達は手ぶらで会議室を追い出されようとしていた。

何か忘れているんじゃないか？ ラデイズさんよあ……。

俺は眼に力を入れて、目の前の忘れっぽい王を睨んだ。

「レッド・ツイスターの更なる活躍を期待しておるぞ。ではそろそろ、余も忙しい身故……」

会議室に仮設置された不釣り合いな玉座を立ち上がりとしたラデイズ王が、俺達、いや、秋留の方を見つめたまま暫く硬直した。

「おお、そうじゃった、そうじゃった。報酬の事をすっかり忘れておった」

ラデイズ王は近くの衛兵に声を掛け、大きな錢袋を三つ用意してきた。思わず涎が垂れそうになる。

「お主らの活躍は想像以上だった、約束の千万カリムに上乘せした二千万カリムを用意した」

最後の最後で太っ腹なラデイズ王様だ。俺は尊敬の眼差しでラデイズ王の持つ錢袋を見つめた。

城内のレストランで豪華な食事をラデイズ王からご馳走された後、俺達は城下町の大通りを揃って歩いていった。

「レッドツイスターだってさ」

秋留が俺の横を歩きながら言った。秋留は戦闘でボロボロになった装備を外して、今は普段着の様なラフな格好をしている。

「名誉ある事だな」

カリューが右手を腰に刺した剣の柄を握りながら言った。こいつの人間離れた強さには本当に驚かされた。

「これからどうするんだ？」

無神経なカリューが聞いた。

俺達はモンスターの大量を退けるために組んだ一時的なパーティー。魔族討伐組合でパーティーを募集した訳でもなければ、昔からの知り合いでもない。

カリューが軽々しく言った言葉を、俺は城を出てから恐くて聞けないでいた。ある意味、カリューの事を尊敬する。

「剣士、盗賊、魔法使い……」

秋留が考えるように呟いた。

「私達パーティーには、神聖魔法が使える僧侶とか聖騎士がいないよねえ」

暫く秋留の言った言葉を理解出来ないでいると、隣を歩くカリューが拳を握って叫んだ。

「俺は剣士じゃなくて、勇者だ！」

「はは、じゃあ私は厳密に言ったら幻想士なんだけどな」

俺達は声を合わせて笑うとアラム城下町の城門を潜って、まだ見ぬ土地に向かって歩きだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0240d/>

盗賊ブレイブ@勇者パーティー御一行様～出会い～

2010年10月8日14時35分発行